

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (5)
— 『キエフ年代記集成』 (1151 ~ 1158 年)

中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香

富山大学人文学部紀要第 65 号抜刷

2016年8月

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (5) — 『キエフ年代記集成』 (1151 ~ 1158 年)

中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香

6659 [1151] 年続き

その頃, ユーリイ [D17] はヴァシレフ¹⁾ に陣を構えていた。

ユーリイ [D17] はこれ〔ヴァチェスラフの使者に〕に応じて自分の使者を派遣し, ヴァチェスラフ [D16] に言った。「兄よ, わたしはあなたに拝礼します。あなたが言うことは正当です。あなたは, わたしにとって父にあたる御方です。もし, あなたがわたしとの約定を望むのなら, イジャスラフ [D112:I] をヴラジミルへ, ロスチスラフ [D116:J] をスモレンスクへと行かせて下さい²⁾。そして, われら二人は自ら約定し〔と和解し〕ようではありませんか」。

〔これに答えて〕ヴァチェスラフ [D16] は言った。「そなたには, 7人の息子たち³⁾ がいるが, わしはかれらをそなたのもとから追い払うつもりはない。わしの息子⁴⁾ たちは, イジャスラフ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] のたった2人である。他は年少の〔息子たち〕だ。しかし, 弟よ, わしはそなたに言明する。【431】 ルーシの地のため, キリスト教徒のために, 自分の息

1) 「ヴァシレフ」(Василев)は, ドニエプル川の右岸支流ストウグナ川沿岸で, 河口から40kmほど遡ったところにある城砦。現在のヴァシリキーウ市(Васильків)にあたり, キエフの南南東50kmほどのところに位置している。ここからキエフまでは街道がつながっていた。

2) このユーリイ [D17] の提案の意図は, イジャスラフ [D112:I] がヴァチェスラフ [D16] にキエフ公就位を認めた現在の機会を利用して, ヴァチェスラフ [D16] からユーリイ [D17] への兄弟ラインの公位継承を実現し, 甥(ムスチスラフ [D11] の息子たち)たちへの継承を排除することにあった。

3) このとき存命のユーリイ [D17] の息子たちとして, アンドレイ [D173], グレーブ [D178], ボリス [D170], ムスチスラフ [D17], ヴァシリコ [D174], ミハルコ [D175], フセヴォロド [D177:K] の7人を指すのだろう。

4) ここでヴァチェスラフが言う「息子」とは, 公族の間の年長制序列の枠組みの中で「息子」にあたる甥たち, とくに長兄ムスチスラフ [D11] の息子たちを指している。

子たちを連れて、自分の〔城市である〕ペレヤスラヴリ⁵⁾ およびクルスク⁶⁾ に引っ込んでおれ。他にも、そなたの〔城市〕ロストフ・ヴェリーキがあるではないか。オレーグ一族〔の諸公〕⁷⁾ は、それぞれの郷国へと帰らせよ。そして、キリスト教徒の血を流さないことについて約定をしようではないか。あるいはそなたは、かつてそうしたように、おのれの思惑にしたがって軍を進めようというのか。

さて、ヴァチエスラフ [D16] は、金門の上に掲げられている聖なる聖母〔の聖像画〕⁸⁾ を見つめて、こう言った。「どうか、このいとも浄き女宰〔聖母〕とわれらが神であるその御子が、この世でものちの世でも〔われらを〕裁いて下さいますように⁹⁾」。こう言うと、〔使者である〕ユーリイ [D17] の家臣を〔ユーリイのもとへと〕帰らせた。

翌日¹⁰⁾、ユーリイ [D17] は、戦闘準備を整えてキエフへと軍を進め、ルイベジ川¹¹⁾ の〔キエフの丘から見て〕対岸に部隊を布陣させ¹²⁾、ルイベジ川をはさんで戦闘が始まった。

5) 1151年4月にペレヤスラヴリの公だったユーリイの長男ロスチスラフ [D171] が没しており（『イパーチイ年代記(4)』: 359頁、注185参照）、明記されていないが、次に年長のアンドレイ [D173] が公座を継いでいたと推定することができる。いずれにせよ、ペレヤスラヴリはルーシにおけるユーリー一族の拠点都市だった。

6) 1146年、スヴァトスラフ [C43] がユーリイの息子イヴァンコ [D172] にクルスクを引き渡して（『イパーチイ年代記』3: 330頁参照）以来、イヴァンコ [D172] からグレーブ [D178] へと継承されて、1148年までこの城市はユーリー一族の所領となっていた。1149年に一時的にスヴァトスラフ [C43] が支配するが、その後しばらくは、クルスクの支配公については不明。しかし、1151年の時点でクルスクがユーリー一族の所領と見なされていたことは確かである。

7) ユーリイの遠征に参加した、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] とその甥のスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G]、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] 等を指している。

8) 1030年代にヤロスラフ賢公が建立したキエフの黄金の門（Золотые ворота）の上部には、受胎告知教会が建てられていたと『原初年代記』の1037年の記事に見える。ヴァチエスラフ [D16] はおそらくこの教会の本尊にあたる受胎告知の「聖母」のイコンを仰いで祈願したと考えられる。

9) これは神判としての戦争を宣言するときの定型句（下注182も参照）で、ユーリイ [D17] が譲歩することはあり得ず、戦争による決着しかないことを、ヴァチエスラフ [D16] はここで確信したのである。

10) マフノヴェツの注によれば、1151年4月30日（月曜日にあたる）のこととしている [Літопис руський, 1989: C.246] が、日付まで正しいかどうかは不明。ただし、これに続く戦いが1151年5月から6月にかけて行われたことは確かである。

11) ルイベジ川（Лыбедь）は、キエフの城市の南西を流れるドニエブル川右岸支流。ユーリイ [D17] はヴァシレフとキエフを結んでいる「ヴァシレフ街道」（Василевский путь）を通して、その途上で交差する形に流れるルイベジ川に入ったと考えられる。

12) 『ラヴレンチイ年代記』6659(1151)年の並行記事には、『イパーチイ年代記』にはない文言として「イジャスラフ [D112:I] は、かれ〔ユーリイ [D17]〕に対峙して、自分の叔父ヴァチエスラフ [D16]、自分の兄弟ロスチスラフ [D116:J]、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35]、射手ともに布陣した。射手はルイベジ川を挟んで射撃をした」と記されている。

アンドレイ・ユーリエヴィチ [D173] とウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] は、ポロヴェツ人とともに、軍勢を進めて、ルィベジ川を渡った。かれらは、渡り切ると、スハヤ・ルィベジ¹³⁾ のところに移動した。そのことについて、かれ〔アンドレイ〕の従士たちは知らなかった。アンドレイ [D173] はポロヴェツ人を引き連れただけで進撃した。ウラジーミル [D181] については、その時まだ年少であったことから¹⁴⁾、かれの守り役¹⁵⁾ が〔進撃を〕許さなかった¹⁶⁾。

アンドレイ [D173] は小勢で突進し、敵の部隊に追い付かんばかりだったが、ひとりのポロヴェツ人が、かれの馬の手綱を取って引き戻した。そして、かれ〔アンドレイ〕は自分の従士たち¹⁷⁾ に向かって罵声を浴びせた。なぜなら、ポロヴェツ人の全軍はかれ〔アンドレイ〕に遅れを取っていたからである。アンドレイ [D173] は、神と自分たちの親たちの祈りに守られて、再び¹⁸⁾ 無傷で【432】 帰還することができた。

ルィベジ川を挟んでの射撃は、夕方まで続いた。〔ユーリイ陣営の〕ある者たちは、〔ルィベジ川を〕渡って、城壁前の低地で、ヴァチエスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] 指揮下の部隊と相対して戦い、別の者たちはリャフ門¹⁹⁾ の前の砂地で戦った。

イジャスラフ [D112:I] は、これらのことをすべての兄弟たちに知らせて²⁰⁾、配下の部隊の従士たちに隊列を組んで、隊列を乱さないように命じた。そして、全員がひとつになって、かれ〔ユーリイ〕を討つべく突き進むように命令を発した。そのように行動し、みながかれを討つ

13) 「スハヤ・ルィベジ」(Сухая Лыбедь) は、「涸れたルィベジ川」を意味する。この川はキエフの城市のすぐ西側に源流を持つが、その最上流域はその名が示す通り、涸れ川となっていた。

14) ウラジーミル [D181] の生年はわかっていない。かれの母であるトゥゴルカンの娘が、父アンドレイ [D18] と結婚したのが 1117 年のことであるから (イパーチイ年代記 (1) : 265 頁, 注 122)、この時点で年少であるということは、結婚してからずいぶん経ってから誕生したのであろう。

15) 「守り役」(кормилец) は貴人の養育、教育にあたる師傅に相当する。なお、1171 年の項に、ウラジーミル [D181] が自分の守り役だった「パウク」(Паук) という男を、シムスク (Шюмеск) の代官として派遣した ([ПСРЛ Т.2, 1908: Стб. 546]) という記事があることから、ここでもこの人物を指すのだろう。

16) 後の記述から、ウラジーミル [D181] は、戦闘に参加する代わりに、援軍要請のためにガーリチ公ウラジミルコ [A121] のもとに派遣されたことが分かる。

17) この「従士たち」(дружина) は文脈から見て、アンドレイとともに行動したポロヴェツ人たちを指しているだろう。

18) ここで「再び害されることなく」(опять неврежень) と言っているのは、1150 年 2 月のルチェスク城下の戦闘で、アンドレイがやはり「害されることなく無傷」(безъ вреда) で救われたこと ([イパーチイ年代記 (4) : 329 頁] 参照) を踏まえている。

19) 「リャフ門」(Лядские ворота) はキエフの丘のヤロスラフ街区の南の城門で、ドニエプル河岸に出るのにもっとも近い場所にある。先の記述によれば、グロドノ公ボリス [F11] がここを守っていた ([イパーチイ年代記 (4) : 368 頁] 参照)。

20) 「知らせて」の原文は видѣв だがこれだと意味が通らない。ここは、вѣдѣв の誤りと解して訳した。

べく突進した。黒頭巾族もあちこちから集め、かれらをルイベジ川の至る所に突進させた、〔敵軍に〕浅瀬を渡らせてしまった者もいた。このようにして、〔イジャスラフ軍は〕かれら〔ユーリイ軍〕を撃ち破り、他の者は捕虜に獲り、他の者は馬を捨てて逃げ、多くの者を撃ち殺した。

ここで、〔ユーリイ軍に加わっていた〕原野のポロヴェツ人のセヴェンチ・ボニャコヴィチ(Севенч Бонякович)が殺された。かれは「自分の父親と同様に、金門で斬り合いをしたいものだ²¹⁾」とかねてから言っていた人物だった。

その時からは、〔ルイベジ川の〕対岸へ渡ることができた者は一人もいなかった。ユーリイ[D17]は、自分の部隊を転回して撤退させた。自分の姻戚〔娘の舅〕のウラジミルコ[A121]が、ガーリチから救援に向かっているという報告が入ったからである。そこで、かれ〔ウラジミルコ〕を迎えるために、軍を転じたのである。

イジャスラフ[D112:I]とロスチスラフ[D116:J]は、ヴァチェスラフ[D16]のところに来て、こう言った。「かれら〔敵〕は撤退して行きました、かれらのあとを追撃しましょう」。

ヴァチェスラフ[D16]は言った。「息子よ。見よ【433】、これは神の助けの始まりである。かれら〔敵たち〕はここにやって来たが、何も得るものはなかった。ただ、辱めを受けただけに過ぎない。息子よ、そなたたちは、急ぐことはない。すでに神が定めている。夕方からでもよいだろうし、そうでなければ、明日でもよい。よく協議をしたうえで、かれら〔敵〕を追いかけよう」。

イジャスラフ[D112:I]は、グロドノのボリス[F111]に言った。「なんとかして、〔敵が退却した〕ベルゴロドへ行くべきであろう。兄弟よ、そなたは、松林を通過してベルゴロドへ行け」。ボリス[F111]は〔答えて〕言った。「兄弟よ、分かりました、わたしは準備ができています」。

さて、ユーリイ[D17]はベルゴロドにやって来ると、ベルゴロド人に言った。「お前たちは、わしの民である。わしのために城門を開けよ」。ベルゴロド人は言った。「キエフ〔の城門〕はあなたのためには開かなかったはずですよ。われらの公は、ヴァチェスラフ[D16]とイジャスラフ

21) 「セヴェンチ」(Севенч)はユーリイと同盟していた原野のポロヴェツ人の首長。かれの父親ボニャク(Боняк)の名は『原初年代記』1096年～1107年の記事に何度も登場するポロヴェツの部族の有力首長。キエフの「金門で斬り合いをしたい」というのは、ボニャクが1096年にキエフに來襲して「いまにも城内に入る」〔ロシア原初年代記：252頁〕ところまで迫った時のことを言っているのだろう。

なお、ボニャクについては、『イパーチイ年代記』6648(1140)年の項に、流刑地コンスタンティノポリスから戻って来たポロツクの公グヴォロド=ヴァシリコ[L11]とイワン[L12]が、キエフ公に対する当てつけとして「疥癬病みのボニャクの健康を祈願した」という記述がある。〔イパーチイ年代記(2)：316頁、注170〕。ボニャクがルーシの諸公の間でも名が知られたポロヴェツ人首長だったことがわかる。

フ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] です」。

ユーリイ [D17] はこれを聞くと、松林を通過してヴェルネフ²²⁾ (Вернев) へ行った。そこから、土塁線²³⁾ を越えて、ビズヤニツァ²⁴⁾ (Бъзяница) で陣を張った。ここで、ガーリチ公ウラジミルコ [A121] が来るのを待っていた。なぜなら、かれ〔ユーリイ〕は、キエフから軍を引いたときに、自分の甥ウラジミル・アンドレエヴィチ [D181] を派遣して²⁵⁾、かれ〔ウラジミルコ〕を呼び寄せようとしていたからである。

イジャスラフ [D112:I] は、このことについての報告を得ると、ユーリイ [D17] を見つけようと出発した。〔ユーリイが〕ガーリチのウラジミルコ [A121] と合流しないように警戒していたのである。

こうして火曜日²⁶⁾ に、ヴァチェスラフ [D16]、イジャスラフ [D112:I]、ロスチスラフ [D116:J] は、十分の一教会の聖なる聖母および聖ソフィアに拝礼して、〔キエフの〕城市を出撃した。

キエフ人は、ヴァチェスラフ [D16]、イジャスラフ [D112:I]、ロスチスラフ [D116:J] に言った。「〔われわれ〕全員を出撃させて下さい。棍棒しか〔武器として〕手に取るものがない者でさえ〔出撃〕できます。**[434]** もしそうではなく、出撃しようとしめない者がいれば、われらに引き渡して下さい。その様な者は、われらが打ちのめします」。こうして、かれら〔キエフ人〕は出撃し、誰もが互いに遅れを取ることはなかった。みな喜んで自分たちの公たちのあとに従い、騎馬で徒歩で大軍が進み、ズヴェニゴロド²⁷⁾ (Звенигород) で宿営を張った。

翌朝の水曜日²⁸⁾、遅くに陣を払って出発し、〔ヴァシレフの城市までは〕至らずに、ヴァシレ

22) 「ヴェルネフ」(Вернев) は、「チェルネフ」(Чернев) の誤記と考えられる。「チェルネフ」とすれば、イルペニ (Ирпень) 川左岸の城市で、キエフからだと南西に約 46km の地点にある。現在の、チョルノホロドカ (Черногородка) 村に相当する。

23) 「土塁線」(валы) はキエフの南方に広がる高さ 10m ほどの土塁群のことで、古くに騎馬民族の襲撃からの防衛のために築かれたものとされている。10 世紀末～11 世紀の建築と推定される土塁は部分的に現存している。

24) 「ビズヤニツァ」(Бъзяница) については所在地不明。バルソフは、イルペニ (Ирпень) 川沿岸のチェルヴォノゴロドキ (Червоногородки) の森を所在として推定している [Барсов 1865: С. 17-18]。

25) 上注 16 を参照。

26) マフノヴェツの計算に従えば、1151 年 5 月 1 日の火曜日に相当する。[Літопис руський, 1989]

27) 「ズヴェニゴロド」(Звенигород) の位置をはっきりと特定することは難しいが、キエフとヴァシレフの間の街道沿いにあることは確かである。『原初年代記』では、1097 年のイパーチイ写本系統の記事の中にもこの地名があり、「夜になって、キエフからおよそ 10 露里の小さな城市ズヴェニゴロドへかれ〔ヴァシリコ [A13] を連れて行った」と記されている。研究者の中には、キエフの丘から約 16km 南西に位置する、現在のヴィタ＝ポシトヴァ (Віта-Поштова) の遺構に同定する者もある [РУИНА.RU: Вета-Почтовая]。

28) 同様に、1151 年 5 月 2 日の水曜日に相当する。

フ (Василев) の近郊で昼食のために陣を張っていた。

ちょうどその時、ハンガリー人のもとにいる息子ムスチスラフ [I1] から派遣された²⁹⁾使者が、急ぎイジャスラフ [D112:I] のところに駆けつけて、こう言った。「ご子息〔ムスチスラフ [I1]〕があなたに拝礼して、こう言っています。『見よ、わたしは言明します。あなたの義弟の〔ハンガリー〕王は、あなたに、これまでなかったような、大軍を援軍として与えました。わたしは、すでにこの軍勢とともに〔カルパチアの〕山脈を通過しました。あなたのところに急いで駆けつけます。われらは、あなたにとってすぐに必要になるでしょう。われらが迅速に行けるように、出迎えを派遣して下さい』」。

イジャスラフ [D112:I] は、ヴァチェスラフ [D16] および自分の弟ロスチスラフ [D116:J] と会合して、この〔要請を〕受け入れることに決め、こう言って〔返事を伝えて〕、ムスチスラフ [I1] のところに使者を送り返した。「見よ、われらはすでに神の裁きに向かっている³⁰⁾。息子よ、そなたたちは、いつでも、われらにとって必要である。急いでできるかぎり強力な戦力を〔派遣せよ〕」。

こうして、かれらは陣を払うと、ヴァシレフへ向かって出発した。そして、自分たちの部隊に戦闘準備を命じ、ヴァシレフを過ぎて、ストウグナ川³¹⁾を渡り、土塁線のところまで到着した。しかし、土塁を越えることはせず、その場で部隊を宿営させた。

〔イジャスラフの斥候部隊軍は〕ペレベトヴィ³²⁾ (Перепетовы) まで達して、かれら〔ユーリイの部隊〕と戦おうとした。斥候部隊は、ユーリイ [D17] の部隊の近くまで進み、かれらと小競り合いになった。

木曜日³³⁾の夜明け前に、ヴァチェスラフ [D16]、**[435]** イジャスラフ [D112:I]、ロスチスラフ [D116:J] は、土塁を越えて、広い平地に出て、そこで布陣していたユーリイ [D17] 〔の軍隊と〕戦うべく軍を進めた。

それから、和議を行うために互いに軍使が派遣された。しかし、オレーグ一族の公たち³⁴⁾

29) イジャスラフ [D112:I] は、1151年4月上旬に、援軍要請のために息子のムスチスラフ [I1] をハンガリーへと派遣していた。〔イパーチイ年代記 (4) : 360-361 頁〕を参照。

30) 「神の裁きに向かう」(ити на суд Божий) とは、戦争によって紛争の決着をつけるということ。

31) 「ストウグナ川」(Стугна) は、キエフの南40km地点のトレポリで本流に合流するドニエプル川右岸支流。ヴァシレフ (Василев) はストウグナ川の左岸に位置する城市である。

32) 「ペレベトヴィ」(Перепетовы) は、Перепетовы могилы のことで、ペレベトヴォの平原 (Перепетово поле) (『イパーチイ年代記 (4) : 340 頁, 注102参照) の北側にある墳地帯 (могилы) を指すと思われる。次にあるルート川の上流域に位置している。[Вортман 2004]

33) 同様に、1151年5月3日の木曜日に相当する。

34) ユーリイ [D17] 陣営に参加していた、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34]、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35]、ヴァチェスラフ・オリゴヴィチ [C43]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] 等を指している。

とポロヴェツ人は反対して和議をさせなかった。〔かれらは〕流血など平気だったのである。かれら〔ユーリイの軍勢〕は夕方までそこに布陣して、それから、ユーリイ [D17] は、ルート³⁵⁾ (Рут) 川を渡り³⁶⁾、ルート川の対岸で陣を構えた。

明けて金曜日³⁷⁾ になり、イジャスラフ [D112:I] は自分の全部隊に戦闘準備をさせると、かれ〔ユーリイ〕に向かって軍を進めた。ユーリイ [D17] は、まだ戦うことを望まず、ウラジミルコ [A121] 〔の到着〕を待っていた。

イジャスラフ [D112:I] はさらに軍を進めた。この時、神の御心によって霧が低くかかり、どこも見えなくなってしまった。せいぜい、槍の穂先が見えるだけだった。雨が降り始め³⁸⁾、そのために両軍は湖³⁹⁾ に突っ込んでしまい、湖が双方を分けた。こうして、戦うことができなかった。

昼になって、霧が立ちのぼり、空が晴れあがった。そして、両軍の部隊は互いに湖の両側に相手を認めた。双方の両翼の部隊は戦ったが、本隊は遭遇することはできなかった。このような状態が夕方まで続いた。

〔夕方に〕ユーリイ [D17] は、自分の部隊を率いて丘を越えた。ヴァチェスラフ [D16]、イジャスラフ [D112:I]、ロスチスラフ [D116:J] は、かれ〔ユーリイ〕のあとを追って、湖の上流部に向かって進軍を始めた。かれ〔ユーリイ〕と戦おうとしたのである。ユーリイ [D17] は、かれらに先んじて、自分の部隊を率いて小ルート川 (Малый Рутец) を越え、泥濘地帯を横切って進んだ。そして、そこで宿営を張った。

ヴァチェスラフ [D16]、イジャスラフ [D112:I]、ロスチスラフ [D116:J] は、やって来ると、かれ〔ユーリイ〕に対抗するかたちで、矢が【436】達しない距離を置いて夜の宿営を張った。こうして、両者は対陣して宿営した。

35) 「ルート川」(Рут) は、次に記される「大ルート川」(Рут Великий) との対比で、「小ルーテツ川」(Рутец Малый) と称されることもある。「(大)ルート川」はロシ(Рось)川の左岸支流で、現在のプロトカ川(Протока)に相当すると推定されている。[Древнерусские летописи, 1936: С. 355, прим. 121]

36) ユーリイの陣営は、時間を稼ぐために南下して、ルート川とその上流域にある湖の対岸に陣取ったことになる。

37) ここの「明けて金曜日」(свитающю же пятъку) は、すぐ上の「木曜日の夜明け前」(въ четвержьный ж день, переже солнца) との対比から見て、また、あとに「金曜日の朝」(утрии же день, в пятницу) の表現が繰り返されていることから見て、「明けて木曜日」の誤記の可能性が高い。もしくは、『イパーチイ年代記』の増補編集の中で、別資料からの戦闘の記事がダブったと考えることもできる。

38) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では前日の木曜日のこととして、「風を伴った強い雨が降り、戦士たちはなにも見えないほどだった」との記述がある。

39) 春季の雪解けの増水が流れ込んで、ルート川上流域に形成された河跡湖のことだろう。

翌日の朝、金曜日⁴⁰⁾、東の空が明るくなると、先ずは、ユーリーの部隊内で太鼓が打ち鳴らされ、ラッパが吹かれ、部隊が武装を始めた。同様に、ヴァチェスラフ [D16]、イジャスラフ [D112:I]、ロスチスラフ [D116:J] のところでも、太鼓が打ち鳴らされ、ラッパが吹かれ、部隊が武装を始めた。

ユーリー [D17] は、自分の息子たち、(ウラジーミル・ダヴィドヴィチ⁴¹⁾ [C34]、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] とともに、自分たちの部隊を武装させて、小ルート川の上流へと軍を進めた。ヴァチェスラフ [D16]、イジャスラフ [D112:I]、ロスチスラフ [D116:J] も、自分たちの部隊を率いて、かれら〔敵〕に対抗すべく、小ルート川上流へと向かった。

するとその時、ユーリー [D17]、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34]、スヴァトスラフ [C43]、原野のポロヴェツ人、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] たちは、自分たちの部隊を転回させて、大ルート川⁴²⁾ へと方向をとった。戦うことを望まず、この〔大〕ルート川を渡って、そこでガーリチのウラジミルコ [A121] を待つことを選んだのだった。

ヴァチェスラフ [D16]、イジャスラフ [D112:I]、ロスチスラフ [D116:J] は、かれら〔敵〕が自分たちから離れて行くのを見て、かれらを追撃すべく、自分たちの射手、黒頭巾族、ルーシ人を派遣した⁴³⁾。こうして、〔敵の〕部隊の背後からの攻撃が始まり、矢が交わされ、〔敵の〕荷車を奪い取り始めた。

ユーリー [D17]、かれの息子たち、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34]、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] はこれを見た。かれらは、ルート川を渡ることはできず **[437]**、自分たちの部隊が背後から攻撃され、荷車が奪われているのを見て取ると、自分たちの部隊を転回させて、攻撃してくる〔敵〕に対抗すべく陣を構えた。

アンドレイ [D173] は、父の部隊を整列させた。なぜなら、兄弟たちのなかで、かれが最年

40) 1151年5月4日の金曜日に相当する。但し、ウクライナ語訳はこちらのほうが曜日の誤りだとして、「土曜日」に訂正している。(Бережков 1963: C. 62, 153) も参照)

41) この「ウラジーミル・ダヴィドヴィチ」はフレープニコフ写本にのみある読みで、後代の加筆である可能性が高い。ただし、以下の記述に見るように、ウラジーミル [C34] がユーリー [D17] の遠征に参加していたことは確かである。

42) この「大ルート川」(Руг Великий) は、ルート川の河口付近と考えられる。小ルート川(Ругец)上流とは反対方向である。

43) 年代記記者はここで、自らが支持しているイジャスラフ [D112:I] が統治しているキエフ周辺の人々を「ルーシ人」(Русь)と表現している。敵対するユーリー [D17] の治めるスズダリ、ウラジミルコ [A121] のガーリチとは記者の意識内で区別されていることが現れている。(下注 176 も参照)

長だったからである⁴⁴⁾。かれ〔アンドレイ〕は後方で待機していたポロヴェツ人たちを見て、馬を駆ってかれらのもとに行き、かれらを戦いへと鼓舞した。そして、そこから自分の部隊のところに行き、自分の従士団を鼓舞した。

その時、イジャスラフ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] の二人は、自分たちの父であるヴァチェスラフ [D16] のもとに馬で駆けつけ、こう言った。「あなたは、多くの善き事を望みましたが、あなたの弟〔ユーリイ〕は善き事を望みませんでした。父よ、今となっては、われらが望むことは、戦いに斃れることか、そうでなければ、あなたの名誉を回復することなのです」。

ヴァチェスラフ [D16] は〔答えて〕言った。「兄弟にして息子たちよ、わしは生まれてからこのかた、流血を喜んだことなど一度もない。ところが、わが弟が、わしをそのようにさせたのだ。見よ、われらは、神の裁きがなされるまさにその場所にいるのだ」。二人〔イジャスラフとロスチスラフ〕はかれ〔ヴァチェスラフ〕に拝礼して、自分たちの部隊のもとに〔馬で〕戻って行った。

イジャスラフ [D112:I] は、自分の部隊にたどり着くと、配下の全部隊に軍使を遣って、こう言った。「わしの部隊を見よ、わしの部隊が進軍し始めたら、そなたたちも軍を進めよ」。こうして、部隊はそれぞれに出撃した。

アンドレイ・ユーリエヴィチ [D173] は、槍を手に取ると、先陣を切って馬を進め、誰よりも先に遭遇戦を戦い、自分の槍を折った⁴⁵⁾。この時、〔敵が〕かれが乗っていた馬の鼻孔を槍で突き、かれの馬はもがき始め【438】、かれの兜が脱げ落ち、盾がもぎ取られた。しかし、かれは神の加護と自分の親たちの祈りによって害されることはなかった⁴⁶⁾。

また、イジャスラフ [D112:I] はすべての部隊の先陣を切って、単騎で〔敵の〕部隊に突撃していった。かれは、自分の槍を折った。〔敵兵は〕かれの腕を切りつけ、太腿を〔槍で〕突いた。そのために、かれ〔イジャスラフ〕は馬から落ちた。

両軍は遭遇して、壮絶な斬り合いが始まった。

神と聖なる聖母と生命を与える尊い十字架の力が、ヴァチェスラフ [D16]、イジャスラフ [D112:I]、ロスチスラフ [D116:J] を助けた。そして、その場所で、ユーリイ [D17] に打ち勝った。その時、ユーリイ [D17]〔の味方〕のポロヴェツ人は、矢を一本も射ることなく逃げ出した。

44) アンドレイ [D173] はユーリイ [D17] の三番目の息子だが、長兄のロスチスラフ [D171] は 1151 年 4 月に、次兄イヴァン [D172] も 1147 年 2 月に死没しており、この時点では「最年長者」である。

45) アンドレイ [D173] が「槍を折った」(изломи копьѣ) という表現は、すぐ下のイジャスラフ [D112:I] の戦いぶりの描写の中にも出てくるが、これは戦闘描写の定型句表現として「敵と一騎打ちを行う」という意味 [Словарь-СПИ 4: С. 202]。

46) この表現については、上注 18 を参照。

その後で、オレーグ一族⁴⁷⁾〔の諸公も逃げ出した〕。それから、ユーリイ [D17] も子供たちとともに逃げ出した。

かれら〔ユーリイ陣営の諸公と兵は〕は、ルート川を渡って逃げ、多くの従士たちは、ルート川で溺れた。なぜなら、〔川は〕泥沼のようになっていたからである。逃げ出した者のうち、ある者は撃ち殺され、ある者は捕虜に獲られた。その時、チェルニゴフ公のウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] も殺された。善良で温順な公だった。他にも多くが撃ち殺された。ポロヴェツの諸侯も多くが撃ち殺され、ある者は捕虜になった。

両軍の部隊が、騎兵も歩兵も含めて遭遇したとき、イジャスラフ [D112:I] は負傷して、横たわっていた。それから起き上がると、かれのことを知らないキエフ人の歩兵たちが〔見つけて〕、敵だと思ってかれを殺そうとした⁴⁸⁾。イジャスラフは「われは公である」と言った。かれら〔キエフ人〕の一人が言った。「だからこそ、われらはお前が必要なのだ」⁴⁹⁾。そして、自分の長剣を引き抜くと、兜の上から一撃を加えた。**[439]** 兜の額のところには、黄金の聖パンテレイモン⁵⁰⁾の像が刻印してあった。〔キエフ人〕は長剣でかれを打ち、額に達するまで兜が割れた。イジャスラフ [D112:I] は〔再度〕言った。「われは、イジャスラフ [D112:I] である。お前たちの公である」。兜を取ると、〔キエフ人は〕かれであることが分かった。これを聞いた多くの者たちは、歓喜してかれ〔イジャスラフ〕を自らの手で助け起こした。それは、自分たちの王や公⁵¹⁾を〔助ける〕がごとくであった。全軍が〔主よ憐れみ給え〕の祈り⁵²⁾を唱えた。こうして、〔イジャスラフ軍は〕敵の部隊に勝利し、自分たちの公を生きて連れ戻すことができた。

イジャスラフ [D112:I] は、傷のためにひどく憔悴していた。出血していたからである。しかし、かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕は、イジャスラフ [C35] が、自分の実の兄弟ウラジーミル [C34] 〔の死〕を悼んで泣いていることを聞いた。そして、かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕は、自分の負

47) 上注 34 を参照。

48) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、イジャスラフは「片手に怪我を負った。味方の歩兵たちがかれを馬からたたき落とし、かれと気づかずに、殺そうとした」と記されている。〔スーズダリ年代記訳注〔Ⅲ〕: 19 頁〕

49) キエフ人はイジャスラフ [D112:I] を敵方の公と誤認し、これを殺して殊勲をあげようとした言葉だろう。

50) イジャスラフ [D112:I] の洗礼名はパンテレイモンであり、聖パンテレイモンはかれの守護聖人に当たり、ここは守護聖人の庇護を語るエピソードである。〔Литвина, Успенский 2006: С. 564〕。13 世紀初頭のヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ [K4] のものと推定される兜が現存しており、額の部分に所有者の守護聖人と推定される像と大天使ミハイル像が刻印されている〔Рыбаков 1963: С. 45-47〕。ここでは、イジャスラフの兜も同様のものと考えることができる。〔История культуры 1951: С. 435-436〕

51) 「王や公」(царя и князя) は比喩的に身分の高い者を指し (〔Goranin 1995: p.109, n. 703〕参照), その意味の慣用句として旧約のスラブ語訳 (例えば『哀歌』2:6) などで用いられている。

52) この祈りの句については、〔イパーチイ年代記 (2): 338 頁, 注 309〕を参照。

傷をものともせず、馬に乗ると、その〔イジャスラフ [C35] がいる〕場所に行き、実の兄弟に対するように、かれ〔ウラジーミル [C34] の死〕を悼んで泣いた。

かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕は長い間泣いたあとで、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] に言った。「われら二人は、これ〔ウラジーミル [C34]〕をもはや生き返らせることはできない⁵³⁾。しかし、兄弟よ、見よ、神と聖なるいと淨き御方〔聖母〕は、われらの敵を打ち負かしてくれた。かれら〔敵〕は、今や周辺を逃げ回っている。見よ、チェルニゴフへも行こうとしている。それゆえ、兄弟よ、もはや立ち止まるな。準備をして、自分の兄弟〔ウラジーミル [C34]〕〔の遺体を〕運んで、チェルニゴフへ行け。わしは、そなたを助ける準備をしよう。今は、夕方までにヴィシエゴロドへと行くがよい⁵⁴⁾」。

イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟のロスチスラフ [D116:J] と協議して、ロスチスラフ [D116:J] の息子ロマン [J1] を、かれ〔イジャスラフ [C35]〕と一緒に〔チェルニゴフへと〕行かせた。さらに、従士たちを、かれ〔ロマン [J1]〕に同行させた。

こうして、イジャスラフ [C35] は、ロマン [J1] とともに出発し、チェルニゴフへと向かった。〔イジャスラフ [C35]〕は、戦場から兄弟ウラジーミル [C34] 〔の遺体〕を收容した。**【440】**そして、イジャスラフ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] が言ったように、夕方までにヴィシエゴロドに行き、そこで滞在して、その夜には〔ドニエプル川を渡って遺体を〕運んだ。そして、その翌日には、最初に⁵⁵⁾ チェルニゴフへと出発した。イジャスラフ [C35] は、ロマン・ロスチスラヴィチ [J1] とともにチェルニゴフ〔の城市に〕入城した。そして、自分の兄弟を埋葬すると、自らは自分の兄弟のチェルニゴフの公座に座した。

ユーリイ [C17] は、子供たちとともに、トレポリ⁵⁶⁾ でドニエプル川を急ぎ渡河すると、対岸をペレヤスラヴリへと向かって行った。ポロヴェツ人はポロヴェツ人のもとへと帰郷した。ス

53) 「もはや生き返らせることは出来ない」(уже не крѣсити)の文言は、キリスト教受容以前の時代からルーシの公族の間で使われてきた葬礼儀礼の定型句で年代記などで何回も使われている。『原初年代記』945年の項の、オリガが夫の死に際して用いたこの語句の用法からは、同族による血讐を放棄する誓言の意味合いがあったと考えられるが、のちの用法(『イーゴリ軍記』など)では、公族たちの儀礼的な追悼句として使われている。[Словарь-СПИ 3: С. 35-36]

54) キエフ城内に立ち寄らず、ヴィシエゴロドを経由でドニエプル川を渡河してチェルニゴフへ向かう行路をとるとのこと。

55) この「最初に」(первое)の表現は、「チェルニゴフの公座を狙う、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] やスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] よりも早く」という意味がある。

56) トレポリにもドニエプル川を渡る渡渉地点があったか、あるいは「ヴィテチェフ」の渡渉地点をおおまかに指しているかのどちらかだろう。『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「昼頃、ドニエプル川まで逃げて来て、ユーリイ [D17] はヴィテチェフを船で渡り、他の者は浅瀬を渡った」([スーズダリ年代記訳注 [Ⅲ]: 19頁]) とある。

ヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43], スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、ザループよりも上流の地点でドニエプル川を急ぎ渡り、ゴロデツ⁵⁷⁾ (Городець) へと逃げていった。

スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は、体調が悪く、逃げるのにも苦勞していた。かれは、ゴロデツからチェルニゴフへ向けて、自分の甥のスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] を派遣したが、自分自身は〔馬でそこへ〕行くことは出来なかった。

さて、スヴァトスラフ [C411:G] は、デスナ川の渡し場⁵⁸⁾ へと急いで行った。そこで、かれは知らせを受けた。イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] とロマン・ロスチスラヴィチ [J1] は、すでにチェルニゴフ〔城内〕に入ったという。そこで、〔スヴァトスラフ [C411:G] は〕、再びその場を立ち去り、自分の〔父方の〕叔父〔スヴァトスラフ [C43]〕に使者を遣って、こう伝えた。「ここに来てはいけません。今いるところからノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕へ行つて下さい。ここでは、すでにイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] とロマン・ロスチスラヴィチ [J1] が〔チェルニゴフに〕入城してしまいました」。スヴァトスラフ [C43] はこれを聞くと、ノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕へと逃れた。

さて、ガーリチのウラジミルコ [A121] は、自分の姻戚〔嫁の父〕であるユーリイ [D17] を助けるべく、駆けつける途上にあつた。〔ユーリイも〕かれ〔の到来を〕期待していた。かれ〔ウラジミルコ [A121]〕が、**【441】** ボジェスキイ⁵⁹⁾ (Божьский) に到達したとき、かれのもとに知らせがきた。ヴァチェスラフ [D16], イジャスラフ [D112:I], ロスチスラフ [D116:J] は、すでにユーリイ [D17] に勝利し、ポロヴェツ人を撃破したという。ウラジミルコ [A121] は、これを聞くと、方向転換して、急ぎガーリチへと戻って行った。

さて、ヴァチェスラフ [D16], イジャスラフ [D112:I], ロスチスラフ [D116:J] は、神とそのいとこ浄き母、命を与える十字架の力を讃美し、大いなる名誉と称賛とともに、キエフに向けて出発した。すると、かれらを出迎えるために、主教たちが十字架を手にしてやって来た。府主教クリム〔クリメント〕、尊い典院たち、司祭たち、多くの主教たちも同様だった。こうして、かれら〔ヴァチェスラフ、イジャスラフ、ロスチスラフ〕は大いなる名誉をもってキエフに入

57) この「ゴロデツ」はチェルニゴフ公領とペレヤスラヴリ公領の境のオステル川河口に位置する通称オステルスキイ・ゴロデツのこと。本年代記では「ゴロドク」(Городок)とも表記される。

58) デスナ川を挟んでチェルニゴフ城市の対岸にある渡し場のことだろう。

59) 「ボジェスキイ」(Божьский)は南ブク川河畔の、キエフ公領とガーリチ=ヴォルィニ公領の境界に位置する城市で、ガーリチとキエフ(直線で約450km)のほぼ中間地点にあつた。イジャスラフ [D112:I] がスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] に与えた5つの城市の一つとして、1146年の記事に初出。

城した。

そして、かれらは聖なるソフィアと十分の一教会の聖母に拝礼した。そして、大いなる祝宴を張り、大いに親愛を深めた。このようにして、かれらは〔親愛のなかでともに〕暮らし始めた。

ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] の二人は、ユーリイ [D17] を討伐するために、ペレヤスラヴリへの遠征の準備を始めた。他方、ロスチスラフ [D116:J] は、スモレンスクへと帰郷した。

その時、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] は、自分の父への援軍のハンガリー人を連れてくる途中だった。ガーリチのウラジミルコ [A121] は、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] が王のもとから、ハンガリー人の援軍とともに進軍していることを聞くと、かれ〔ムスチスラフ〕を追って、軍を進めた⁶⁰⁾。このことを知らないムスチスラフ [I1] は、サポグィニ⁶¹⁾ (Сапогынь) で陣営を構えており、ハンガリー人たちはかれを囲むようにして陣を張っていた。

その頃、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] は、かれ〔ムスチスラフ〕に対して、またハンガリー人に対しても、ドロゴブージュ (Дорогобуж) から大量の飲み物〔酒〕を送った。その後、ウラジーミル [D181] は、かれ〔ムスチスラフ〕に【442】「ガーリチのウラジミルコ [A121] が軍を進めている」と〔使者を遣って〕告げた⁶²⁾。

ムスチスラフ [I1] は、ハンガリー人と酒盛りをしていた。かれは「ガーリチのウラジミルコ

60) 上にあるように、ウラジミルコ [A121] はガーリチからボジェスキまで進軍したが、ユーリイ [D17] の敗北の報を聞いて、ガーリチへ帰ることを決めた。しかし、帰路の途上でムスチスラフ [I1] 率いるハンガリー軍の到来を知ると、軍を転じて北上し、「サポグィニ」(次注) 方面へと向かったことになる。

61) 「サポグィニ」(Сапогынь) は、キエフから西北西 253km に位置し、スルチ(Слуть) 川とゴリイナ(Горина) 川の中流域に挟まれた場所にあった城砦。現在のウクライナのリヴノ州のサポージン(Сапожин) 村ある遺構がそれにあたる。[Куза 1996: C. 167][РУИНА.RU: Сапожин]

62) ウラジーミル [D181] は直前にユーリイ [D17] の使者として、ウラジミルコ [A121] にユーリイ軍への援軍を要請するためにガーリチに派遣されていたが、ユーリイの敗北に伴って、どうやらイジャスラフ [D112:I] 陣営へ寝返ったようである。そのため、イジャスラフ [D112:I] からドロゴブージュを所領として与えられ、そこに滞在していたのではないか。ドロゴブージュは、1150 年にイジャスラフ [D112:I] に服従しており ([イパーチイ年代記 (4): 351 頁] 参照)、それ以来イジャスラフの影響下にあったと考えられる。

ウラジーミル [D181] が、イジャスラフの息子ムスチスラフ [I1] へ「大量の酒」を送り (ドロゴブージュから、ムスチスラフが陣を構えていたサポグィニまでは東南東へ 22km ほどと近い)、ウラジミルコ [A121] の動向についての情報を提供したのも、イジャスラフへの忠誠心を示すためであろう。ソロヴィヨフは、ウラジーミル [D181] をドロゴブージュ公に据えたのはウラジミルコ [A121] であるとしているものの、かれの「寝返り」については基本的に同様の見解を示している [Соловьев 1988: C.464, 691 (прим. 270)]。

[A121] がわれらを追って軍を進めている」とかれら〔ハンガリー人〕に告げた。酔ったハンガリー人たちは、思い上がってこう言った。「われらを討てるものなら来るがよい、かれ〔ウラジミルコ〕と戦ってやろうではないか」。その夜、ムスチスラフ [I1] は警備兵を配備して、自分はハンガリー人とともに就寝した。

深夜、警備兵がかれ〔ムスチスラフ〕のところに駆け込んで来て、言った。「ウラジミルコ [A121] が来ます」。ムスチスラフ [I1] は、従士たちと馬にまたがり、また、ハンガリー人を起こし始めた。ハンガリー人は酔って、死んだように睡っていた。

夜明け前に、ガーリチのウラジミルコ [A121] は、かれら〔ムスチスラフ軍とハンガリー人〕を襲撃した。かれらの中で捕虜に獲られた者は少なく、ほとんどすべてが撃ち殺された。ムスチスラフ [I1] は、自分の従士たちとともにルチェスク⁶³⁾へと逃げた。

その時、キエフのイジャスラフ [D112:I] に報告が届いた。かれの息子〔ムスチスラフ〕が撃ち破られ、ハンガリー人が撃ち殺されというのである。〔イジャスラフ [D112:I] は〕、前にもわれらが聞いたことがある次の言葉を語った。「地位が人を来させるのではない、人が地位のところに行くのだ⁶⁴⁾。どうか、神よわれに健康を与え給え。王にも〔健康を与え給え〕。どうか、〔ウラジミルコへの〕報復がなされますように」。

63) ヴォルニニ公領とキエフ公領の境界で、ストイリ (Стырь) 川左岸に位置するルチェスク (Луческ) (現在のルツク (Луцьк)) は、従来からイジャスラフ [D112:I] の拠点都市であり、サボグニニからだど、西北西に約 113km 離れたところに位置している。

64) この文言の原文は не идет мѣсто къ головѣ, но голова к мѣсту で、一種のことわざである。ウラジミル・ダーリはその『ロシアことわざ集』に年代記のこの個所から取った句 (Не место к голове, а голова к месту) を収録し、その次に、類似句として現在でも流通している「地位が人を良く見せるのではなく、人〔の働き〕が地位をよく見せる」(Не место человека, а человек место красит) を載せている [Даль 1984: С. 166]。このイジャスラフの用法では、「地位」(место) は公族間の年長者としての「地位」を、「人間」(голова) はその地位に相応しい頭脳 (能力) をもった人物、つまり自分を含意していることは明らかである。ここでは、ウラジミルコ [A121] に対する、ルーシの主宰 (キエフ公) としての正統性を主張しているのだろう。この言葉 (ことわざ) は「前にもわれらが〔イジャスラフから〕聞いたことがある」と年代記記者が記しているが、イジャスラフが、二人の叔父ユーリイ [D17] とヴァチェスラフ [D16] との度重なる確執の中で、「地位」が低いにもかかわらず自分がキエフ公位を求める行動を正当化する言葉を一度ならず周辺に漏らしたであろうことは容易に想像できる。この解釈については、歴史家ソロヴィヨフの見解も参照のこと。[Соловьев, 1988: С. 471-472]。

なお、А・トロチコは、状況から見て、息子ムスチスラフ [I1] の「愚行」(飲酒による敗戦) を嘲った言葉という解釈をとっており (その場合、公という〈高い〉地位にあっても、行動がともなわなければ価値がない、という意味になる)、さらにこれは諺ではなく、ビザンティン箴言集『蜂』(Пчела) に「地位が徳行を飾るのではなく、徳行が地位を飾る」(Не мѣсто добродѣтели, но добродѣтель мѣсто можетъ украсити)[БЛДР 5: С. 414] という類似の箴言があることから、イジャスラフが箴言をもじったものという解釈を示している。[Толочко А. 2010: С. 158]

こう言うと、ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] の二人は、ユーリイ [D17] を討伐するためにペレヤスラヴリへと出発した。イジャスラフ [D112:I] の弟スヴァトポルク [D114] とベレンディ人は（ザループで〔ドニエプル川を〕渡河し、マジエフ⁶⁵⁾ (Мажев) の村落で陣営を構えた。そして、そこから〔ペレヤスラヴリ〕の城市へと、戦うために接近していった⁶⁶⁾。かれらは〔ペレヤスラヴリに〕到着すると、ペレヤスラヴリで二日間戦った。三日目に、いつものように戦うために城市に向かうと、城内からかれらに向かって、歩兵部隊が飛び出してきた。これを撃ち破って多くの歩兵を撃ち殺し、外廊の防柵を焼いた。

ヴァチェスラフ [D16] と **[443]** イジャスラフ [D112:I] は、ユーリイ [D17] のもとに軍使を派遣して、こう言った。「われら二人は、そなたに拝礼する。スーズダリへ行け。ペレヤスラヴリ〔の公座〕には、〔そなたの〕息子を据えよ⁶⁷⁾。われらは、そなたとここで、ともに居ることはできない。〔なぜなら〕そなたは、われらを討つべく、再びポロヴェツ人を引き入れるだろうから」。

ユーリイ [D17] は、どこからも援軍を得ることができず、かれの従士たちも、ある者は撃ち殺され、ある者は捕虜に獲られていた。そこで、ユーリイ [D17] は否応なく、かれら〔ヴァチェスラフとイジャスラフ〕に対して、子供たちとともに、十字架接吻〔によって相手の要求を受け容れる誓約〕をした。

聖殉教者ボリスとグレーブの祭日がやって来た⁶⁸⁾。ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] は〔軍使を遣ってユーリイに〕言った。「自分の〔領地である〕スーズダリへ行け。そなたは、そのように十字架接吻〔で誓った〕のだから」。ユーリイ [D17] は、二人に使者を遣って言った。「わしはゴロドク⁶⁹⁾ へ行く。そこで滞在してから、スーズダリへ行く」。

ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] は〔ユーリイに〕言った。「そなたは、われらにとって兄弟である。自分の〔領地である〕スーズダリへ行け。そなたがゴロドクのことを

65) 「マジエフ」(Мажев) は、ペレヤスラヴリ近郊アルト川河岸にあった村の名で、おそらく現在のマズィンクィ (Мазинки) 村 (ペレヤスラヴリから北西に約 13km) に相当すると考えられている [Покажчик: Мажев][Карамзин 1998: С. 351, прим. 344]

66) 丸括弧の部分は『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の当該部分からの補足。文脈から見て、『イパーチイ年代記』では明らかに欠落がある。『ラヴレンチイ年代記』の並行記事にも、ほぼこの補足と同じ文言がある。

67) あとの展開から分かるように、ここではユーリイ [D17] の息子グレーブ [D178] が念頭に置かれている。

68) 1151年7月24日に相当する。重要な十字架接吻の儀式を行うために、ヴァチェスラフとユーリイの祖父にあたるモノマフ公にゆかりの深い聖ボリス＝グレーブの祭日が選ばれたのだろう。

69) このゴロドク (Городок) は「ゴロデツ」(Городец) と同じで、オステル川河口に位置するゴロデツ・オステルスキイを指している。この城市からデスナ川に入って遡上し、そこからさらにウグラ川、クリャジマ川の順に水路を伝っていけば、スーズダリへ帰ることができる。

言うのなら、そこで一ヶ月休養を取ってから、自分の〔領地である〕スーズダリへ行け。もし、〔ゴロドクからスーズダリへ〕行かないのであれば、われらは、自分たちの部隊を率いて到来し、いまここ〔ペレヤ斯拉ヴリ〕で布陣しているように、ゴロドクを包囲するだろう。そして、これらすべてを守ることに、また、ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] からキエフを略取しないことについて、十字架接吻によって〔誓え〕。ユーリイはこれらすべてのことについて、十字架接吻で〔誓わざる〕を得なかった。

ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] は、ユーリイ [D17] に言った。「そなたにスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は要らない⁷⁰⁾」。こうして、ユーリイ [D17] はかれ〔スヴァトスラフ [C43]〕を〔味方として〕当てにすることはできず、その〔条件で〕同意した。**【444】**

ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] は、〔ペレヤ斯拉ヴリから〕キエフへと出発した。

ユーリイ [D17] は、ペレヤ斯拉ヴリに自分の息子のグレーブ [D178] を残して、自分はゴロドクへと向かった。

他方、アンドレイ [D173] は、先に〔自分は〕スーズダリへ行くことを父に懇願して、こう言った。「父よ、見よ、われらはこのルーシの地では戦争することも、何をするともなくなりました。暖かいうち⁷¹⁾に立ち去りましょう⁷²⁾」。こうして、父〔ユーリイ〕はかれ〔アンドレイ〕を出発させ、〔アンドレイは〕自分の故郷〔スーズダリ〕へと向かった。ユーリイ [D17] はゴロドクへと向かった。

スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は、ユーリイ [D17] がヴァチェスラフ [D16] およびイジャスラフ [D112:I] と合意して、ペレヤ斯拉ヴリから立ち去ったことを聞いた。そこで、自分の甥のスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] と合流すると、自らチェルニゴフのイジャスラフ [C35] のもとに出かけて、こう言った。「兄弟よ、〈平和は戦いまで続き、戦いは平

70) つまり、ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] は、ユーリイ [D17] との和解の条件として、スヴァトスラフ [C43] とは今後同盟しないことを提示したのである。

71) この時点ではまだ夏だが、ゴロドクで長期滞在して川が凍結してしまうことがないよう、冬になる前、河川を船で運航することが可能なあいだ、ということ。

72) この個所の『ラヴレンチイ年代記』の並行記事にはやや異なる内容が記されている。「父〔ユーリイ〕はかれ〔アンドレイ〕を強く引き留めた。アンドレイは言った。『われらはスーズダリへ行くことを、すでに十字架接吻して〔誓った〕ではないですか』。こうしてかれ〔アンドレイ〕はヴラジミル〔クリヤジマ河畔の〕の領地へと行った」[ИСПИ Т. 1, 1997: Ст6. 335]。

和まで続く⁷³⁾と云うが、兄弟よ、今となつては、われらこそが仲間であり兄弟である。どうか、われらを仲間とみなしてほしい。見よ、われらのもとには、二つの父の地がある。一つはわが父オレーグ[C4]の地、もう一つはそなたの父ダヴィド[C3]の地である。兄弟よ、そなたはダヴィド[C3]の子であり、わしはオレーグ[C4]の子なのだ。兄弟よ、そなたは自分の父ダヴィド[C3]〔に属していた〕ものを受け取れ、そしてわれら二人〔スヴァトスラフ・オリゴヴィチ[C43]とスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ[C411:G]〕には、オレーグ[C4]〔に属していた〕ものを与えよ。そのようにして、われらは分け合おうではないか。

イジャスラフ[C35]は、キリスト教徒として振る舞い、〔二人を〕自分の〔仲間の〕兄弟として受け入れ、二人にかれらの父の地を返還し、自分の〔父の地〕を受け取った⁷⁴⁾。

その時、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ[D112:I]は、自分の使者を、義弟である〔ハンガリー〕王⁷⁵⁾に向けて派遣して、こう言った。「見よ、ガーリチのウラジミルコ[A121]は、わしとそなたの従士団を撃ち殺してしまった。兄弟よ、今は、次のことを思慮する時である。どうか、神がわれら二人にそのような運命を定めないように。【445】そして、どうか、神がそのことについて、われらの従士団の報復をするように。兄弟よ、そなたの軍隊を武装させよ。わしはここにいる。どうか神がわれらに定めることが、成就しますように」。

そして、〔イジャスラフは〕自分の部隊を編成すると、自らユーリイ[D17]を討伐するべく、ゴロドクへと軍を進めた。かれは、ベレンディ人、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ[C35]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ[C411:G]を引き連れ、さらにスヴァトスラフ・オリゴヴィチ[C43]が派遣した援軍をともなつて行軍した⁷⁶⁾。

ユーリイ[D17]は、自分の子供たちとともに、ゴロドクに籠城した。何日も、かれら〔ユーリイたち〕は城から出撃しては戦った。かれ〔ユーリイ〕は苦しかった。なぜなら、かれへの援軍はどこからもなかったからである。そして、かれ〔ユーリイ〕は、かれら〔イジャスラフ等諸公〕に対して十字架接吻して「自分はスーズダリへ行く」ということを〔誓った〕。そこで、

73) これは、それまでの反目を水に流し和議の重要性を強調するときに持ち出される格言(定型句)。〔イパーチイ年代記(3):365頁,注189〕〔イパーチイ年代記(4):331頁,注44〕を参照。

74) ここには書かれていないが、イジャスラフ[C35]はこの和議の条件として、二人がユーリイ[D17]の支持をやめ、キエフのイジャスラフ[D112:I]の陣営につくことを認めさせたのだろう〔Соловьев, 1988: C. 465〕。その後すぐに、二人はイジャスラフ[D112:I]のユーリイ討伐遠征に加わっている。

75) ハンガリー王ゲーザ二世(在位1141-1162年)のこと。

76) ここでは、スヴァトスラフ[C43]がイジャスラフ[D112:I]の味方として登場している。イジャスラフ[D112:I]はユーリイ[D17]と和解するときに、スヴァトスラフ[C43]との同盟を禁じているが(上注70)、すでにそのときまでにスヴァトスラフ[C43]を自らの陣営に組み入れていたと推察される。

かれ〔イジャスラフ〕はかれ〔ユーレイ〕のもとから撤退した。ユーレイ [D17] は、自分の息子グレーブ [D178] をゴロドクに残して⁷⁷⁾、自分はゴロドクからスーズダリへと向かった。

ユーレイ [D17] は、そこ〔ゴロドク〕から、ノヴゴロド・セヴェルスキイ⁷⁸⁾ のスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] のもとへと向かった。かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕はかれ〔ユーレイ〕を大いなる名誉をもって受け入れ、かれ〔ユーレイ〕に〔糧秣を積んだ〕荷車を与えた。こうして、ユーレイ [D17] はスーズダリへと出発した。

イジャスラフ [D112:I] は、ヴァチェスラフ [D16] とともにキエフ〔の公座〕に座した。ヴァチェスラフ [D16] は大〔ヤロスラフ〕館⁷⁹⁾に住み、イジャスラフ [D112:I] はウゴル〔の丘〕の麓⁸⁰⁾に住んだ。そして、息子のムスチスラフ [I1] をベレヤスラヴリの〔公として〕据えた。

この年、ポロツク人たちが、自分たちの公ログヴォロド・ポリソヴィチ [L11] を捕まえて、ミンスクに送った⁸¹⁾。そして、そこでかれを拘留してひどく苦しめ、自分たちのもとは〔ロスチスラフ〕・グレーボヴィチ [L52] を〔公として〕連れてきた。

それから、ポロツク人たちは、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] のもと⁸²⁾へ和解のための使節を派遣した。これは、かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕を自分たちの父として、かれに従属するためであった。〔ポロツク人は〕【446】このことを、かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕の十字架に接吻し〔て誓〕った。

77) ユーレイ [D17] は、ベレヤスラヴリに残した息子グレーブ [D178] を、この時点ではゴロドク（「オステルスキイ・ゴロデツ」(Остерский городец) に呼び寄せていたことがわかる。

78) ノヴゴロド・セヴェルスキイは、先にスヴァトスラフ [C43] がイジャスラフ [C35] と合意して、分け合って取った「父の地」(オレグ [C4] の所領) である。オレグ [C4] は、1097年のリューベチ諸公会議で、ノヴゴロド・セヴェルスキイを公支配することが決められていた。

79) 原文では、на Велицѣмъ дворѣで、これはキエフの丘のウラジーミル街区の中心にある「大ヤロスラフの館」(Великий Ярославов двор) を指している。(〔Каргер 1958: C. 269〕および〔Толочко 2009: C. 158〕所収の地図を参照) この時代には、この館がいわばキエフ公の支配の拠点であり、ここからも、イジャスラフ [D112:I] が外見的にはヴァチェスラフ [D16] をキエフ公として尊重していたことがわかる。

80) 「ウゴルの丘の麓」とはキエフの丘から南に 5km ほどの所にあったと推定される場所で、1146年にイーゴリ [C42] がキエフ人を呼び寄せた場所としても年代記に記されており（〔イパーチイ年代記 (2) : 338 頁, 注 312〕), ここに公のための「館」(двор) があったことは確かである。ただし、遺構等は発見されていないため、場所を特定するのは難しい〔Каргер 1958: C. 274-275〕。政治的中心のキエフの丘から離れており、二義的な場所であったことは確かである。

81) 当時のミンスク公は、すぐあとに言及されるロスチスラフ・グレーボヴィチ [L52] だった。

82) 使節はノヴゴロド・セヴェルスキイへ派遣された。

この頃、イジャスラフ [D112:I] の妃⁸³⁾ が逝去した⁸⁴⁾。

6660 [1152] 年

イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] は、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] およびスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] と会合し、そこで協議して、ユーリイ [D17] の〔支配していた〕ゴロドク⁸⁵⁾ を破壊し、燃やした。木造屋根の聖ミハイル教会⁸⁶⁾ も焼失した⁸⁷⁾。

その時、〔ハンガリー〕王は、イジャスラフ [D112:I] に使者を遣ってこう言った。「父よ、あなたに拝礼します。あなたはわたしに、ガーリチの公〔ウラジミルコ [A121]〕が侮辱を与えたことについて使者を遣って知らせてきました⁸⁸⁾。わたしは、今、出陣の準備をしています。あなたも急いで下さい。どうか、あなた方二人⁸⁹⁾ は、自分の力だけを持つことをしないように⁹⁰⁾。神の御心がわれらに示す通りにしましょう」。

イジャスラフ [D112:I] は、自分の息子のムスチスラフ⁹¹⁾ [I1] を、王のもとへ、ハンガリーへ

83) このイジャスラフの最初の妻については、名前も結婚の年代も不明で、年代記ではこの死亡記事があるだけである。ポーランドの史料によると、ドイツ(神聖ローマ)皇帝フリードリヒ・バルバロッサの一族の出身であるという。[Літопис руський, 1989: С. 251, прим. 23]

84) この記事は『ラヴレンチイ年代記』『ノヴゴロド第一年代記』にも並行記事がある。『ノヴゴロド第一年代記』では1151年の項に「同じ冬にイジャスラフの公妃が逝去した」(『ノヴゴロド第一年代記 [I]: 16頁]参照)とあり、妃の逝去は1151/1152年冬であると、より特定された書き方がなされている。

85) 「オステルスキイ・ゴロデツ」(Остерский городец)のこと。

86) 『15世紀末モスクワ年代記集成』の並行記事では、この教会は「石造りで、その屋根が木造であるミハイル教会」(церковь же бѣ в нем святаго Михаила камена, а верхъ ея дровом нарублен) [ПСРЛ Т. 25, 1949]とやや改変されている。

87) この記事は、先の1151年の項のゴロドク攻めの記事と直接つながっており、イジャスラフ [D112:I] はイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] とともに、攻略したこの城市にユーリイ [D17] が戻ってこられないよう徹底的に破壊したことを述べている。また、ユーリイがゴロドクに残したグレーブ [D178] は、追放されたのだろう。

88) 1151年の記事の最後の部分にある、イジャスラフ [D112:I] からハンガリー王ゲーザ二世への使者派遣とその要請の内容を指している。

89) キエフの共同統治者である、イジャスラフ [D112:I] とヴァチエスラフ [D16] の二人を指している。

90) 『ラヴレンチイ年代記』1151年の末尾の記事に「その年(1151/1152)の冬イジャスラフ [D112:I] はウラジミルコ [A121] 討伐に出発したが、コラチェフ(Корачев)で引き返した」とある。「自分の力だけを持つ」とは、この何らかの事情で中止されたイジャスラフ [D112:I] 単独の遠征の意図のことを指しているのではないか。

91) 敗北したムスチスラフは、当時ルチェスクに従士たちとともに退避していた。

と派遣した。これは、王がガーリチの公〔ウラジミルコ [A121]〕を討つようにするためだった⁹²⁾。

これに対して、王は進軍すべき時期を定めて、イジャスラフ [D112:I] に使者を遣って、こう言った。「わたしは、すでに馬に乗っており、〔あなたの〕息子ムスチスラフ [I1] を一緒に連れて行くところです。あなたも、乗馬して下さい」⁹³⁾。

イジャスラフ [D112:I] は、これを聞くと、自分の従士たちをすべて集めて、ヴァチェスラフ [D16] の部隊全員、すべての黒頭巾族、上流階層のキエフ人、すべてのルーシの従士たちを引き連れて、行軍を開始した。

こうして、ドロゴブージまで到着すると、かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕のもとに弟のウラジミル⁹⁴⁾ [D115] がやって来た。そこから二人はペレソブニツァに行った。その二人のもとへ、ウラジミル・アンドレヴィチ [D181] がやって来た。二人のもとにはまた、弟の【447】スヴァトボルク [D114] 公が、ヴラジミルから自分の部隊を率いてやって来た⁹⁵⁾。こうして、全員が合流し、王のもとへ向けて出発した。イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟スヴァトボルク [D114]

92) ムスチスラフの派遣について、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「イジャスラフは、自分の息子ムスチスラフをポーランドとハンガリーへと派遣した。(…)ポーランド人は来なかったが、ハンガリー人は来た」となっている。こちらが一次的な情報であり、『イパーチイ年代記』の記事は、イジャスラフ [D112:I] をよく見せるために、ポーランド人に援軍を断られた部分を削除したのだろう。

93) 以下のウラジミルコ [A121] 討伐の経緯は、『イパーチイ年代記』と『ラヴレンチイ年代記』では記述がやや異なっており、前者ではイジャスラフ [D112:I] がハンガリー王と合流してから戦闘が一回行われただけだが、後者では王はイジャスラフが到着する前にガーリチに侵攻して、一度ウラジミルコを撃ち破ってペレムィシェリへと敗走させている。その後、イジャスラフと合流して、再度、ウラジミルコを撃ち破ってペレヤスラヴリへ逃げ込ませ、講和（実質的な降伏）を勝ち取っている。

ベレジコフによれば、『ラヴレンチイ年代記』に反映されている原資料では、この個所の直ぐあとに、下注 101 の段落があったものを、『イパーチイ年代記』の記者（編集者）は、戦闘におけるイジャスラフ [D112:I] の役割を強調するために、下に移したという。[Бережков 1963: C. 155-156]。反対にナソノフは、戦闘の数の食い違いは、『ラヴレンチイ年代記』の編集者が、『イパーチイ年代記』に反映されている原資料を誤って要約した結果だと主張している。[Насонов 1969: C.95]

全体として、サン川の合戦についての『イパーチイ年代記』の記述は二次的な編集がほどこされており、『ラヴレンチイ年代記』に比べると、ハンガリー王に対するイジャスラフ [D112:I] の優越性が、至る所で強調されている。

94) イジャスラフ [D112:I] の異母弟であるウラジミル・ムスチスラヴィチ [D115] は、当時ドロゴブージの公であり、兄弟のスヴァトボルク [D114] とともにイジャスラフ一族のヴォルィニ地方支配を担っていた。

95) 上の記事（『イパーチイ年代記』(4): 350 頁）にあるように、1151 年 3 月～4 月にイジャスラフ [D112:I] は、ウラジミルコ [A121] を監視させるために、弟のスヴァトボルク [D114] をヴラジミルに派遣して支配をさせていた。

を伴うことなく、かれをヴラジミルへと帰郷させ⁹⁶⁾、かれの部隊だけを引き連れて行った。

イジャスラフ [D112:I] は、自分の部隊とともに、ヴラジミルから王の道⁹⁷⁾ を進んで行った。この道はかつて〔ハンガリー人が〕ヤロスラフ・スヴァトボルコヴィチ [B32] とともに、アンドレイ・ウラジーミヴィチ [D18] を討伐するために使った道であり、その時、ヤロスラフ [B32] はヴラジミルで殺されたのだった⁹⁸⁾。

イジャスラフ [D112:I] は、ペレムィシェリ (Перемышль) の近くを流れるサン⁹⁹⁾ (Сань) 川に到達した。そしてサン川を渡渉したとき、〔ハンガリー〕王から派遣された使者が 100 人の従士部隊とともに、かれ〔イジャスラフ〕のところにやって来た。そして、イジャスラフ [D112:I] にこう言った。「義弟である王は、あなたに拝礼します。王はあなたに言っています。『見よ、わたしはすでに、あなたを待ってここに布陣して 5 日目になる。来たれ』」。

イジャスラフ [D112:I] は、これを聞いて大急ぎで出発した。翌日、イジャスラフ [D112:I] は、ヤロスラヴリ¹⁰⁰⁾ (Ярославль) へと向かい、そこを通り過ぎてから、昼食をとるために陣を張った。〔ハンガリー〕王はそこへ、自分の家臣を、1000 人以上の部隊とともに派遣してきた。イジャスラフ [D112:I] は、そこで昼食をとり終わると、自分の部隊に戦闘準備をさせて、王のもとへと向かった。〔イジャスラフは〕〔王の〕陣営に着いた。〔ハンガリー〕王は、乗馬すると、自分の家臣たちとともに本営を出て、喜びと大きな名誉をもって、イジャスラフ [D112:I] を出迎えた。二人〔王とイジャスラフ〕は馬で行き、王の幕営に入って共に座り、翌日の朝早く、サン川まで出撃して戦うことについて協議を始め、合意した。

翌朝早く、王は太鼓を討たせて、部隊の戦闘準備をさせた。**[448]**〔王は〕イジャスラフ [D112:I] のもとに向かい、使者を遣って言った。「自分の部隊を率いて、わが部隊の近くに来たれ。わたしが陣を張った場所に、あなたも陣を構えよ。すべてについて、われらがよく思慮することができるように」。イジャスラフ [D112:I] は、王に対して「息子よ、そうなりますように」と言った。こうして、〔二人は〕サン川のペレムィシェリより下流のところへと向かった。そこで、

96) ヴラジミルの城市は、イジャスラフ [D112:I] にとってヴォルィニ地方支配の重要な拠点であり、弟のスヴァトボルク [D114] には、遠征時の手薄なときの城市防衛を任せただろう。

97) 「王の道」(королева дорога) については、『イーゴリ軍記』の中のウラジミルコ [A121] の息子ヤロスラフ八智公(Осмомысль)[A1211] への呼びかけの中に、八智公は「王の道を防ぎとめた」(заступивъ королевѣи руть)との句があり [Словарь-СПИ 4: С. 222]、これと同じものを指していると考えられる。ハンガリー王の遠征路として広く知られていたのだろう。

98) 1123 年のヤロスラフ [B32] のヴラジミル攻撃と敗北、その死を指している。[『イパーチイ年代記』 訳注 2: 291-292 頁, 注 39] 参照。

99) ヴィスワ川右岸の支流で、ペレムィシェリはこの川に右岸に位置している。

100) ヤロスラヴィリ(Ярославль)はペレムィシェリより下流のサン川左岸にあった城市。現在のポーランドの「ヤロスワフ村」(Jarosław)に相当する。伝説によれば 1031 年にヤロスラフ賢公によって建設されたという。

全軍の部隊を布陣させた。

ウラジミルコ [A121] は、〔サン川の〕 対岸に自分の部隊を配備していた。

〔ハンガリー〕 王の部隊は 73 個あった。他はイジャスラフ [D112:I] の部隊であり、他に運搬用の馬と輜重車用の馬がいた。

こうして、かれ〔ハンガリー王〕は、ガーリチの地へ侵入し、ウラジミルコ [A121] と対峙した。日曜日だったので陣を張った。王は自らの習慣で、どこであろうとも、日曜日に陣を払って進軍をすることはなかったのである。ウラジミルコ [A121] は、自分の地に軍隊を入れることを許すまいと、〔敵を〕 待ち受け、王の輜重部隊を捕獲した。

翌日、王は陣を払って進軍を始めた。ウラジミルコ [A121] は軍を引くと、砦の背後に布陣した¹⁰¹⁾。

王は自分の部隊を浅瀬に派遣して〔渡渉しようとした〕。

ガーリチ人もこれに対して、自分たちの部隊を派遣したが、王に対抗して、兵を集中させることはできなかった。ウラジミルコ [A121] は、自分の部隊とともにそこへ進軍した。王もこれを迎え撃つべく陣を布いた。イジャスラフ [D112:I] は自分の部隊と共に浅瀬の上流へと軍を進め、行軍して、王よりも上流地点の別の浅瀬のところで布陣した。別の多くのハンガリー人からなる部隊は、イジャスラフ [D112:I] の傍らを通り過ぎて、イジャスラフ [D112:I] よりさらに上流の浅瀬へと向かった。

イジャスラフ [D112:I] は、自分の従士たちに向かって言った。「兄弟たちよ、従士たちよ、神はこれまで、ルーシの地と **[449]** ルーシの息子たちの名誉を、損なわれたまま¹⁰²⁾ にしたことはなかった。かれら〔ルーシの地とルーシの息子たち〕はいかなる場合であっても、自分たちの名誉を取り戻してきた。兄弟たちよ、今や、この地において、異族¹⁰³⁾ を前にして全員が力を尽くそうではないか。どうか神はわれらに名誉を取り戻させ給わんことを」。

イジャスラフ [D112:I] は、自分の従士たちにこう言うと、すべての自分の部隊を引き連れて浅瀬へと突進した。

王とかれのすべての部隊は、ウラジミルコ [A121] の部隊を見て、遅れることなく、これ〔敵の部隊〕に向かって〔渡河しよう〕と、それぞれの〔持ち場の〕浅瀬へと突進し、四方からウラジミルコ [A121] の部隊を襲撃した。こうして、かれらを溺れさせた。そこで多数を撃ち殺し、

101) この段落については、上注 93 を参照。

102) この場合の「名誉を損なわれたまま」(въ бещестьи) とは、ルーシの地に属するとされるヴォルィニ地方の諸城市(ブジェスク、シムスク、ティホムリ、グノイニツァなど)が、ルーシ人ではないガーリチ公(ウラジミルコ [A121]) の支配下に置かれていることを指している。

103) この「異族」(чужие языки) はハンガリー人たちを指している。

ある者は溺れさせ、またある者は捕虜に獲った。

ウラジミルコ [A121] は、ハンガリー人の軍勢を目にすると駆け出し、その面前から逃げ始めた。かれら〔ウラジミルコの軍勢〕は、ハンガリー人と黒頭巾族の前で混乱して隊列を乱した。〔ウラジミルコは〕イズビグネフ・イヴァチェヴィチ¹⁰⁴⁾ (Избыгнѣвъ Ивачевич) を連れただけで、ほとんど単騎でベレムイシェリ〔の城内〕へと逃げ込んだ。

その時、ベレムイシェリの城市は占領されてもおかしくなかった。なぜなら、城内には戦える者は誰もいなかったからである。しかし、〔ベレムイシェリ〕は占領されずにすんだ。なぜならば、公の館は城市の外のサン川の岸辺の草地に建てられており、その場所には多数の〔備蓄の〕天幕があり、〔イジャスラフ側の〕兵たちはみな、〔掠奪のために〕そこへ向かって突進していったからである。

イジャスラフ [D112:I] と王は、すべての自分の兵とすべての自分の従士たちを集めた。そして、〔ベレムイシェリの〕城市の前のヴァグル¹⁰⁵⁾ (Вягръ) 川の岸の上に二つの幕営が張られた。

ウラジミルコ [A121] は、王に軍使を送り、和を求め始めた。【450】 また、その日の夜、ウラジミルコ [A121] は、大司教¹⁰⁶⁾ と王の軍司令官たちに向けても使者を派遣して、わざと負傷したふりをして、こう言った。「次のことを王に頼んでほしい。『わたしはひどく負傷しました。王よ、わたしは、あなたの心を害したこと、再び、あなたに対抗して布陣していることを、大いに悔いています。王よ、今や、神は罪を赦すのだから、あなたもこれを赦して下さい。どうか、わたしをイジャスラフ [D112:I] に引き渡さないでほしい。なぜなら、わたしはひどく病んでいるのだから。もし、神がわたしを召すようなことがあったら、わたしの息子¹⁰⁷⁾ を、養子とし

104) 「イズビグネフ・イヴァチェヴィチ」(Избыгнѣвъ Ивачевич) については他に、6667(1159)年の記事の中に、ウラジミルコ [A121] の息子のガーリチ公ヤロスラフ [A1211] が「イズビグネフ」(Избыгнѣвъ) を、当時のキエフ大公イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] に使者として派遣したとある。そのことから、かれは歴代のガーリチ公に仕えた上級貴族だったと考えられる。

105) 「ヴァグル川」(Вягръ) は、サン川右岸の支流で現在のヴィヤール川 (В'яр) に相当する。その河口は、ベレムイシェリ (現在のプシェミセル) の城市から東に5kmほど離れている。1099年にはドレゴブージ公であったダヴィド・イーゴレヴィチ [F1] とポロヴェツの連合軍が、ハンガリー王カールマン1世と戦った場所として年代記に言及されている。

106) この大司教は、ハンガリーのカトリックの大司教座があったエステルゴム大司教「コケニエス」(Kökényes) のこと。この記事によって当時ゲーザ二世に従軍していたことがわかる。かれについては、1150年にゲーザ二世がベレムイシェリに迫ったとき、やはりウラジミルコ [A121] が仲介のための軍使を派遣した相手として、「ククニシ」(Кукниш) の名で言及されており、このときにも王に従軍していた。(『イパーチイ年代記』(4):346頁、注131))

107) ヤロスラフ [A1211] を指している。

て引き取って下さい¹⁰⁸⁾』。また、〔使者として遣わされたウラジミルコの〕家臣たちが、かれ〔王〕にこう言って、次のことを思い出させるよう〔ウラジミルコは命じた〕。「あなたの父は盲目でした¹⁰⁹⁾。わたし〔ウラジミルコ [A121]〕はあなたの父が侮辱を受けたとき、自分の槍、自分の部隊をもって十分にお仕えしました。あなたの父のためにポーランド人とも戦いました¹¹⁰⁾。そのことを思い出して、わたしを赦して下さい」。

そして、〔ウラジミルコ [A121]〕は大司教とその家臣たちに宛てて、多くの贈物を送った。それは、金貨、銀貨、金銀の容器、生地などだった。王が自分に敵対せず、王妃¹¹¹⁾の意向を実行に移さないよう、王にとりなすことを〔大司教たちに〕頼んだのである。

翌日、王はイジャスラフ [D112:I] と合流し、かれ〔イジャスラフ〕にこう告げた。「父よ、あなたに拝礼します。見よ、ウラジミルコ [A121] がわたしに使者を送って、拝礼して頼んできました。〔ウラジミルコは〕ひどく負傷しており、長く生きることはないとのことです。父よ、わたしはそのことをあなたに伝えます。あなたは、【451】どのように答えるでしょうか」。

イジャスラフ [D112:I] は王に言った。「息子よ、もしウラジミルコ [A121] が死ねば、それは神がかれを〔神罰によって〕殺したということである。なぜなら、かれ〔ウラジミルコ〕は、われら二人に対して自分がなした十字架接吻〔の誓い〕に違反したのだから¹¹²⁾。いったいかれは、正しく〔誓いを〕守ったとでも言うのか。さらに、かれ〔ウラジミルコ〕はわれら二人に辱めを加えたのだから。今、なぜそなたは、かれを信じようとするのか。かれは最初の〔誓い〕も、二番目の〔誓い〕も正しく守らなかったではないか。今は、どうか神がかれを討ち給わんことを。われら二人はかれ自身を捕まえて、その領地を没収しようではないか」。

108) ウラジミルコ [A121] は、ゲーザ二世の父ベーラ二世の伯父にあたるカールマン一世の娘と結婚しており（1117年頃）、息子ヤロスラフ [A1211] の母親はハンガリー王家の出身である。真意は別として、ウラジミルコ [A121] は、母方の一族に息子を委ねることを申し出ること、ハンガリー王家とのつながりを強調しているのだろう。

109) ゲーザ二世の父親は、ベーラ二世盲目王（在位 1108～1141年）で、1115年に伯父兄カールマン一世の手で両目を潰されていた。

110) 1132年にポーランド王ボレスワフ二世は、ポーランドとキエフ大公の連合軍を率いて、ベーラ二世の支配するハンガリーへ遠征しており、そのときにウラジミルコ [A121] がガーリチから、ハンガリー軍の援軍として駆けつけたことを指すと考えられる。

111) 「王妃の意向」(воля королевы) とは、王に嫁いだイジャスラフ [D112:I] の妹エフロシーニヤが、兄イジャスラフの意を体して、ウラジミルコ [A121] 征伐を王に迫っていることを示している。

112) このウラジミルコ [A121] の、イジャスラフ [D112:I] とハンガリー王ゲーザ二世に対する「十字架接吻違反」について、年代記の記事では明確な記述はないが、1150年10月にイジャスラフ [D112:I] の要請を受けたゲーザ二世は、ガーリチを攻め、これに対してウラジミルコ [A121] は王に献上品を贈って赦しを請い、和議を結んでいる。おそらく、このときに行った宣誓（「十字架接吻」）に対する侵犯のことを言っているのだろう。

ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] は、ウラジミルコ [A121] のあらゆる罪状を持ち出して、自分の父親イジャスラフ [D112:I] よりもさらに激しく、王に向かって異議を唱えた。

しかし、王はこれに耳を貸さず、大司教と自分の家臣たちの言葉に聞き従った。なぜなら、ウラジミルコ [A121] はかれらに、自分の財物を贈っていたからである。王は言った。「かれ〔ウラジミルコ〕がわたしに懇願して、わたしに拝礼し、自分の罪状を悔いている以上、わたしはかれを殺すことはできない。もし、今またかれが十字架接吻して、これに違反するようなことがあれば、そのときは、われらとかれのことは、神が定めるだろう。わたしがハンガリーの地にいるか、かれがガーリチ〔の地〕にいるかのどちらか〔で、共にあることはない〕だろう」。

さて、ウラジミルコ [A121] は、イジャスラフ [D112:I] に使者を派遣して言った。「兄弟よ、あなたに礼拝します。わたしは自分の罪状を悔いています。なぜなら、わたしに罪があるからです。兄弟よ、今はわたしを仲間として受け入れ、わたしを赦して下さい。また、王に対して、わたしを受け入れるよう命じて下さい。どうか、わたしとあなたについては、神が定められますように」。

イジャスラフ [D112:I] は、これらのことを見るのさえ嫌だったが、王と **[452]** その家臣たちに強いられて、やむなく、かれ〔ウラジミルコ〕との和議を開始した¹¹³⁾。

王は、ウラジミルコ [A121] に〔使者を通じて〕言った。「そなたは次のことを十字架接吻〔で誓う〕べきである。〔そなたが占領している〕ルーシの城市をすべて返還すること。イジャスラフ [D112:I] と共にあること。そして、善きことについても、悪しきことについてもかれ〔イジャスラフ [D112:I]〕と別れることはなく、つねにかれと共にあること」。

かれ〔ウラジミルコ〕は、これらすべてについて、喜んで〔和議に〕賛成した。

イジャスラフ [D112:I] と王は、会合を行った。〔イジャスラフ〕は、自分の弟のウラジミル [D115]、自分の息子のムスチスラフ [I1] とともに、王の幕営にやって来た。そして、かれら〔会合の参加者たちは〕自分たちの家臣に十字架を持たせて¹¹⁴⁾、ウラジミルコ [A121] のもとに派遣する準備を始めた。

イジャスラフ [D112:I] は、かれ〔ウラジミルコ〕に十字架〔接吻の宣誓〕をさせることを望んでいなかった。王はかれ〔イジャスラフ〕に言った。「父よ、あなたに言います。ここにあるのは確かに、われらの神キリストが、自らの意志によって磔刑を受けた十字架です。これは

113) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「イジャスラフ [D112:I] はかれ〔ウラジミルコ〕に和平を与えることを欲しなかったが、王の言うことに聴き従って、かれと和を結んだ」と事実の記述にとどめており、本年代記の記事は、イジャスラフ [D112:I] の側に立った潤色のあとがうかがえる。

114) 遠方の相手と和議を結ぶとき、使者に十字架を持たせ、それによって十字架接吻の宣誓をさせる事例はこれまでもあった ([イパーチイ年代記 (3): 346-347 頁] を参照)。

また、神がその意志によって、聖イシュトヴァーン¹¹⁵⁾ (святой Стефан)のもとに運ばれ、聖王が接吻をした十字架です。もし、かれ〔ウラジミルコ〕がこの〔十字架接吻で誓ったこと〕に違反したとするなら、十字架接吻に違反したその時から、父よ、これについては、わたしはあなたと同じ立場に立ちます。そのときには、わたしは戦場に斃れるか、ガーリチの地を占領するかのどちらかを選びます。しかし、今は、かの者〔ウラジミルコ〕を殺すことはわたしにはできません」。

こうして、かれらは、自分たちの家臣に尊い十字架を持たせて派遣すべく準備を始めた。イジャスラフ [D112:I] は、ピョートル・ポリソヴィチ¹¹⁶⁾を派遣した。王は、自分の家臣を派遣した。〔二人は〕自分たちの家臣を派遣して、〔ウラジミルコに対して〕こう言わせた。「見よ、そなたは、われら二人に使者を送った。見よ、神はそなたの罪状ゆえに、われら二人にそなたを与え、またそなたの領地を〔与え給うた〕。今、われらはそなたへの怒りを赦し、そなたの支配下にある領地を取り上げることはしない。しかし、次のことを十字架【453】接吻〔によって誓え〕。ルーシの地における〔そなたが占領した〕領地を、すべて返還すること。そなたは、イジャスラフ [D112:I] と別れることなく、すべての場所において共にあること」。

ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [II] は、自分の父イジャスラフ [D112:I] と王に言った。「わたしは、あなた方二人に言います。あなた方二人が行ったことは相応しいことです。すなわち、あなた方ははキリスト教徒として振る舞い、尊い十字架の〔誓い〕を信じて、かれ〔ウラジミルコ〕への怒りを赦したことです。しかし、わたしはあなた方二人に、この尊い十字架を前にして言います。あなた方が改めてかれを十字架に〔宣誓の接吻のために〕導こうとも、あの者〔ウラジミルコ〕は十字架接吻〔の誓い〕に違反するでしょう。王よ、どうか自分の言葉を忘れないで下さい。もしウラジミルコが〔十字架接吻の誓いに〕違反したら、自分は再びガーリチを包囲する、とあなたが言ったことを」。

王は〔これに対して〕言った。「わしは、確かにそなたに言おう。もし、ウラジミルコ [A121] が、この十字架への接吻に違反したら、〔そのようにすると〕。これまでは、わが父であるイジャスラフ [D112:I] が、わしに援軍の派遣を要請してきたが、もし、この件について、〔ウラジミルコが〕違反をするなら、わしのほうから、自分の父〔イジャスラフ [D112:I]〕に援軍の派遣

115) 「聖イシュトヴァーン」(святой Стефан)は、1000年～1038年にハンガリーを統治した王で、ハンガリーへのキリスト教普及に貢献し、のちにカトリックの聖人に列せられている。

116) 「ピョートル・ポリソヴィチ」(Петр Борисович)は、ボリスラヴィチ(Бориславич)とも言い、イジャスラフ [D112:I] の側近貴族。イジャスラフの死(1154年)の後には、その息子ムスチスラフ [II] にも仕えたイジャスラフ一族の重臣。([СККДР Вып.1: С. 329-332]参照)イジャスラフ一族の最も近くで腹心の使者などとして政治的な手腕を発揮したことから、ルィバコフはかれを、本年代記のかんりの部分の直接の記者であり、さらには、『イーゴリ軍記』の作者にも擬している。[Рыбаков 1963][Рыбаков 1972][Рыбаков 1991]。

を要請するつもりだ」。王はこう言って、自分の家臣たちをウラジミルコ [A121]のもとへ、〔十字架接吻の誓いをさせる使者として〕派遣した。

イジャスラフ [D112:I] および王の家臣たちが、ウラジミルコ [A121] に言った言葉は、次のようであった。「そなたの兄弟イジャスラフ [D112:I] と王はこう言っている。『そなたは、われら二人に使者を派遣して、自分の罪状を悔いた。そこで、われらはそのすべてについて、そなたを赦そう。そなたに帰属する領地を取り上げることはしない。しかし、次のことを、尊い十字架に接吻〔して誓え〕。そなたの支配下にあるルーシの地における領地¹¹⁷⁾を、すべて返還すること。そなたは、生涯イジャスラフ [D112:I] と別れることなく、すべての【454】場所において共にあること』」。

ウラジミルコ [A121] は、このすべてについて十字架接吻〔の誓い〕をした¹¹⁸⁾。しかし、負傷して病に伏せている振りをしていた。かれは負傷などしていなかったのだった。

イジャスラフ [D112:I] は、王と一つの場所で会合して、大いなる親愛を結び、大いなる祝宴を張った。そして別れて、王は自分のハンガリーの地へ行き、イジャスラフ [D112:I] は、ルーシの地へと向かった。

イジャスラフ [D112:I] は、ウラジミルに到着すると、諸城市に自分の代官を派遣した。その諸城市とは、ウラジミルコ [A121] が、十字架接吻で〔イジャスラフへの引き渡しを誓った〕ところであり、それは、ブジュスク¹¹⁹⁾ (Бужеск), シュメスク¹²⁰⁾ (Шюмеск), ティホムリ¹²¹⁾ (Тихомль), ヴィゴシェフ¹²²⁾ (Выгошев), グノイニツァ¹²³⁾ (Гноиниця) であった。ところが、ウラジミルコ [A121] はこれらの城市を引き渡さなかったのである。

イジャスラフ [D112:I] は〔ウラジミルから〕キエフへと出発した。そして、王のもとには、

117) この領地とは、すぐあとに出てくるブジュスク、シュメスク、ティホムリ、ヴィゴシェフ、グノイニツァの諸城市を指している(下注119～123)。

118) のちの記述から(後注171を参照)、ウラジミルコ [A121] はベレムィシェリで十字架接吻の誓いを行い、その内容を記した文書をイジャスラフ [D112:I] に渡したことが分かる。

119) 「ブジュスク」(Бужеск)は、ウラジミル公領を流れる西ブーグ川の上流域にある城市。

120) 「シュメスク」(Шюмеск)はシュムスク(Шумск)のことで、ゴルイニ川上流支流のヴィリヤ(Вилия)川右岸に位置する。

121) 「ティホムリ」(Тихомль)の城市は、シュムスクから見てゴルイニ川の対岸に位置している。

122) 「ヴィゴシェフ」(Выгошев)については所在地が不明[Нерознак 1983: С. 52-53]だが、ゴルイニ川の上流域の城市か。

123) 「グノイニツァ」(Гноиниця)はゴルイニ川上流の城市でシュムスクからやや下流に位置している。以上のウラジミルコ [A121] が略取したとする五つの城市はすべて、ウラジミル公領を流れる川の上流域に位置しており、キエフ・ヴォルィニ・ガーリチの諸公領のちょうど境界領域にあたっている。

自分の家臣を派遣して、ウラジミルコ [A121] が十字架接吻〔の誓い〕に違反した¹²⁴⁾ ことを王に伝えて、こう言った。「そなたは、もはや後戻りはできない。わたしも後戻りはしない。わたしはそなたに言明する。ウラジミルコ [A121] は十字架接吻〔の誓い〕に違反したと。そなたは、そなたが言った自分の言葉を忘れないように」。

イジャスラフ [D112:I] は、キエフの自分の叔父ヴァチェスラフ [D16] のもとに、大いなる喜びと大いなる名誉をもってやって来た。そして、神とそのいとも淨い聖母を讚美した。そして、大いなる親愛を結び、大いなる祝宴を張った。

イジャスラフ [D112:I] は、キエフに到着すると、スモレンスクの自分の弟のロスチスラフ [D116:J] のもとに使者を遣って、次のことをかれに伝えた。すなわち、いかに王が健やかに自分と会ったか、いかに神が二人を助けて、ガーリチのウラジミルコ [A121] に勝たせて **【455】** くれたか、いかに神が健やかに自分を再びルーシの地へと帰らせてくれたか。

ロスチスラフ [D116:J] はこれを聞いて、非常に喜び、神を讚美した。

さて、ユーリイ [D17] は、かれのゴロデツ〔ゴロドク〕の城市全体が破壊され、焼かれたとの報を聞いて¹²⁵⁾、その時、心の底から〔悲しみの〕ため息をついた。かれは兵を集め始めた。そして、リャザンのヤロスラフ [C5] 一族¹²⁶⁾〔の諸公〕に宛てて使者を派遣し、「わしを助けるために来られよ」と言った。

イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] はそのことを聞くと、自分の弟のロスチスラフ [D116:J] に使者を遣って言った。「弟よ、そなたのもとにある地方は、神の御心により、ノヴゴロドには兵力があり、スモレンスク〔にも兵力があって強い〕。〔ノヴゴロドと〕共同して、

124) ウラジミルコ [A121] は、自らの「支配下にあるルーシの地における領地」の返還を誓ったにもかかわらず、それにあたる五つの城市に、イジャスラフ [D112:I] が派遣した代官を受け入れなかったことを指している。

125) この時点で、ユーリイ [D17] は、スーズダリの自らの支配領に戻っていた。

126) 「ヤロスラフ一族」(Ярославичи)の「ヤロスラフ」はヤロスラフ・スヴァトスラヴィチ [C5] のこと。かれは、1097年のリユーベチ会議でチェルニゴフ公に任じられたが、1128年初頭にフセヴォロド [C41] によってチェルニゴフを追われ、以後は、かれの領地はムーロムに限局された。かれ自身は1129年に没しているが、その後その子孫がリャザン及びムーロムの公として支配しており、この地の支配公一族のいわば始祖にあたる。1152年当時は、その息子のロスチスラフ・ヤロスラヴィチ [C54] がムーロムを、その孫のグレーブ・ロスチスラヴィチ [C542] がリャザンを公として支配していた。

自分たちの土地を警護せよ¹²⁷⁾。もし、ユーリイ [D17] がそなたを討ちに進軍するようなことがあれば、わしは、そなたのもとに〔援軍に〕行く。〔ユーリイが〕そなたに向かっては進軍せず、そなたの領地を迂回するようなことがあれば、ここのわしのもとへと〔援軍として〕来たれ」。

その時、ロスチスラフ・ヤロスラヴィチ¹²⁸⁾ [C54] は、その兄弟たちとともに、リャザン人、ムーロム人を率いて、ユーリイ [D17] とともに進軍を開始していた¹²⁹⁾。〔リャザン諸公は〕かれ〔ユーリイ [D17]〕への援軍を断らなかつた¹³⁰⁾。さらに、ポロヴェツ人、オトベルリュ族、トクソバ族¹³¹⁾ など、ヴォルガ川とドニエプル川の間に居住する、すべてのポロヴェツの部族も〔進軍した〕。かれら〔遠征軍〕は、ヴァティチの地へと進軍し、この地を占領して、ムツェンスク¹³²⁾ (Мценск) へ行き、そこから、スパーシ¹³³⁾ (Спашь) とグルーホフ¹³⁴⁾ (Глухов) へ行き、そこで陣を張った。

ウラジミルコ [A121] は、自分の姻戚〔嫁の父〕であるユーリイ [D17] が、ルーシへ進軍しているとの報を聞くと、ガーリチを出て、キエフへと軍を進めた。

イジャスラフ [D112:I] は、ウラジミルコ [A121] を討つべく進軍を開始した。すると、ウラ

127) ユーリイ [D17] が再度挙兵してキエフに攻め込む場合、もしヴォルガ川を使えば、スモレンスクを経由する可能性が高いことを言っている。あとで見ると、実際には、ユーリイ [D17] はヴァティチの地を経由して進軍している。

128) ロスチスラフ・ヤロスラヴィチ [C54] はヤロスラフ [C5] の息子。当時はムーロム公で、一族の最年長者だった。一年後の 1153 年に没している。

129) マフノヴェツはこの遠征開始の日を、秋のユーリイの祭日である 1152 年の 11 月 26 日と推定している。

130) ロスチスラフ [C54] を筆頭とするリャザン諸公が、ユーリイ [D17] への援軍を「断らなかつた」と書いてあるのは、断ったケースもあったことを示唆している。後に記される、1154 年の途中で撤退した遠征の場合は、リャザン諸公は参加していないようである。

131) トクソバ族 (токсобици) は、1147 年の記事にスヴァトスラフ [C43] の同盟者として登場している ([イパーチイ年代記 (3) : 注 80] 参照)。オトベルリュ族 (Отъперльюеве) も同様に族長の名からきたポロヴェツ人の部族名である。

132) 「ムツェンスク」(Мъченьск) は、現在のロシア連邦オリョール州の都市で、オカ川支流ズーシャ川右岸位置する城砦。

133) 「スパーシ」(Спашь) は 1147 年の記事にも、スヴァトスラフ [C43] が遠征途上で立ち寄ったと言及されており、オカ川上流にあつたと想定される城砦。

134) 「グルーホフ」(Глухов) は、デスナ川とセイム川に挟まれ、プチヴリから北へ約 37km の地点にあつた城市。現在のウクライナの「フルーヒウ」(Глухів) に相当する。ムツェンスクからだと、南西に 200km ほど移動したことになり、かなりの距離の遠征になる。

ジミルコ [A121] は、ガーリチへと引き返してしまった¹³⁵⁾。

多くのポロヴェツ人が【456】オルゴフ (Олгов)¹³⁶⁾ に滞在していたユーリイ [D17] のところへとやって来た。

ユーリイ [D17] は、自分の姻戚¹³⁷⁾〔娘の舅〕であるスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] のもとに¹³⁸⁾ 使者を遣って「わしと共に進軍せよ」と言った。スヴァトスラフ [C43] は、怖がって、「そのようなことをすれば、〔イジャスラフ [D112:I] が〕わしを討伐に来るではないか」と言った。しかし、かれ〔ユーリイ〕の後から軍を進めた。これは、ユーリイ [D17] が「そなたたちが、わしのごロデツ〔ゴロドク〕と教会を焼いたのだから、わしはその報復に〔そなたの城市と教会を〕焼くつもりだ¹³⁹⁾」と言ったからである。

そこから、〔ユーリイは〕ベレゾイ¹⁴⁰⁾ (Березой)へ進軍し、スヴィニ¹⁴¹⁾ (Свинь)川で陣を張った。土曜日だった。翌日の日曜日¹⁴²⁾ は、城市を〔襲撃するために〕進軍しようとはせず、ギュリチェフ¹⁴³⁾ (Гюричев)で陣を張った。

このように、ユーリイ [D17] は、スモレンスクの領地を迂回して〔進軍した〕。そこで、ロスチスラフ [D116:J] は、スモレンスクを出て、かれ〔ユーリイ〕のあとを追った。かれの前を

135) このウラジミルコ [A121] の行動は、イジャスラフ [D112:I] の率いる軍隊に勝利することは不可能と考えての退却だろう。

136) 「オルゴフ」(Олгов)あるいは「オリゴフ」(Ольгов)については、グルーホフからほど遠くない場所の地名と考えられるが詳細は不明。また、原文の Олгву を Олговичу の誤記と解釈すれば人名となり、「スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [D43]」を指していると理解することも可能である。

137) ユーリイ [D17] の娘は 1150 年にスヴァトスラフ [C43] の息子オレーグ [C431] に嫁いでいる。(〔イバーチイ年代記 (4) : 333 頁, 注 59, 60〕参照)

138) 当時、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] はノヴゴロド・セヴェルスキイ公だった。上注 78 を参照。

139) 6660 [1152] 年の項の記事の冒頭には、イジャスラフ [D112:I] が、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] 及びスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] とともにゴロドク (オステルスキイ・ゴロデツ) を焼いたとあり、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] がこのゴロドク城市破壊に参加していたとは書いていない (上注 86, 87 を参照)。ただし、このユーリイ [D17] の言葉は、ゴロドクを焼いて破壊したことの報復として、スヴァトスラフ [C43] が支配する城市ノヴゴロド・セヴェルスキイを焼くと脅迫していることから、スヴァトスラフ [C43] はゴロドク破壊に参加していたのかもしれない。

140) 「ベレゾイ」(Березой, Березов, Березовой) は、デスナ川右岸にあった城砦。現在のベレズナ (Березна) 村に相当し、チェルニゴフの中心から東北東に 34km ほど離れている。

141) 「スヴィニ」(Свинь) は、「スヴィナヤ」(Свиная), 「スヴィナ」(Свина) とも呼ばれる川の名称で、チェルニゴフとスノフ (Снов) 川の間を流れ、多くの研究者は現在の「ザムグライ」(Замглай) 川と同一定している。[Зайцев 2009: № 84]

142) マフノヴェツによれば、1152 年 12 月 21 日の日曜日としている。

143) 「ギュリチェフ」(Гюричев, Гуричев, Горичев) は「ボプロヴィツィ」(Бобровицы) とも言い、デスナ川右岸にあった城砦で、チェルニゴフ城市の中心からは 10km ほど東北東に離れた地点にあったとされる。[Куза 1996: С. 109]。上注 141 のザムグライ川の河口あたりと推定される。

先行して、リューベチ¹⁴⁴⁾(Любеч)へと向かい、ユーリイ[D17]の先回りをした。なぜなら、すでに、自分の兄イジャスラフ[D112:I]と協議して、チェルニゴフのイジャスラフ・ダヴィドヴィチ[C35]を支援するために軍を派遣する準備をしていたからである。

ロスチスラフ[D116:J]は、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ[C411:G]¹⁴⁵⁾とともに、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ[C35]を支援するため、二人で、チェルニゴフへ入城した。そして、二人は、かれ〔イジャスラフ[C35]〕と一緒に〔チェルニゴフに〕立て籠もった。

ユーリイ[D17]は、ギュリチェフで陣を構えると、チェルニゴフを攻略するためにポロヴェツ人を派遣した。ポロヴェツ人は、〔チェルニゴフの〕城市にやってくる、多くの捕虜を獲り、セムイニ¹⁴⁶⁾(Семьнь)を焼いた。

その日の夜、イジャスラフ[D112:I]、ロスチスラフ[D116:J]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ[C411:G]は、ポロヴェツ人の軍隊を見て、外廊の防柵付近にいる人々に対して、〔チェルニゴフの〕内城¹⁴⁷⁾へと急ぎ避難するよう命じた。

翌日¹⁴⁸⁾、ユーリイ[D17]とスヴァトスラフ[C43]は、自分たちの兵に戦闘の準備をさせると、〔チェルニゴフの〕城市へ向かって進軍したが、【457】セムイニに到達する前に陣を張った。その時、多数のポロヴェツ人が城内に突入しようと一挙に進撃し、外廊柵を破壊し、外郭をすべて焼き払った。そして、〔ユーリイの軍勢は〕全軍をもってそこに到来して、城の周囲を包囲した。

チェルニゴフ人たちは城内から戦った。〔ユーリイ側の〕諸公は評議をして、〔こう言った〕。「従士たちとポロヴェツ人は、〔チェルニゴフ人と〕激しく戦っていない。われら自身が、かれらと一緒に行動していないからだ」。アンドレイ[D173]は言った。「これから自分は今日一日の戦いを始める、そのように皆が戦おうではないか」。そして、〔アンドレイは〕自分の従士たちを引き連れて、〔チェルニゴフの〕城下へ向けて進軍した。

144) 「リューベチ」(Любеч)は、ドニエプル中流左岸に位置する城市で、スモレンスクからだ船でドニエプル川を下ればすぐに到達できる。そこから、陸路でチェルニゴフへは北西約50kmと近い。

145) この記述によって、すぐ上のロスチスラフ[D116:J]がユーリイ[D17]の「先回り」をしてリューベチに行ったのは、スヴァトスラフ[C411:G]と合流するためだったことが推定できる。この城市は伝統的にオレーグ族の所領であり、チェルニゴフの附属城市的な性格を持っていたこともあり、このときスヴァトスラフ[C411:G]は、公としてリューベチを支配していたのではないか。

146) 「セムイニ」(Семьнь)、ギュルチェフとチェルニゴフの間にあったことは確かだが、特定は難しい[Nасонов 2002: C. 209]。マフノヴェツの索引では、ストリジェニ(Стрижень)川左岸にあった村の名としている。その場合、チェルニゴフ城市の中心から北に1kmほどしか離れていないことになる。

147) 「内城」(дѣгинець)とは、チェルニゴフの城市の中でもストリジェニ川河口周辺200メートル四方ほどの石壁に囲まれた空間で、中には救世主首座教会など主要な建物があった。

148) マフノヴェツの計算によると1152年12月22日に相当する。

城内から歩兵が出てきた。矢の射合いになった。〔アンドレイは〕従士たちとポロヴェツ人を率いて、かれら〔敵の歩兵〕に向かって突進した。そして、ある者は撃ち殺し、ある者は城内へと追いやった。

その時、他の諸公も勢いづいて、かれ〔アンドレイ〕の後を追って城下へと向かっていた。〔敵の〕歩兵は、部隊がやって来るのを見て、敢えて城外へ出ようとはしなくなった。ひどく恐れたからである。

〔ユーリイ勢は〕12日間〔チェルニゴフの〕城下に布陣した。

その時、ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] は、ドニエプル川のこちら側の、ルジチ¹⁴⁹⁾ (Лжиць) に陣を張っていた。ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] は、ユーリイ [D17] がチェルニゴフを包囲しており、ポロヴェツ人がチェルニゴフへ向けて押し寄せていること、城市〔チェルニゴフ〕を焼いていることを聞いた。そこで、二人は、自分たちの部隊を率いて、ルジチからチェルニゴフへ向けて進軍を始めた。モロヴィイスク¹⁵⁰⁾ (Моровииск) に至ったとき、そこで双方の、すなわちヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] の斥候とユーリイ [D17] の斥候が互いに相手を認めた。

ポロヴェツ人は情報をとるための捕虜を捕獲すると、ユーリイ [D17] のところに連れて行った。ユーリイ [D17]、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]、リャザンの諸公は報告を受けた。**[458]** ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] が、チェルニゴフ人を支援するために進軍してくるということだった。ポロヴェツ人はこれを〔聞いて〕怯え、軍を引き始めた。諸公は、ポロヴェツ人が退却しているのを見て、チェルニゴフから撤退を始め、スヴィニ川¹⁵¹⁾ (Свинь) の向こうまで、さらにスノフ (Снов) 川の向こう¹⁵²⁾ まで軍を引いた。

149) 「ルジチ」(Лжиць) はフレーブニコフ写本では Олжичь と表記されており、1142年の項にある地名「オリジチエ」(Ольжичие) と同じ ([イパーチイ年代記 2:326 頁, 注 229] 参照)。ドニエプル川とデスナ (Десна) 川の合流地点近くの村で、キエフからは北東に 9km ほどの対岸位置しており、チェルニゴフからだとまだ 120km ほども離れている。「ドニエプル川のこちら側」とはチェルニゴフから見て此岸にあたるということで、年代記記者の視点を反映している。

150) 「モロヴィイスク」(Моровииск) は、1139年の記事にもあり ([イパーチイ年代記 2:315 頁, 注 165] 参照)、デスナ川右岸に位置する城砦で、キエフとチェルニゴフのほぼ中間、チェルニゴフから約 54km ほど離れた場所に位置している。現在の「モリフシク」(Морівськ) 村に相当する。

151) 「スヴィニ」(Свинь) 川は現在のザムグライ川 (Замглай) に相当すると推定されており、デスナ川右岸に注ぐ河口はチェルニゴフの上流 12km ほどのところにある (注 141 参照)。

152) チェルニゴフ城市から、スヴィニ川を渡り、さらにデスナ川右岸の支流スノフ川 (Снов; Сновь) (河口はチェルニゴフから上流 16km ほど) を渡って、スノフ川左岸まで退却したということ。

ヴァチェスラフ [D16] とイジャスラフ [D112:I] は、やって来て、ボロヴェス¹⁵³ (Боловес) 川で陣を張った。その二人のもとに、ロスチスラフ [D116:J], イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35], スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ¹⁵⁴ [C411:G] がやって来た。かれらは評議を始め、かれら〔ユーリイ勢〕を追って進軍しようとしたが、合意には至らなかった。なぜなら、かれら〔ユーリイ勢〕は速やかに退却をしており、また、すでに氷結の季節が近づいていたからである¹⁵⁵。

こうして、かれら〔ヴァチェスラフ＝イジャスラフ陣営の諸公〕は、それぞれ自分の郷国に帰ること、川の氷が固まるときまでは、軍備を整えることで合意した。

ポロヴェツ人は、かれら〔ユーリイ勢〕のもとを離れてプチヴリ¹⁵⁶ に行き、〔そこから〕ポロヴェツ人のもとへと行った〔帰郷した〕。〔その途中で〕かれらはひどく〔ユーリイ勢の諸公〕の領地を破壊した。

ユーリイ [D17] は、ノヴゴロド・セヴェルスキイ¹⁵⁷ へと向かい、そこから、ルイリスク¹⁵⁸ (Рыльск) へ行った。ルイリスクからスーズダリへと行こうとしたのである。

そのかれ〔ユーリイ〕のもとへ、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] が急ぎ追いかけて来て、かれを引き留めようとして、かれにこう言い始めた。「そなたは、わしを置いて、帰ろうとしている。こうして、そなたはわしの領地を荒廃させ、そなたは、わしの城市のまわりで、穀物を踏み荒らした。ポロヴェツ人はポロヴェツ人のもとに帰ってしまった。このあと、イジャス

153) 「ボロヴェス川」(Боловес) は、デスナ川右岸の支流で、現在のピロウス川 (Білоус; Белоус) のこと。チェルニゴフの内城から西へ 5km ほど離れた場所にある。

154) このスヴァトスラフ [C411:G] の名はフレーブニコフ写本、ポゴージン写本にはない。ただし、前後の記述ではかれはロマン [J1] と行動をともにしているので、この時点でも同伴していた可能性が高い。当時、スヴァトスラフ [C411:G] はリューベチで公支配をしていたと思われる (上注 145 参照)。

155) 川が氷結すると川船が使えなくなり、代わりに川の氷上を橇で移動することになる。そのため、あらかじめ冬の戦備を整える必要があった。

156) 「プチヴリ」(Путивль) は、デスナ川の左岸支流セイム川の流域中ほどにあり、いわゆるボセミエ (セイム川流域の地域名) の主要都市のひとつ。チェルニゴフから退却してポロヴェツの跋扈する平原へ至る途上に位置する。『イーゴリ軍記』が描いているポロヴェツ遠征でも、イーゴリ [C432] が息子ウラジーミルをこの地から遠征に随伴させた。また、作品の中で、イーゴリの妻ヤロスラヴナはプチヴリで夫の悲運を嘆いている。

157) 当時、ノヴゴロド・セヴェルスキイは、ユーリイ [D17] の同盟者スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] の領地だった。

158) 「ルイリスク」(Рыльск) はセイム川右岸の城市で、現在もロシアのクルスク州にある同名の都市。ノヴゴロド・セヴェルスキイから、ユーリイ [D17] はおそらく陸路でここに向かったと考えられ、南東方向に 105km ほど移動したことになる。ここからは、セイム川、スヴァラ川を経て、オカ川へと連水陸路を渡り、川を使ってスーズダリに行くことができる。

ラフ [D112:I] は、自分の兄弟たちと一緒にあって、そなたの代わりにわしを討つために進軍してくるだろう。そして、わしの残された領地を破壊するだろう」。

ユーレイ [D17] は、かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕に援軍を【459】残すことを同意したが、〔援軍として〕残したのは自分の息子ヴァシリコ [D174] に、50 人の従士をつけたに過ぎなかった¹⁵⁹⁾。

こうして、ユーレイ [D17] はスーズダリへと向かった。〔ユーレイは〕 ヴァティチの地に軍を進め、ヴァティチの〔地の〕残された〔城市を〕占領した。

ヴァチェスラフ [D16] は、イジャスラフ [D112:I] と評議した。そして、川が氷結したことを確認すると、イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟ロスチスラフ [D116:J] がいるスモレンスクへ使者を派遣して、かれにこう言った。「そなたは、神の御心によって、かの地、スモレンスクと大ノヴゴロドにいる。そなたは、かの地にあつて、ユーレイ [D17] と敵どもを牽制せよ。わしのもとには、そなたの息子ロマン [J1] を援軍として派遣せよ」。

こうして、〔各地に〕使者を派遣して、自分の軍勢を集合させると、ヴァチェスラフ [D16] は、イジャスラフ [D112:I] とともに¹⁶⁰⁾、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] とヴァシリコ・ユーリエヴィチ [D174] を討つべく、ノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕へ向けて進軍を始めた。

二人がアルト川で宿営したとき、イジャスラフ [D112:I] はヴァチェスラフ [D16] に言った。「父よ、あなたはもう年老いている。あなたは、もはや苦勞するには及ばない。どうか、自分のキエフに戻られよ。ただ、あなたの部隊は、わたしと一緒に進軍させてほしい」。

さて、〔イジャスラフは〕フセヴォロジ¹⁶¹⁾ (Всеволож) で陣営を張り、そこで、自分の息子ムスチスラフ [I1] に対して、かれ〔ムスチスラフ〕の部隊と黒頭巾族の全軍¹⁶²⁾ を率いて、ポロヴェ

159) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「ユーレイは自分の息子ヴァシリコ [D174] をノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕のスヴァトスラフ [C43] のもとに残し」となっている。

160) このノヴゴロド・セヴェルスキイ遠征のイジャスラフ陣営の参加者について、『ラヴレンチイ年代記』では、「自分の兄弟のスヴァトボルク [D114] と自分の息子のムスチスラフ [I1] を伴って」となっており、『イパーチイ年代記』の記述とは異なっている。ただ『イパーチイ年代記』の以下の記述で、ムスチスラフ [I1] は遠征の途中で陣営を離れていることから、『イパーチイ年代記』の編集者はあらかじめ削ってしまったのだろう。ヴァチェスラフ [D16] については、以下にイジャスラフ [D112:I] が老齡をいたわる描写があることから、参加者に加えたのではないか。

161) 「フセヴォロジ」(Всеволож) は、チェルニゴフから南東約 65km に位置する、現在のシヴォロジ (Сиволож) に同定されている。

162) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「ベレンディ人、トルク人、ベチエネグ人とともに」と「黒頭巾族」を構成する部族名が書かれている。

ツ人を討伐すべく派遣した¹⁶³⁾。

ヴァチェスラフ [D16] はキエフへと向かった。

イジャスラフ [D112:I] はノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕へと進軍を始めた。そこのかれ〔イジャスラフ〕のところにスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] とかれの甥のロマン・ロスチスラヴィチ [J1] が、自分の部隊を連れてスモレンスクからやって来た。

イジャスラフはノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕に到着した。

別のイジャスラフであるダヴィドヴィチ [C35], スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G], ロマン・ロスチスラヴィチ [J1] は、2月¹⁶⁴⁾に自分たちの部隊を引き連れて【460】〔ノヴゴロド・セヴェルスキイの〕城市へと向かった。

城市の外郭の門のところで戦いが始まった。かれらは〔敵を〕城内へと押し込んで、外郭の城柵を占拠した。それから、城柵を出て、城下から撤退して、自分たちの天幕のところに行った。

城柵を占拠してから3日目に、〔籠城していた〕スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] が、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] のもとに軍使を派遣して、かれに礼拝して、和を乞うた。イジャスラフ [D112:I] は、かれとの和平を望んでいなかったが、すでに春も近いことから¹⁶⁵⁾、和を結んだ。こうして、お互いに十字架接吻して〔和平の条件を守ることを誓い〕、解散した。

イジャスラフ [D112:I] は、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] とともに、チェルニゴフへ向けて出発した。ロマン [J1] は、スモレンスクの父の元へと〔出発した〕。スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、自分の領地¹⁶⁶⁾へと向かった。

他方、ヴァシリコ・ユーリエヴィチ [D174] は、スーズダリの自分の父のもとへと向かった。

イジャスラフ [D112:I] がチェルニゴフに到着したとき、そこのかれのところに、息子のムスチスラフ [I1] から知らせが届いた。かれ〔ムスチスラフ〕は、神の助けによって、ウグ

163) 以下の注 167, 168 にあるように、ドニエプル川の最下流域のポロヴェツの居住地(オレリ川, サマラ川)まで行っている。

164) 1153年2月に相当する。

165) 春になって川の氷が融け始めると、橇による行軍や輸送に支障が生じるということ。

166) この領地がどこかははっきりしないが、リューブチ(Любеч)を指すのではないか(上注 145 参照)。

ラ¹⁶⁷⁾(Угла)川とサマラ¹⁶⁸⁾(Самара)川でポロヴェツ人を撃ち破り、多くの捕虜を獲り、〔ポロヴェツ人の〕本拠地まで追いかけて、かれらの幕舎、かれらの馬匹、かれらの家畜を捕獲したと言う。また、捕虜になっていた多くのキリスト教徒を助け出し、ペレヤスラヴリまで帰還し、そこでこのような助けを得たことで神を讃美し、助け出した捕虜たちを生まれ故郷へと帰らせたとのことだった。

イジャスラフ [D112:I] は、自分の息子〔ムスチスラフ〕が健在であることを〔使者から〕聞くと、神を讃美し、〔チェルニゴフ公の〕イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] とともに祝宴を張った。

翌日、イジャスラフ [D112:I] はキエフへと出発した。**【461】**かれは、自分のムスチスラフ [I1] とともにキエフに入城した¹⁶⁹⁾。二人は、大いなる名誉と大いなる称賛をもって、自分の父であるヴァチェスラフ [D16] のもとにやって来た。ヴァチェスラフ [D16] は、自分の息子イジャスラフ [D112:I] が健在であることを見ると、神と生命を与える十字架の力を称賛した。そして、大いに親愛を深め、大いなる宴を張った。このようにして、〔共同統治の〕生活が始まった。

イジャスラフ [D112:I] は、スモレンスクの自分の弟ロスチスラフ [D116:J] のもとに使者を遣り、かれに伝えた。〔イジャスラフは〕自らスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] 討伐の遠征に行き、かれ〔スヴァトスラフ〕と和を結んだこと、また、ムスチスラフ [I1] がやって来て、ポロヴェツ人を撃ち破り、多くの捕虜を獲ったことを。

ロスチスラフ [D116:J] は、これらをすべて聞くと、神と生命を与える十字架の力を称賛し、大いに喜んだ。

その時、イジャスラフ [D112:I] は、ガーリチのウラジミルコ [A121] のもとに、〔使者として〕ピョートル・ボリスラヴィチ¹⁷⁰⁾ を、十字架接吻の文書を持たせて派遣した。なぜなら、〔ピョートルは〕かつて、この人物〔ウラジミルコ〕をベレムィシェリにおいて、王〔ゲーザ二世〕の

167) 「ウグラ川」(Угла)は、Угол, Ерель, Орельなどの別称がある、ドニエプル川下流域左岸の支流。現在のウクライナのオリリ川(Оріль)に相当する。ペレヤスラヴリからだと250kmほどドニエプル川を下ったところに河口があり、ムスチスラフはかなり遠くまで遠征したことになる。

168) 「サマラ川」(Самара)は「スノポロド川」(Снопород)とも言い、ドニエプル川左岸支流。現在も同名での河口にはドニエプル=ペトロフスクがある。その河口はオリリ川河口よりさらに約67km下った地点にある。

169) イジャスラフ [D112:I] は、チェルニゴフからキエフへの道中で、帰陣してきた息子ムスチスラフ [I1] の部隊と合流したのだろう。

170) ピョートル・ボリスラヴィチについては、前注116を参照。

家臣たちとともに十字架に導い〔て宣誓の接吻をさせ〕たからである¹⁷¹⁾。イジャスラフ [D112:I] は、かれ〔ウラジミルコ〕に〔使者ピョートルを通じて〕言った。「そなたは、われら二人、すなわちわしと王に対して十字架に接吻して、ルーシの〔地の〕領地はすべて返還する〔と誓った〕。ところが、そなたはそのことを全ては実行していない。いま、わしはそのことについてすべてを触れることはしまい。しかし、もしそなたが、十字架接吻の〔誓い〕を実行して、われら二人と共に生きることを望むのなら、わしの諸城市¹⁷²⁾だけは返還せよ。そなたは、これについて王とともに、われら二人に対して十字架接吻〔で返還を誓った〕のだから。もし、そなたが返還を望まないのなら、そなたは十字架接吻〔の誓い〕に違反したことになる。ここに、そなたの十字架接吻の文書がある。われら二人と、王とそなたとの間で【462】神が定められますように」。

これに対して、ウラジミルコ [A121] は言った。「どうか、わが兄弟〔イジャスラフ [D112:I]〕にこう言ってくれ。『そなたは、わしを討伐するための時機を選んで、王をわしに差し向けたのではないか¹⁷³⁾。だが、わしは生きている限りは、戦場に斃れるか、自分の恨みを〔そなたに〕報復するかのどちらかである』と」。

ピョートル〔・ボリスラヴィチ〕は、かれ〔ウラジミルコ〕に言った。「公よ、あなたは、自分の兄弟であるイジャスラフ [D112:I] と王に対して、すべてを遵守し、かれら二人と共に生きることを十字架接吻〔によって誓いました〕。ところが、あなたはその十字架接吻に違反したのです」。

すると、ウラジミルコ [A121] は言った。「それは、小さな十字架ではないか」。

ピョートルは、かれ〔ウラジミルコ〕に言った。「公よ、かりに十字架が小さくても、その力は天にあっても、地にあっても強力なのです。公よ、王はあなたに、かの尊い十字架を提示したではありませんか。その十字架の上で、神は御自らの意志で両手を広げ〔て磔刑を受け〕、また神は、その慈しみにより、〔その十字架によって〕聖イシュトヴァーン〔王〕を〔玉座に〕つけられたのです。まさに、そのいと尊い十字架を〔王は〕提示し、あなたは接吻して〔誓った〕のに、それに違反したのです。あなたは生きることはできないでしょう」。また、ピョートルは、かれ〔ウラジミルコ〕に言った。「あなたは、王の家臣からこの尊い十字架について聞いていないのですか」。

171) この十字架接吻については、前注の 118 を参照。

172) 「諸城市」とは、先にウラジミルコが返還を約束した、ブジェスク (Бужеск)、シュメスク (Шюмеск)、ティホムリ (Тихомль)、ヴィゴシェフ (Выгошев)、グノイニツァ (Гноиниця) のことを指している。前注の 117 を参照。

173) イジャスラフ [D112:I] が、ムスチスラフ [I1] とともにゲーザ二世率いるハンガリーの軍隊を、奇襲的にウラジミルコ [A121] に対して派兵したことを指している。

ウラジーミル [A121] は言った。「お前たちは、もう飽きるほどそのことを言ってきた。いまは、立ち去るがよい。自分の公のもとに行け」。

ピョートル〔・ボリスラヴィチ〕は、かれの前に十字架接吻文書を置くと¹⁷⁴⁾、その場を立ち去った。ピョートルには、荷馬車も食料も与えられなかった。ピョートルは自分の馬に乗って出発した。

ピョートルが公の館を離れようとしていたころ、ウラジミルコ [A121] は、御堂へ、聖救世主教会¹⁷⁵⁾へ晩課の奉事のために向かっていた。そして、〔ウラジミルコは〕御堂への渡り廊下で、ピョートルが去って行くのを見て、かれに向かって罵って言った。「領地をみんな取り上げられた【463】〔哀れな〕ルーシの家臣が帰りおる¹⁷⁶⁾」。そう言うと、かれ〔ウラジミルコ〕は〔御堂の〕建物へと向かった。

ウラジミルコ [A121] は、晩課¹⁷⁷⁾の奉事を終えると、御堂から出てきたが、ピョートルを罵ったまさにその場の階段のところで、「おや、だれかわしの背中を打ったのか¹⁷⁸⁾」と言うと、その場から一歩も動けなくなり、倒れんばかりになった。かれは〔近侍の者に〕支えられ、脇の下を持って運ばれ、上階の部屋に運び込まれ、薬草を浸した湯の中に寝かされた。ある者は、骨が折れていると言い、他の者は別のことを言い、多くのことを言い添えた。すでに夕方も遅かった。それから、ウラジミルコ [A121] は重体になり、就寝の頃合いに、ガーリチの公ウラジミルコ [A121] は逝去した。

ピョートル〔・ボリスラヴィチ〕はガーリチの城市を出た。すでに夕方になり、ボルシェヴォ¹⁷⁹⁾ (Болшево) で投宿した。夜明けどき近くになって、ガーリチから下級従士¹⁸⁰⁾がピョートルを追いかけてきて言った。「公があなたに言っています。どこにも行かないで下さい。あなたを迎えに行かれますので、それまでそこで待っていて下さい」。ピョートルは公の死を知ら

174) 十字架接吻の誓いの破棄を確認する儀礼的な身ぶり。

175) 「聖救世主教会」(Святой Спас) は、私的な性格の教会堂をあらわす「御堂」(божница)の言葉が使われていることら、ガーリチ公の館に付属した公族専用の礼拝堂だったと思われる。

176) この言葉から、ウラジミルコ [A121] がガーリチ公として、キエフ、チェルニゴフ、ペレヤスラヴリのある狭義の「ルーシ」地方と自身のガーリチ地方を別物と考えていることがうかがうことができる(上注43も参照)。

177) 「晩課」(вечерняя) は、教会の日課(広義の時課 часы)のひとつで、通常は日没からおよそ午後9時くらいまでの間に教会で行われる奉事を指している。

178) 「打つ」という表現には、天使による懲罰が想定されている。

179) 「ボルシェヴォ」(Болшево) はガーリチ郊外の村の名で、現在の「ボフシウ」(Бовшів) 村に相当し、ガーリチの市内からドニエストル川を渡って北方に約10km離れた場所にある。

180) 「下級従士」(двѣтский) は、従士団を構成する家臣の中でもっとも身分が低い者たちであり、そのような者がピョートルへの使者として遣わされたことにも、ガーリチ公がいかにイジャスラフ [D112:I] を見下そうとしていたかが分かる。

ず、この下級従士もそのことをかれに知らせなかった。ピョートルは、あらためて城市へ戻って、最前よりもひどい苦しみを受けなければならないことを考えて、ひどく悲しんだ。

ピョートルが辛い気持ちでいると、まだ昼食前だったが、〔ガーリチの〕城市からピョートルのもとに急ぎ〔使者が〕やって来て、「来て下さい、公があなたを呼んでいます」と言った。

ピョートルは城市へと出発し、**[464]** 公の館に到着した。すると、階上の間から、黒い外衣¹⁸¹⁾をまとった公の従者たちが一斉に降りて来た。ピョートルはそれを見て驚いた。かれ〔ピョートル〕は階上の間にあがって、ヤロスラフ[A1211]が黒い外衣と頭巾を身に付けて父親の座に座し、かれ〔ウラジミルコ〕の家臣たちが揃っているのを見た。ピョートルの前に座席が置かれ、かれは座った。

ヤロスラフ[A1211]は、ピョートルを一瞥すると、泣き出した。ピョートルは、座ったまま事情が分からず、「これは何であるか」と問うと、かれ〔ピョートル〕に対して、「この夜〔前夜〕に、神が公を召されたのです」との説明がなされた。

ピョートルは言った。「この夜にはわたしはすでに出発していたが、かれ〔ウラジミルコ〕は元気で健在だった」。かれら〔公の家臣たち〕は言った。「誰かが背後からかれ〔ウラジミルコ〕を打ったのです。その時からひどく病みつき、こうして神がかれを召されたのです」。ピョートルは言った。「神の御心のままにあれ。誰もが来世で〔裁かれる〕のです¹⁸²⁾」。

ヤロスラフ[A1211]は、ピョートルに言った。「われらが、そなたを呼び戻したのはそれゆえなのだ。見よ、神はその御心に適ったことをなされたのだ。そなたは、今からわしの父¹⁸³⁾イジャスラフ[D112:I]のところに行つて、わしの名において、かれ〔イジャスラフ〕に拝礼せよ。そして、かれにこう言明せよ。『神がかれ〔ヤロスラフ〕の父を召された以上、どうかわたしの父親代わりになって下さい。あなた自身は、わたしの父を知っています。二人の間のこと¹⁸⁴⁾については、神はすでに裁きを行いました。神はわたしの父を召して、わたしを父の座に定めました。父の部隊、従士団は、〔すべて〕わたしのものになりました。父の棺の傍らに立てかけてある一本の槍を除いては、それもわが手中に納めるでしょう¹⁸⁵⁾。』**[465]**今となって

181) 「黒い外衣」(черные мятли)の「外衣」(мятель)は、防寒や旅行時に着る、くぶしまで丈のある袖のないマントのこと。おもにラシャ地で仕立ててある[Древняя Русь 2015: С. 568]。ここでは、色が黒いことから「服喪」のための儀礼服として着ていたのだろう。

182) 神判の正当性を承認する定型句で、上注9および[イパーチイ年代記(3): 356頁]も参照。

183) 以下にあるように、ヤロスラフ[A1211]はイジャスラフ[D112:I]を父親代わりとして、これに従うことを約束しているので、先取りして「わしの父」とイジャスラフを呼んでいるのである。

184) イジャスラフ[D112:I]とウラジミルコ[A121]が領地をめぐる争い、ウラジミルコ[A121]が和解の十字架接吻の約定を侵犯したことを指している。

185) 年代記で「槍」(копье)は公の武力の象徴として描かれており、ここでも、父ウラジミルコの軍勢力を子のヤロスラフが継承することを示しているのだろう。

は、父よ、わたしは、あなたに拝礼します。わたしを、自身の息子ムスチスラフ [I1] と同様に、息子として受け入れて下さい。ムスチスラフ [I1] が、あなたの鎧の一方の側を馬で行く¹⁸⁶⁾ ときには、わたしは、もう一方の側を、自分の全部隊を率いて馬で行きます』と」。

こうして、ピョートルは帰国した。

6661 [1153] 年

イジャスラフ [D112:I] は、自分の息子ムスチスラフ [I1] を、ポロヴェツ人討伐のために、プショール¹⁸⁷⁾ 川 (Псел) に向けて派遣した。なぜなら、その頃、〔ポロヴェツ人が〕スーラ¹⁸⁸⁾ (Сула) 川で悪行をなしていたからである。しかし、〔ムスチスラフは〕かれらのところに到達せずに、引き返した。

その秋、父親〔イジャスラフ〕は、ムスチスラフ [I1] を、その継母となる女¹⁸⁹⁾ の出迎えのために派遣した。ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] とベレンディ人も一緒だった。かれらは、オレシエ¹⁹⁰⁾ (Олешье) まで行ったが、かの女と出遭うことができず、引き返した。

スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] とホロブ

186) 「あなたの鎧の一方の側を行く」(ездити подлѣ твои стемь по одной сторонѣ тебѣ) の表現は、相手への服従をあらわす儀礼的な定型句で、「そなたの配下として馬を連ねる」(подлѣ тебе ѣздити) のかたちでこれまでも現れている。

187) 「プショール」(Псел) 川は、キエフから南東 240km 付近に河口があるドニエプル左岸の支流。スーラ (Сула) 川 (次注参照) よりもドニエプル下流にあり、ベレヤスラヴリ公領を離れたポロヴェツの地を流れていた。

188) 「スーラ」(Сула) 川は、ドニエプル川左岸の支流で、ほぼベレヤスラヴリ公領とポロヴェツの地の境界をなしていた。

189) イジャスラフ [D112:I] の再婚相手については、6662(1154)年の記事の冒頭にもあり、ここでは「アバジン人の皇女」となっている、これについてヴォイトヴィチは、グルジア王とビザンツ皇帝ゲオルギオス三世の姉妹の間の娘で「ルスダン」(Русдан) という名の女性で、1154年にイジャスラフが没すると、グルジアに戻って、宮廷で大きな役割を果たしたとしている [Войтович 2006: С.461-462]。なお、父親のグルジア王は、バグラティッド朝のデメトリウス 1 世 (在位 1125-1155 年, 1155-1156 年) で、かれは、父である名君ダヴィド三世 (建設王: 在位 1089-1125 年) を継いで国王となり、国を拡大し、西はニコブシアから東はカスピ海のデルベント、北はオセチアから南はアララト山まで勢力を伸ばした。

190) 「オレシエ」(Олешье) はドニエプル川河口の州に立てられた城砦で、現在のヘルソン (Херсон) 市から東へ 8km ほどのツェルピンスク (Цюрупинськ) にその跡地がある。「継母」はアブハジアから黒海を横切って、ドニエプル川に河口に到達する予定だったと考えられる。

リ¹⁹¹⁾(Хоробрь)で会合した。そこで、ひとりの人間のようになることを確約して、互いに十字架接吻〔の誓い〕をした¹⁹²⁾。そして、それぞれ国へ帰っていった。

この年、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] は、ヤロスラフ・ウラジミルコヴィチ [A1211] を討つべく、ガーリチへの遠征の準備を始めた¹⁹³⁾。そして、肉断ちの主日の3週前の日曜日¹⁹⁴⁾に、イジャスラフ [D112:I] は自分の軍勢を集めてガーリチへと進軍した。〔イジャスラフは〕ヴァチェスラフ [D16] の部隊も引き連れて行った。イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] は、自分の部隊を、かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕と一緒にいかせた。かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕の息子ムスチスラフ [I1] は、ペレヤスラヴリの部隊とともにやって来た。黒頭巾族もみな〔引き連れてきた〕。

〔イジャスラフ [D112:I] が〕 ティホムリ¹⁹⁵⁾ (Тихомль) へ着いたとき、その場所のかれのところへ、弟のウラジミル [D115] がドロゴブージから、また〔別の〕かれの弟であるスヴァトボルク [D114] が **[466]** ヴラジミルからそれぞれやって来た。ベレスチエ¹⁹⁶⁾ (Берестье) からは、ウラジミル・アンドレエヴィチ [D181] がやって来た。こうして、全員がヴラジミルの城市

191) 「ホロブリ」(Хоробрь)は、デスナ川右岸に位置し、現在のマコシネ(Макошине)村の場所にあった城砦の名前。スヴァトスラフ [C43] が座していたノヴゴロド・セヴェルスキイからは南西に約90km、イジャスラフ [C35] のチェルニゴフから東へ(下流へ)約75kmほどの距離にあり、二つの城市のおよそ中間地点にあたっていた。

192) スヴァトスラフ [C43] はユーリイ手長公 [D17] の陣営に属していたが、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] は、1151年のルート川の合戦の際にイジャスラフ [D112:I] の陣営に寝返っており、両者は対立関係にあった。ユーリイのスーズダリの地への撤退にともない、有力な同盟者を失ったスヴァトスラフ [C43] は、保身のために不利な和議を持ちかけたと考えられる。

193) ここでは、イジャスラフ [D112:I] によるガーリチ公ヤロスラフ [A1211] 討伐遠征の記事が、経緯の説明もなく突然はじまっている。その事情と理由について、歴史家ソロヴィヨフによると、ヤロスラフは誓約にもかかわらず、本心では父ウラジミルコが占領して返還しなかった城市(上注119～123参照)を返すつもりはなかったという。そして、ヤロスラフ(およびガーリチの貴族たち)は、時間稼ぎをするためにイジャスラフをおびき寄せようとしたが、それに気がついたイジャスラフが兵を集めてガーリチ遠征を行ったとする[Соловьев 1988: С.470-471]。

194) 「肉断ちの主日」(неделя мясопустая)が、2月7日(1154年)に相当することから、この「3週前の日曜日」は1154年1月17日になる[Бережков 1963: С. 156]。なお、この「3週間」は、ほぼキエフからの遠征に要した日数を示している。

195) 「ティホムリ」(Тихомль)は、ヴラジミル公領の町。ゴルィニ川上流、ガーリチ公領との境界近くに位置していた。

196) 「ベレスチエ」(Берестье)は、ヴラジミルからおよそ120km北に位置するブグ川沿いの都市。現在のベラルーシのプレストに相当する。ウラジミル [D181] は、それまでの所領だったドロゴブージが、イジャスラフ [D112:I] の弟ウラジミル [D15] に与えられたことから、より遠方のベレスチエ(プレスト)に配置換えされたことになる。

に集合し、それから、かれらは、スタンコフ¹⁹⁷⁾ (Станков) へ向かって軍を進めた。すると、そこで、ガーリチの公〔ヤロスラフ [A1211]〕が自分の部隊を率いて〔城から〕現れた。

イジャスラフ [D112:I] は、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] と自分の息子ムスチスラフ [I1], また黒頭巾族を派遣して、セレト¹⁹⁸⁾ (Серет) 川を挟んで、かれら〔ガーリチの軍勢〕と戦わせた。自分自身はテレボヴリ¹⁹⁹⁾ (Теребовл) へと軍を進めた。

翌日、テオドロスの主日の〔週の〕火曜日²⁰⁰⁾ に、セレト川を渡った。この日は濃い霧がかかっており、槍の先端も見えないほどだった。イジャスラフ [D112:I] は渡河すると、対岸で陣を張った。

夕方、ガーリチのヤロスラフ [A1211] のもとに報がもたらされた。イジャスラフ [D112:I] がテレボヴリに向かって進軍しているというのである。ヤロスラフ [A1211] は、これを聞くと、スノフ²⁰¹⁾ (Снов) を過ぎてテレボヴリへと向かおうとした。しかし、〔セレト川の〕浅瀬を渡ることはできなかった。〔なぜなら〕イジャスラフ [D112:I] は、かれらより先にセレト川を渡ってしまっていたからである。

イジャスラフ [D112:I] の斥候部隊が、ガーリチ人の部隊を見て、急行してその旨をイジャスラフ [D112:I] に伝えた。イジャスラフ [D112:I] は、自分の部隊を武装させると、〔敵に〕向かって軍を進めた。そして、〔敵に〕近づいた頃合いに、神が霧を晴らし給い、明るくなった。こうして、〔双方の〕部隊は足を止め、〔セレト川を挟んで対峙して〕睨み合いになった。

ガーリチの家臣たちは、自分の公ヤロスラフ [A1211] にこう言い始めた。「あなたは若い。どうか、脇に退いて、われらを見ていて下さい。いかに、あなたの父がわれらを扶養し、愛したかを。われらは、あなたの父のために名誉を求め、あなたの命の代わりに、【467】自分の命を戦場に投げ出します」。さらに、自分の公〔ヤロスラフ〕に向かって言った。「あなたは、われらのもとでは唯一の公です。もし、あなたに何かあったら、われらはどうしたらよいでしょうか。公よ、城市〔テレボヴリ〕へ引き上げて下さい。われら自身が、イジャスラフ [D112:I]

197) 「スタンコフ」(Станков)の位置について定説はないが、おそらく、ホロヒルカ川(Гологірка)(西ブク川支流のポルトヴァ(Полтва)川の支流)の左岸に位置し、現在のリヴィウ州の「スティンカ」(Стінка; Стянка)村に相当すると考えられる。テレボヴリからだ、北西に87kmほど離れている。

198) 「セレト」(Серет)川は、ドニエストル川の左岸支流。

199) 「テレボヴリ」(Теребовль, Теребовл, Тереболь)の城市は、セレト川支流グネズダ(Гнезда)川右岸の、ヴォルィニ領との境界に位置していた。プジスク(現在のプスク)から南東に105kmほど離れている。現在のテレボヴリヤ(Теребовля)市に相当する。伝統的にガーリチ公の分領公が座していた。

200) 「テオドロスの主日」(Федорова недѣля)とは、移動祭日で、大斎第1週の主日(日曜日)に相当する。1154年は2月14日に相当していた。それゆえ、その週の火曜日は、1154年2月16日になる。[Бережков 1963: С. 156]

201) 「スノフ」(Снов)については、これまでチェルニゴフの地デスナ川右岸の支流の名称として年代記に記されてきているが、ここでは別のガーリチ地方の地名。ただし、位置などの詳細は不明。

と戦います。われらの中で生き残った者が、急行してあなたに〔戦況を〕伝えましょう。その時には、あなたとともに籠城をしましょう」。

こうして、自分たちの公〔ヤロスラフ〕を城市へと送り出すと、〔家臣たちは〕自ら戦いに出発した。

〔両軍の〕部隊は遭遇した。激しい戦闘になった。正午から夕方まで戦った。戦場は混乱し、どちらが勝っているのか誰も分からなかった。

イジャスラフ [D112:I] は、ガーリチ人を追い払った²⁰²⁾。かれの兄弟たち〔諸公〕は逃げ出した。こうして、ヴラジミルの公スヴァトポルク [D114] は逃げ出し、かれを追うようにしてウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] とムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] も逃げ出した。イジャスラフ [D112:I] は、その夜は戦場に宿営した。

その時、ガーリチ人は、自分たちの城市テレボヴリに逃げ込んだ。

イジャスラフ [D112:I] は、ガーリチの家臣を捕虜に獲った。ガーリチ人は、偵察中のイジャスラフ〔の家臣〕を捕虜にした。

戦場で、イジャスラフ [D112:I] は、少数の従士たちとともに残った。〔イジャスラフは〕ガーリチの軍旗を掲げた。すると、ガーリチ人たちが軍旗のもとに集まり始めた。そして〔イジャスラフは〕は多くの捕虜²⁰³⁾を捕まえた。

その夜、イジャスラフ [D112:I] は恐くなった。なぜなら、戦場に少数の従士たちとともに残されたからである。かれ〔イジャスラフ〕は言った。「どうか、城市〔テレボヴリ〕から〔敵軍が〕集合して、われらを討ちに来ないように」。かれのもとには、従士よりも、捕虜の数の方が多かったのである。〔イジャスラフ〕はおびたしい数のガーリチ人を捕虜として捕縛したのを見て、かれらを斬り殺すよう命じ、〔捕虜となった敵側の〕上級【468】家臣たちだけは共に連れて〔帰った〕。

翌日、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] は、キエフの自分の〔故郷の〕家を目指し

202) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事ではこのあと「ガーリチ人もイジャスラフ [D112] の従士たちとかれの息子〔ムスチスラフ [I1]〕を〔追い払った〕からである。イジャスラフは〔そのことを〕知らず、自分はガーリチ人に勝利したと思っていたが」と続いている。こちらのほうが、イジャスラフに従軍してた3人の諸公が逃げ出した理由がわかり、つながりがよい。『イパーチイ年代記』の読みは、後代の〈イジャスラフびいき〉の編集者による改変(削除)によるものだろう。ただし、この個所について、ヴィルクルは『ラヴレンチイ年代記』編集者による補筆の可能性を指摘している。[Вилкул 2005: С. 38. прим. 146]

203) イジャスラフ [D112:I] は、おとりとして敵方の軍旗を掲げさせ、取り残された敵の軍兵をおびき寄せて、「捕虜」としてからめ獲りにしたのである。ここの「捕虜」の原語は *коłodники* で、奴隷として使役するため、逃げられないように足枷をはめた者という意味がある。イジャスラフ勢にとってこの「捕虜」は、掠奪戦利品として見なされていた。

て出発した。なぜなら、かれの兄弟たち、従士たちは、散り散りに逃げてしまったからである。
ガーリチの全土には、大きな悲しみの声が広がった。

6662 [1154] 年

イジャスラフ [D112:I] は、自分の息子ムスチスラフ [I1] を、その継母となる女²⁰⁴⁾の出迎えのために再度派遣した。アバジン人²⁰⁵⁾ (обезы) のところから、皇女²⁰⁶⁾ を自分の妻として連れてきたのである。〔ムスチスラフは〕、早瀬²⁰⁷⁾ のところまでかの女を迎えに出た。そして、かの女をキエフまで連れて行き、自分はペレヤスラヴリへと帰った。イジャスラフ [D112:I] は、かの女を妻として迎え入れると、結婚式を行った。

この年、ノヴゴロド人たちは、ヤロスラフ²⁰⁸⁾・イジャスラヴィチ [I2] を追放し²⁰⁹⁾、ロマン [J1]

204) この「継母」については上注 189 を参照。

205) 「アバジン人」(обезы) は、グルジアに居住するアブハズ族の一派で、カフカス山脈の北斜面およびウルプ川、ラバ川上流域に居住していたという。トロチコによれば、この結婚はキエフ大公としての経済的な拡大を狙ってなされたものだとしている [Толочко 2014: С. 170-171]。

206) 「皇女」は原文では *царевь дщерь* つまり「皇帝の娘」となる。かの女は、グルジア王とビザンツ皇帝ゲオルギオス三世の姉妹の間の娘であることから、この「皇帝」はビザンツ皇帝を指すと考えるべきだろう。

207) ドニエプル川の早瀬 (*порог*) は河口から 300km ほど遡った地点、現在のドニエプル=ペトロフスクとザボロジエの間に相当する (現在は水没) ([ロシア原初年代記: 971 年の注 13: 399 頁] も参照)。アブハジアから黒海を経てやってきた船はこの地点では川を航行できないため、キエフ公からの出迎えと助けを必要としたのだろう。

208) 原語は *Ярославича* とあるが、これは明らかに *Ярослава* の誤記である。

209) このノヴゴロド公交替の政変については『ラヴレンチイ年代記』の同じ 6662(1154) の項に全く同じ並行記事がある。また、『ノヴゴロド第一年代記』では 6662(1154) の項に「ノヴゴロド人はヤロスラフ [I2] を 3 月 26 日に追放し、4 月 17 日にムスチスラフの子ロスチスラフ [D116:J] を連れてきたとある」。

ヤロスラフ [I2] は父イジャスラフ [D112:I] によって 6656(1148) 年の秋にノヴゴロド公に据えられ、約 5 年半という長い間支配公を勤めていた。かれの追放については詳しい記述はないが、ソロヴィヨフはヤロスラフが市民との約定を破ったことが原因と推定しており [Соловьев 1988: С. 480]、ヤーニン は都市内の貴族の対立によるものではなく、公の抑圧に反発した民衆の暴動によるものではないかと考えている [Янин 1962: С. 99]。

を〔公として〕据えた²¹⁰⁾。

この年、スヴァトポルク・ムスチスラヴィチ [D114:]が、コルチェスク²¹¹⁾(Кочерьск)で逝去した。かれが、自分の兄のイジャスラフ [D112:I]の援軍として出陣したからだった²¹²⁾。イジャスラフ [D112:I]は、神が弟を召したことを聞くと、自分の弟を〔追悼して〕泣いた。

その後、イジャスラフ [D112:I]は、自分の息子ヤロスラフ²¹³⁾ [I2]を、ヴラジミルに公として派遣した。

この年、ユーリイ [D17]は、ロストフ人、スーズダリ人を引き連れ、すべての子供たちとともに、ルーシへと進軍した²¹⁴⁾。かれのすべての兵のあいだに馬の疫病が広まった。このようなことはかつて無いことだった。かれ〔ユーリイ〕はヴァティチ〔の地〕に到着すると、コゼリスク²¹⁵⁾(Козельск)に達する手前で陣を張った。かれ〔ユーリイ〕のもとにポロヴェツ人がやっ

210) この「ロマン」は、ロスチスラフ [D116:J]の息子 [J1]を指すと思われるが、このときのノヴゴロド公については、前注にあるように、スモレンスク公であるロスチスラフ [D116:J]が支配公となったという史料もあって、はっきりしない。

通説では、「ロマン」のノヴゴロド公就位は重視されておらず、『ノヴゴロド第一年代記』にあるように、ロスチスラフ [D116:J]がノヴゴロドの公になったとされている。ただし、以下にあるようにイジャスラフ [D112:I]の死のときにロスチスラフ [D116:J]はスモレンスクに滞在していたことから考えて、ロスチスラフは息子のロマン [J1]を代官として短期にノヴゴロドに派遣した可能性はある。

なお、ロスチスラフは、兄イジャスラフ [D112:I]の死を受けて、1154年の11月にはキエフ大公位に就き、それに伴いノヴゴロドの公位は息子のダヴィド [J3]に委ねている。

211) 「コルチェスク」は原文では「コチェルスク」(Кочерьск)となっており、Корчечск、Коренк、Корчечскとも表記され、ヴォルィニ公領の東端の、ヴラジミルから東南東へ約200km、ドロゴブージからなら東へ50km程度の地点に位置していた城市のこと。現在のウクライナのコレツ(Корець)市に相当する。[イパーチイ年代記(4):335頁、注73]も参照。

212) スヴァトポルク [D114:]は、1151年からヴラジミルの公の座についており、先のイジャスラフ [D112:I]のガーリチ遠征におけるテレボヴリ郊外の戦い(1154年2月頃)の際にも、ヴラジミルから出陣していた。かれは、この戦いでテレボヴリから「驚いて逃げ出した」あとで、ヴラジミルへは帰還せず、ヴォルィニ公領の東端のコルチェスクに拠点を構えて、そこでおそらく病死したと考えられる。文脈から見て、この戦いで負傷したことが原因であろう。

213) 上注209にあるようにヤロスラフ [I2]は、1154年3月末にノヴゴロドから追放されており、おそらく父イジャスラフ [D112:I]のもとに身を寄せていた。その息子を空位となったヴラジミルの公座に据えたのである。

214) マフノヴェツはこれを、出陣の日を守護を求める聖人の記念日にあわせる当時の軍事儀礼の伝統([イパーチイ年代記(3):375頁(注239)などを参照)からみて、1154年4月23日の聖ゲオルギオスの日に、スーズダリを出陣したと推定している。

215) 「コゼリスク」(Козельск)は、オカ(Ока)川の支流ジズドラ(Жиздра)川沿いの城市で、スーズダリからノヴゴロド・セヴェルスキイへと向かう道程のほぼ中間地点に位置している。[イパーチイ年代記(3):330頁、注5]も参照。

て来た²¹⁶⁾。ユーリイ [D17] は、協議をして、息子のグレーブ [D178] をポロヴェツ人のもとに派遣して²¹⁷⁾、自分はスーズダリへと帰還した。

この年、グレーブ・ユーリエヴィチ [D178] の妃²¹⁸⁾ がスーズダリで逝去した。

この年、**[469]** キエフの大公イジャスラフ [D112:I] (・ムスチスラヴィチ) が病気になった。(十字架拳榮の日²¹⁹⁾ だった。病気は非常に重かった。そして、キエフの大公であり)²²⁰⁾、名誉を重んじ、敬虔で、キリストを愛し、栄光あるイジャスラフ [D112:I] が逝去した。かれは、ムスチスラフ [D11] の息子で、ウラジーミル [D1] の孫たる人だった。すべてのルーシの地の〔人々〕はかれの死を嘆き、黒頭巾族もみな嘆いた。それは、皇帝や主人の死を嘆くがごとくであり、なによりも父親の死を嘆くがごとくであった。

逝去したのは、日曜日の〔聖使徒〕ピリポの日²²¹⁾ の前夜のことだった²²²⁾。かれの遺体は布で巻かれ、かれの父親の修道院である聖テオドロス教会²²³⁾ に埋葬された。

かれの叔父ヴァチェスラフ [D16] は、誰よりも、自分の息子であるイジャスラフ [D112:I] の死を嘆いて言った。「息子よ、これはわしの場所だった²²⁴⁾ のだ。だが、神の前では如何ともし難い」。

216) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「かれのもとにポロヴェツ人は少数しか来なかった」(приеха к нему мало половець)とある。つまり、ルーシ遠征のユーリイ [D17] の軍勢が途中で引き返した理由は、この時点では十分なポロヴェツ人の援助が得られなかったことにあった。

217) すぐ後の記述でわかるように、グレーブ [D178] のポロヴェツの地への派遣の目的は、ポロヴェツ人の援軍を積極的に要請し、その部隊を引き連れてペレヤスラヴリを攻め、さらにこの援軍をもってチェルニゴフのイジャスラフ [C35] に加勢する、いわば先遣隊を組織するためだった。

218) この「妃」(княгини)の語が、イパーチイ写本では加筆されている。かの女については出自は不祥で、本記事しか情報がない。グレーブ [D178] 自身は、翌年(1155年)にイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] の娘と再婚している(下注330参照)。

219) 「十字架拳榮の日」(Ставровъ день)は、9月14日(1154年)に相当する。

220) この丸括弧内の語句はイパーチイ写本にはなく、フレーブニコフ写本・ポゴージン写本にある読みである。

221) 聖使徒ピリポの日(通常この日から降誕祭の齋が始まる)は11月14日に祝われ、1154年のこの日は日曜日に当たっていた。イジャスラフは2ヶ月の間死の床にあったことになる。

222) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「その年の秋、11月13日にイジャスラフ・ムスチスラヴィチが逝去した」と簡単に記されている。『ノヴゴロド第一年代記』では「イジャスラフ [D112:I]」がキエフで11月14日に逝去した」としている。

223) ムスチスラフ [D11] が定礎し、その一族のいわば菩提寺であるキエフのテオドロス修道院(教会)については、[イパーチイ年代記(2):303頁、注109]を参照。

224) 自分が先に死ぬべき順番だったということ。イジャスラフ [D112:I] の遺体を前に「嘆いて」といるところから、この「場所」は棺を指していると考えられる。

イジャスラフ [D112:I] の息子ムスチスラフ [I1] は、自分の父の遺体に布を巻くと、かれの棺に拝礼して、それから自分のペレヤスラヴリへと帰って行った。

チェルニゴフのイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] のもとに〔イジャスラフ [D112:I] の死の〕報がもたらされた。かれは、何事も遅れをとることなく、キエフへと出発した。

ヴァチェスラフ [D16] のもとに、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] がドニエプル川の渡し場²²⁵⁾のところに到着したとの報がもたらされた。ヴァチェスラフ [D16] は、かれ〔イジャスラフ [C35]〕のもとに使者を遣って、こう言った。「そなたは、なぜやって来たのか。自分のチェルニゴフへ戻るがよい」。

イジャスラフ [C35] は言った。「わたしがやって来たのは、自分の兄弟〔イジャスラフ [D112:I]〕の死を〔悼んで〕嘆くためです。わたしは、その〔臨終の〕時、自分の兄弟のところにいることができなかつたのですから。今、わたしに命じて下さい。〔キエフに〕来て、その棺の前で嘆くようにと」。

ヴァチェスラフ [D16] は、ムスチスラフ²²⁶⁾ [I1] および家臣たちと協議して、かれ〔イジャスラフ [C35]〕をキエフの城内に入れなかつた。なぜなら、**[470]** まだロスチスラフ [D116:J] が、スモレンスクからキエフへ来ていなかったからである。

イジャスラフ [C35] は、再びチェルニゴフへと戻った。

ヴァチェスラフ [D16] は、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] を召喚するための使者を遣って²²⁷⁾、こう言った。「そなたは、ロスチスラフ [D116:J] にとっての、愛しい息子である。わしにとっても同じである。自らわしのもとに来たれ。ロスチスラフ [D116:J] が来るまでのあいだ、キエフのわしのもとに滞在せよ。そして、皆がそろったら〔キエフの公位について〕約定をしようではないか」。

スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35]

225) イジャスラフ [C35] は、チェルニゴフから陸路を取って、キエフのヴィドビチ修道院の対岸にある渡し場まで到着した。

226) すぐ上の記事でムスチスラフ [I1] はペレヤスラヴリへ戻ったのに、ここでキエフのヴァチェスラフ [D16] と協議しているのは辻褄があわないが、これは、『イパーチイ年代記』の編集の際の混乱で、ムスチスラフは協議してからペレヤスラヴリに帰ったのだろう。[Вилкул 2005: С. 40]

227) 当時スヴァトスラフ [C411:G] は、キエフから近いドニエプル沿岸の城市リユーベチ (Любеч) で公支配をしていたと考えられる (上注 145 及び 166 を参照)。

にも、自分の叔父スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] にも知らせず²²⁸⁾、キエフのヴァチェスラフ [D16] のもとに行った。そして、キエフで、ヴァチェスラフ [D16] のもとに滞在し、ロスチスラフ [D116:J] がスモレンスクから来るのを待った²²⁹⁾。

イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] とスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] の二人は、スーズダリのユーレイ [D17] のもとに使者を派遣した²³⁰⁾。

その頃、ロスチスラフ [D116:J] は、スモレンスクからキエフへとやって来た。キエフ人は大いに喜んで、城外に出て自分たちの公を出迎えた。それほど皆が、全ルーシが、かれ〔の到来〕を喜んだのである。黒頭巾族たちも皆、ロスチスラフ [D116:J] がキエフに来たことを喜んだ。

ロスチスラフ [D116:J] は、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] の出迎えを受けて、二人は自分たちの父であるヴァチェスラフ [D16] に拝礼するために出かけた。ヴァチェスラフ [D16] は、自分の息子ロスチスラフ [D116:J] を見て、大いに喜んだ。そして、かれに言った。「息子よ、見よ、わしはすでに年老いた²³¹⁾。自分はすべての約定を自分で約することはできない。息子よ、わしはそなたに〔権限を〕与える、そなたの兄〔イジャスラフ [D112:I]〕が持っていた約定する〔権限を〕そなたに与える²³²⁾。そなたは、わしを父と見なし【471】、そなたの兄イジャスラフ [D112:I] がわしに名誉を示し、わしを父と見なしたように、わしに名誉を示せ。見よ、わしの部隊とわしの従士団は、そなたが指揮を執れ」。

228) スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、これまで主に叔父のスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] と行動をともにしていたが、この時点からはっきりと、モノマフ一族の陣営についたことがわかる。

229) ヴァチェスラフ [D16] がスヴァトスラフ [C411:G] をキエフに呼び出したのは、イジャスラフ [D112:I] の死後に、その弟で自分の甥にあたるロスチスラフ [D116:J] をキエフ大公位に就けようと招請したが、ロスチスラフがなかなかやってくるのが理由になっている。この遅延の理由については、『ノヴゴロド第一年代記』の 6662(1154) 年の記事から判断すると、キエフ大公位の招請を受け取ったロスチスラフは、息子のダヴィド [J3] とともにいったんノヴゴロドへ行き、ダヴィドをノヴゴロドの公座に据えた後で、ノヴゴロドからキエフへと向かったことが考えられる。[ノヴゴロド第一年代記 [II]: 23 頁]

230) イジャスラフ [C35] は、このままではキエフ大公位はロスチスラフ [D116:J] の手に渡ると考えて、すでに和議を結んで「ひとりの人間のようになる」ことを約束していたスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] とともに、ユーレイ [D17] と組んでキエフ大公位を狙うことを図ったのである。スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] の「転向」もまた、ユーレイとの同盟を促すきっかけになっただろう。

231) ヴァチェスラフ [D16] は 1097 年のクリヤジマ河畔の戦闘に参加していることから、1080 年代中頃には生まれていたと考えられているので、1154 年当時は 70 歳前後だったろう。当時の平均寿命からすれば、かなりの高齢ということになる。

232) ヴァチェスラフ [D16] がイジャスラフ [D112:I] にキエフ大公として約定を結ぶ権限を与えたことについては、[イパーチイ年代記 (4): 360 頁, 注 189] を参照。

ロスチスラフ [D116:J] はこれを聞くと、自分の父ヴァチェスラフ [D16] に拝礼して、かれに言った。「主人²³³⁾たる父よ、非常に嬉しく思います。わたしはあなたを父とも、主人とも見なします。わが兄イジャスラフ [D112:I] が、あなたをそのように見なし、あなたの意志のもとにあったように」。

ロスチスラフ [D116:J] のキエフにおける公支配の始まり。

キエフ人は、ロスチスラフ [D116:J] をキエフ〔の公座〕に据えて、かれに言った。「あなたの兄イジャスラフ [D112:I] は、ヴァチェスラフ [D16] に名誉を与えました。そのように、あなたも名誉を与えてください。キエフは、生涯にわたってあなたのものです」。

ロスチスラフ [D116:J] は、自分の姉妹の息子である²³⁴⁾ スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] に言った。「見よ、そなたにトゥーロフとピンスクを与える²³⁵⁾。これは、そなたが、わしの父ヴァチェスラフ [D16] のところにやって来て、わしの領地²³⁶⁾を守ったことへの〔報償〕である。それゆえに、わしは、そなたに領地を分け与えよう」。スヴァトスラフ [C411:G] は、ロスチスラフ [D116:J] に拝礼して、喜んで〔領地を〕受け取った。

その頃、ロスチスラフ [D116:J] のもとに報告がもたらされた。グレーブ・ユーリエヴィチ [D178] が、多数のポロヴェツ人を引き連れて、ペレヤスラヴリへと進軍しているという²³⁷⁾。ロスチスラフ [D116:J] は、スヴァトスラフ [C411:G] とともに、キエフから出陣して、ペレセチェニ²³⁸⁾ (Пересѣчен) へと向かい、この場所で従士たちと合流した。

233) ここで二度繰り返される「主人」(господин) の語は、相手が年長制における長上であることを認める、象徴的な呼びかけの言葉である。

234) スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] の母は、ムスチスラフ [D11] の娘マリヤである。

235) トゥーロフやその付属都市ピンスクは、キエフ公領の中でも豊かで重要な地位を占めると見なされていた。スヴァトスラフ [C411:G] は、まだ若い頃の1142年に父親のフセヴォロド [D41] からトゥーロフを領地として受け取り、公支配をしたことがあった。かれは、いわば旧領に戻ったと見ることもできる。

236) キエフを指している。

237) グレーブ [D178] は、1151年秋頃まではペレヤスラヴリの支配公であり、父親ユーレイ [D17] のスーズダリへの撤退にともなって、自らもペレヤスラヴリを去り、父と行動をとともにしていたか、あるいはゴドロクに拠点を置いていた。かれは、イジャスラフ [D112:I] の死によって「ルーシの地」支配に空白が出来たのに乗じて、父親ユーレイ [D17] と別れて自らポロヴェツ人の部隊を引き連れ、ペレヤスラヴリ奪還を狙ったのだろう。この時のペレヤスラヴリの支配公はイジャスラフ [D112:I] の息子ムスチスラフ [I1] だった。

238) 「ペレセチェニ」(Пересѣчен) は、キエフの丘から南南東6kmほどのドニエプル右岸の地名で、ほぼルイベジ川がドニエプルに注ぐ河口あたりにあった。キエフの郊外になるが、このあたりにロスチスラフの従士団の宿营地があったのだろう。

〔ペレヤスラヴリの〕ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] から、ロスチスラフ [D116:J] とスヴァトスラフ [C411:G] のもとへ使者が急ぎやって来て、〔敵の〕軍がペレヤスラヴリへと押し迫り、かれら〔敵軍〕と射撃が交わされているとの報を、二人にもたらした。ロスチスラフ [D116:J] 【472】はこれを聞くと、自分の息子のスヴァトスラフ [J4] を、〔先遣隊として〕ペレヤスラヴリへと派遣した。ムスチスラフ [I1] は、ペレヤスラヴリの城外へ出て、スヴァトスラフ [J4] を出迎え、合流すると、二人はペレヤスラヴリの城内へと向かった。

翌日、ポロヴェツ人はペレヤスラヴリに近づいた。〔ムスチスラフ [I1] とスヴァトスラフ [J4] 勢は〕かれら〔ポロヴェツ人たち〕と戦い始めた。かれら〔ペレヤスラヴリの軍勢は〕〔ペレヤスラヴリの〕城から出撃すると、激しく戦った。ポロヴェツ人は、援軍が城内から出てきたのを見て、軍を引いて城から離れ、陣を張ることなく、スーラ川を越えて退却した。ロスチスラフ [D116:J] とスヴァトスラフ [C411:G] 〔があとから来ること〕を恐れていたのである。

スヴァトスラフ・ロスチスラヴィチ [J4] は、ポロヴェツ人を追い払うと、自分の父のもとにやって来て²³⁹⁾、ポロヴェツ人が退却したことをかれに告げた。ロスチスラフ [D116:J] は、これを聞くと、チェルニゴフへ進軍してイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] を討伐することについて、自分の兄弟たちと評議し、そうすることを決定した。

そして、ロスチスラフ [D116:J] は、キエフに戻ることをせず、自分の部隊とともに、〔キエフの城市を〕迂回して進軍し、〔道中で〕スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G]、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [II]、トルク人、キエフ人たちと合流しながら、進んだ。そして、ヴィシエゴロドの地点でドニエブル川を渡り、ヴィシエゴロドの対岸で陣を張った²⁴⁰⁾。そして、〔ロスチスラフ [D116:J] は〕自分の従士たちを集めると、こう言った。「われらは、ユーリイ [D17] に先んじて、〔チェルニゴフに到着〕しよう²⁴¹⁾。われらは、かれ〔イジャスラフ [C35]〕を〔チェルニゴフから〕追放するか、われらの条件をのませて和を結ぶかのどちらかである」。

翌日、キエフから急ぎ使者がロスチスラフ [D116:J] のもとに派遣されて来た。そして「神が、

239) ロスチスラフ [D116:J] 等はベレセチェニで待機して、ペレヤスラヴリの状況を見守っていたのだろう。

240) ヴィシエゴロドの地点でドニエブルを渡河すれば、そのままデスナ川右岸沿いに行軍してチェルニゴフに達することができる。

241) イジャスラフ [D112:I] の死に際して、ヴァチャスラフ [D16] によってキエフ入城を断られたチェルニゴフ公イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] は、ユーリイ [D17] と結んでキエフ大公位の奪取を図っていた（上注 230 参照）。のちの記述でわかるように、ユーリイ [D17] の軍勢はヴォルガ川＝ドニエブル川の行路でキエフに向けて遠征を開始しており、ロスチスラフ [D116:J] は、ユーリイ [D17] の援軍がチェルニゴフに到達する前に、イジャスラフ [C35] をチェルニゴフから追放するか、和議による懐柔でキエフ大公位を守ることを狙ったのである。

あなたの父ヴァチェスラフ [D16] を召されました」と告げた²⁴²⁾。ロスチスラフは言った。「つい昨日まで、われら〔ロスチスラフとヴァチェスラフ〕はともに馬に乗り²⁴³⁾、かれ〔ヴァチェスラフ〕は機嫌良く健康だったのに」。かれ〔使者〕はかれ〔ロスチスラフ〕に言った。「昨夜【473】、〔ヴァチェスラフは〕自分の従士たちと〔宴席で〕愉しみ、寝室に下がったときには元気でした。ところが、床に就くや、もはや起き上がることはなかったのです。神が召されたのです」。

ロスチスラフ [D116:J] は、これを聞くと、自分の部隊をその場〔ヴィシエゴロド対岸の陣営〕に残して、自分は急ぎキエフへと行った。そして、自分の父の〔死を〕嘆き、多くの民衆とともに、かれ〔ヴァチェスラフの遺体〕を棺のところまで、大いなる名誉をもって見送った。聖ソフィア〔教会〕の、かれ〔ヴァチェスラフ〕の曾祖父ヤロスラフ [13] と父ウラジーミル²⁴⁴⁾ [D1] が安置されている場所に、かれの棺が安置されたのである。

こうしてロスチスラフ [D116:J] は、かれ〔ヴァチェスラフ〕の遺体を布で巻く²⁴⁵⁾ と、ヤロスラフの館²⁴⁶⁾ に、自分の父ヴァチェスラフ [D16] の家臣たち、家令、鍵番たち²⁴⁷⁾ を呼び集めた。そして、自分の父の財産、すなわち織物、金、銀を目の前に持ってくるように指示した。すべてが持ってこられると、〔ロスチスラフは〕、これらを、修道院、教会、隠遁所²⁴⁸⁾、乞食たちに分け与えた。こうして、すべてを分け与え、自分のためには何も取らなかった。ただ、自らの祝福のための尊い十字架だけを取った。残りの財産は、最後の日々のかれ〔ロスチスラフ〕の死後の追悼の費用として、また、かれ〔ロスチスラフ〕を追悼するときのロウソク代と聖パン

242) 『ノヴゴロド第一年代記』の6662(1154)年の記事では、「その年の冬にヴァチェスラフ [D16] が逝去した」とある。マフノヴェツは、ヴァチェスラフの死亡の日を1154年の12月11日に当たるとしているが、確証はない。

243) ヴァチェスラフ [D16] は、キエフを迂回してチェルニゴフへと向かうロスチスラフ [D116:J] を、馬に乗って城外で出迎え、見送ったのだろう。

244) ウラジーミル・モノマフ [D1] の遺体がソフィア聖堂に安置されていたことについては、〔イパーチイ年代記 (2) : 295 頁, 注 61] を参照。

245) ここでは、「遺体を布で巻く」(спрягати тѣло) ことは、葬儀を主宰することとほぼ同義で用いられている。年代記における公族の葬儀の描写では、「遺体を布で巻く」行為は、父親の死に際して息子が行うことが目立っており(ヤロスラフ賢公の葬儀ではフセヴォロド [D] が行っている〔原初年代記〕1054年の項参照)、権力継承の儀礼を兼ねていた。ロスチスラフ [D116:J] が「父」(叔父)であるヴァチェスラフ [D16] の急死の報をうけて遠征先から急遽キエフへ引き返し、自ら葬礼を取り仕切ったのも、キエフ公たる叔父を引継ぎ、キエフにおける権力基盤を固める意図によることは明らかである。

246) ヴァチェスラフ [D16] は年長のキエフ公として、ここに居住していた。

247) 「家令、鍵番たち」(тивуны и ключеникы) の「家令」は公の所領や財政を管轄する上級従士を指し、「鍵番」は公の屋敷を管理していた奉公人を指している。

248) 「隠遁所」(затвор) とは、修道士が共住する形式の修道院ではなく、キエフ洞窟修道院のように各自が庵室を持って「隠遁する」形式の修道院を指している。

代として〔教会に〕与えた。〔ロスチスラフ〕はこのようにすべてを差配した。かれは、ムスチスラフ [D11] の妃である自分の母親²⁴⁹⁾にも指示を与えた。

そして、自分自身〔ロスチスラフ〕は、残されたヴァチェスラフ [D16] の従士たちを率いると、〔ドニエプル川〕の対岸の、自分の部隊のところへと向かった²⁵⁰⁾。そして、かれは、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G]、自分の甥のムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] および自分の家臣たちと評議をして、チェルニゴフへと軍を進めようとした。

ところが、家臣たちは、チェルニゴフへ進軍することを思いとどまらせようとして **[474]**、かれ〔ロスチスラフ〕に言った。「見よ、神はそなたの叔父ヴァチェスラフ [D16] を召されました。あなたは、まだキエフにおいて、民の支持を得ていません。民の支持を得るために、キエフに行った方が良いでしょう。もし、叔父のユーリイ [D17] があなたを討ちにやって来たとき、〔キエフの〕民の支持を得ておけば、好い条件でかれ〔ユーリイ〕と和を結ぶことができでしょう。まずは、和を結ばれよ。さもなければ、あなたは、かれ〔ユーリイ〕と戦争をすることになるでしょう」。しかし、ロスチスラフ [D116:J] は、これらのことに全く耳を貸さずに、イジャスラフ²⁵¹⁾・ダヴィドヴィチ [C35] を討伐すべくチェルニゴフへと進軍を始めた。

イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] は、〔そのことを〕聞くと、グレーブ・ユーリエヴィチ²⁵²⁾ [D178] を呼び寄せるための使者を遣り、ポロヴェツ人とともに速やかに自分のところ〔チェルニゴフ〕に来るように要請した。

ロスチスラフ [D116:J]、〔スヴァトスラフ・〕フセヴォロドヴィチ [C411:G]、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] は、〔チェルニゴフの近くまで〕やって来ると、ポロヴェス²⁵³⁾ (Боловес)

249) ロスチスラフ [D116:J] の実母は、通説ではスウェーデン人のクリスチン (Kristin Ingesdottir) で、1122年に死去しているので、この「母親」はかれの継母を指している。かの女は、ムスチスラフ [D11] が1122年に再婚した相手であり、ノヴゴロドのドミートリイ・ザヴィドヴィチの娘（〔イパーチイ年代記(2)：291頁、注30〕を参照）である。当時はキエフの丘ウラジーミル街区の「ムスチスラフの館」に住んでいた。（〔イパーチイ年代記(3)：354頁、注136〕を参照）

250) 『ノヴゴロド第一年代記』には「ヴァチェスラフ [D16] が逝去した。その時、ロスチスラフ [D116:J] は〔キエフの〕公座に1週間座したのちに、キエフを出てチェルニゴフへと行った」とあることから、ロスチスラフがキエフに滞在して葬儀を主宰した期間は1週間であったことがわかる。

251) 原文はすべての写本で「ロスチスラフ」(на Ростислава) になっているが、明らかに誤記であるので、「イジャスラフ」に替えた。

252) 先のベレヤスラヴリ攻めに失敗したグレーブ [D178] は兵を引いて、このときにはおそらく居城であるオステル川河口のゴロドクにいたと考えられる。

253) 「ポロヴェス川」(Боловес) は、デスナ川右岸の支流で、現在のピロウス川 (Білоус: Белоус) のこと。チェルニゴフの内城から西へ5kmほど離れた場所にある。

川で陣を張った。ロスチスラフ [D116:J] とムスチスラフ²⁵⁴⁾・イジャスラヴィチ [I1] は、自分の家臣たちを、〔使者として〕チェルニゴフのイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] のもとに派遣して、こう言った。「われらの味方になる²⁵⁵⁾ ことを〔誓う〕十字架接吻をせよ。そなたは、自分の父の地であるチェルニゴフに座すがよい。われらはキエフに〔座す〕。われらはみなが譲歩し合おうではないか」。

イジャスラフ [C35] は言った。「今、わしは、そなたたちに何をしようのさ。何でおまえたちはわしを討ちに来たのか。わしとそなたたちのことは、神が見そなわすであろう²⁵⁶⁾」。なぜなら、〔イジャスラフ [C35] は〕すでに使者を派遣して、グレーブ・ユーリエヴィチ [D178] と、ペレヤスラヴリでかれ〔グレーブ〕とともに戦ったポロヴェツ人をこっそりと引き入れていたからである²⁵⁷⁾。

翌日、イジャスラフ [C35] は、ポロヴェツ人およびグレーブ・ユーリエヴィチ [D178] と合流して、ポロヴェス川へ向けて出陣した。射手たちは、川を挟んで射撃を行った。

ロスチスラフ [D116:J] は、夥しい数のポロヴェツ人を見て恐くなった。【475】進軍してきた〔自分たちの〕数が少なかったからである。そこで、〔ロスチスラフ [D116:J] は〕イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] へ使者を遣って和を求めた。そして、自分からはキエフを、〔あるいは〕ムスチスラフ [I1] からはペレヤスラヴリを、かれ〔イジャスラフ [C35]〕に与えると言い始めたのである。

ムスチスラフ [I1] は、かれ〔ムスチスラフ〕からペレヤスラヴリを〔取り上げて、イジャスラフ [C35] に〕与えるという話を聞くと、〔ロスチスラフに〕言った。「わたしからはペレヤスラヴリが失われ、あなたからもキエフが失われることになりますよ²⁵⁸⁾」。こう言うと、ムスチスラフ [I1] は乗っていた馬の首を転じて、自分の従士たちとともに、叔父〔ロスチスラフ [D116:J]〕のもとから去って行った。

ポロヴェツ人は、かれら〔ロスチスラフ勢〕の部隊のまわりを巡り、かれらと二日にわたっ

254) ここは、全ての写本で「スヴァトスラフ・イジャスラヴィチ」(Святослав Изяслович) になっているが、文脈から見て「ムスチスラフ」の明らかな間違いである。

255) つまり、イジャスラフ [C35] が、依然としてキエフの大公位を狙っている叔父のユーレイ [D17] と同盟しないこと、を意味している。

256) 戦争によって決着をつけることを表現する定型句。[イパーチイ年代記(2): 320頁, 注192]を参照。

257) このあたりの事情について、『ノヴゴロド第一年代記』の6662(1154)年の最後の記事は、「〔ロスチスラフ [D116:J] は撃ち破られた、だまされたのである〕(побѣдиша и, прельстивше)と、イジャスラフ [C35] のポロヴェツの援軍を使った巧妙な戦いの勝利を表現している。

258) このムスチスラフ [I1] の叔父ロスチスラフ [D116:J] に対する言葉は、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「もしわたしからペレヤスラヴリを〔取り上げて〕与えるようなことをあなたがすれば」という前置きが付いている。こちらのほうが意味が分かりやすい。

て戦った。こうして、ポロヴェツ人は混乱を引き起こした。ロスチスラフ [D116:J] の兵は敗走を始めた。かれれらの多くは撃ち殺され、また多くは捕虜に獲られた。このようにして、ロスチスラフ [D116:J]、スヴァトスラフ [C411:G]、ムスチスラフ [I1] 等諸公とその従士たちは、四散して逃げ出したのである。

ロスチスラフ²⁵⁹⁾ [D116:J] は、馬が最初に跳躍したときに馬上から振り落とされた。かれの息子スヴァトスラフ [J4] はこれを見て、馬から飛び降りると、自分の父の援護をして戦った。数人の従士がまわりに集まり、かれ〔ロスチスラフ〕に馬を与えた。

こうして、ロスチスラフ [D116:J] は、速駆けして、リユーベチから下流の地点でドニエブル川を渡河し、スモレンスクへと向かった。他方、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] は、スヴァトスラフ・ロスチスラヴィチ [J4] とともに、その場から逃げた。そして、ペレヤスラヴリにたどり着くと、自分の妻²⁶⁰⁾ を連れて、ルチェスク²⁶¹⁾ (Луческ) へと向かった。

他方、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、逃走中にポロヴェツ人によって捕らえられた²⁶²⁾。イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] とその妻²⁶³⁾ は、スヴァトスラフ [C411:G] をポロヴェツから〔身代金を支払って〕身受けした。〔二人は〕他の多くのルーシの従士たちをも身受けした。〔二人は〕は多くの善行をなした。【476】ポロヴェツ人のもとから逃げて出して〔チェルニゴフの〕城市の中へ逃げ込んだ者たちを〔ポロヴェツ人に〕引き渡すことはなかった²⁶⁴⁾。

259) 原文ではすべての写本で「イジャスラフ」となっているが、これは明らかに「ロスチスラフ」の誤りである。

260) このムスチスラフ [I1] の妻とは、1149～1151年頃にムスチスラフと結婚した、ポーランドのボレスワフ曲唇公の娘アニェスカ (Agnieszka) と推定されている [Balzer 1895 S. 181-183]。かの女については後年の記事でも言及されており、年代記者には親しい存在だったのだろう。

261) ルチェスクは、ヴラジミルの東南東、ステイリ川左岸に位置する城市。1149年には、イジャスラフ [D112:I] が、ユーリイ [D17] との戦いでここを拠点として利用している。また、1151年の夏、サボグイニでウラジミルコ [A121] に敗れたムスチスラフ [I1] は、従士たちを連れてこの「ルチェスク」へと逃げ込んでいる。(上注 63 参照) おそらく、ムスチスラフ [I1] にとってこの城市は、父から受け継いだ領地だったのだろう。

262) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、ムスチスラフ [I1] とスヴァトスラフ [C411:G] の二人が、「キエフ方面へと逃げ出し」、スヴァトスラフ [C411:G] はその途中でポロヴェツ人の捕虜になったと書かれている。

263) イジャスラフ [C35] によるスヴァトスラフ [C411:G] の身柄買い戻しに、イジャスラフの公妃(妻: сь женою своею) が役割を果たしたことが述べられているが、かの女について言及している史料は他にない。

264) ソロヴィヨフは、イジャスラフ [C35] のこの「善行」を、かれがルーシの住民の好意を得るための意図的な行為だった可能性があるとしている [Соловьев 1988: С. 474]。実際に、当時キエフの公位を狙っていたイジャスラフは、キエフ人の支持を必要とした。

イジャスラフ [C35] は、キエフ人のもとに使者を遣って「自分はそなたたちのもとに行くつもりである」と言った。かれら〔キエフ人〕は、ポロヴェツ人を恐れていた。なぜなら、キエフ人は困難な状態にあり、かれらのところのキエフ〔城内〕には一人の公も残っていなかったからである。そこで、キエフ人は、カーネフの主教デミヤン²⁶⁵⁾ (Демяян) を〔使者として、イジャスラフ [C35] のもとに〕派遣して、こう言った。「キエフに来て下さい。ポロヴェツ人がわれらを占領しないためにも。あなたはわれらの公です。来て下さい」。イジャスラフ [C35] は、キエフに入城し、公座に座した。

そして、〔イジャスラフ [C35] は〕グレーブ [D178] を、ペレヤスラヴリに、公として支配させるために派遣した²⁶⁶⁾。

イジャスラフ [C35] は、〔ノヴゴロド・セヴェルスキイの〕スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] に使者を遣って、相談を始めた。それは、イジャスラフ [C35] がキエフの公座に就き、スヴァトスラフ [C43] がチェルニゴフの公座に就くことについてだった。スヴァトスラフ [C43] は、ユーリイ [D17] が進軍して来るという情報を知っていた。そこで、かれら〔二人は〕じっとして居ることができず、ユーリイがやって来る前に〔行動を起こした〕のである。

その頃、ポロヴェツ人がペレヤスラヴリの近辺で多くの悪事をなしていた。あらゆる村落を焼き、アリト川の御堂²⁶⁷⁾ も焼き払い、聖なる殉教者ボリスとグレーブの教会に火をかけたのである。

265) この主教デミアン（もしくはダミアン）(Демиан; Дамиан) は、1147年夏にクリメント・スモリヤティチが、ルーシの主教たちの手で府主教に選出されたとき、「ユーリエフ」の主教として、クリメント支持グループの一員として主教会議に参加していた（〔イパーチイ年代記(3)：340頁〕参照。本記事の1155年1月～2月の時点では「カーネフ」となっており、この7年の間に主教座がユーリエフからカーネフへと移された可能性がある。[Щапов 1989: С. 45] [Православная энциклопедия: Дамиан Юрьевский]。ただし、この二つの城市はキエフに近い、同じロシ川流域にあり、主教管区としての変更はなかったのだろう。

なお、重要な政治的決定のときに、都市の主教が使者となることはノヴゴロドの慣習が有名だが、キエフについても、1148年夏にキエフ公イジャスラフ [D112:I] が、ベルゴロド主教フェオドルをチェルニゴフへ使者として派遣している。（〔イパーチイ年代記(3)：366頁、注190〕を参照）

266) 翌年の1155年に、グレーブ [D178] はイジャスラフ [C35] の娘と結婚することになる。この時点ですでにイジャスラフ [C35] とグレーブ [D178] は、ユーリイ [D17] を通して同盟関係を形成している。

267) 「御堂」(божница) は次の「ボリスとグレーブ教会」と同じものを指している。この聖堂は、1117年にウラジーミル・モノマフ [D1] の手でアリト川河畔に建立されている。（〔イパーチイ年代記(1)：266頁〕参照）

この年の冬、ユーリイはルーシに向けて軍を進めた。イジャスラフ [D112:I] の死を知ったのである。そして、スモレンスクの近くに達すると、かれに報せがもたらされた。「あなたの兄ヴァチェスラフ [D16] が死に、ロスチスラフ [D116:J] は打ち負かされ、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] がキエフに座している。また、あなたの息子グレーブ [D178] は、ペレヤスラヴリに座している」と。

その時、ノヴゴロド人がユーリイ [D17] のもとにやって来て、かれのもとから、息子のムスチスラフ [D17j] を、自分たちの公として連れて行った²⁶⁸⁾。

その頃、ユーリイ [D17] は、ロスチスラフ [D116:J] の領地に向かって進軍していた。ロスチスラフ [D116:J] は【477】、このことを聞くと、自分の兵を非常に多く集めて、自分の部隊に戦闘準備をさせて、かれ〔ユーリイ〕に対抗して、ザロイ²⁶⁹⁾ (Запой) へ向かって進軍し、そこで

268) この記事だけは前後関係が分からないが、『ノヴゴロド第一年代記』の6662(1154)年の記事には、ムスチスラフ [D17j] のノヴゴロドへの招聘の事情がやや詳しく書かれている。前年の11月半ばにイジャスラフ [D112:I] の死を知って、ロスチスラフ [D116:J] は息子のダヴィド [J3] をノヴゴロドに残して自らはキエフに向かった。ダヴィド [J3] はノヴゴロド人と公との間の約定を守らず破ったために、ノヴゴロドの怒りを買って追放された(1155年1月頃)。ノヴゴロド人は主教ニフォントと上級市民からなる高級使節団をユーリイ [D17] のもとに派遣して息子を公として送るよう要請した。この頃、ユーリイ [D17] もすでにイジャスラフ [D112:I] の死を受けて、キエフの公座を狙って遠征を始めており、ノヴゴロド側はユーリイ [D17] がキエフ公になることを見越して、かれの権威に頼ろうとした可能性が強い。実際、1155年3月にユーリイ [D17] がキエフの公となり、『ノヴゴロド第一年代記』の記者は、「ルーシの地は平静になった」と満足の意を表明している(下注288を参照)。

そして、ユーリイ [D17] はおそらく、息子のムスチスラフ [D17j] 遠征に同行させ、その途上でノヴゴロドの使節団に引き渡しのではないだろうか。『ノヴゴロド第一年代記』によれば、1155年1月30日にムスチスラフ [D17j] は使節団に伴われてノヴゴロドに入城している。

なお、ロスチスラフ一族を見限ったノヴゴロド人の判断は当たり、実際ロスチスラフ [D116:J] は、イジャスラフ [C35] の巧妙な作戦によってチェルニゴフ郊外で敗北してスモレンスクへと逃げ帰っただけでなく、キエフ遠征途上のユーリイ [D17] に服従の和睦を申し出ることになった。

269) 「ザロイ」(Запой)の立地については定まっていないが、マフノヴェツの索引でも採用されている通説では、現在のロシア連邦ブリャンスク州のラズリトエ(Разрытое)村(イプーチ(Ипуть)川上流左岸)に同定されており、この場所はスモレンスクまでは西北西に約213km、スタロドゥーブまでは南南西に約41kmの距離がある。[РУИНА.RU: Разрытое]

陣を張った²⁷⁰⁾。

ロスチスラフ [D116:J] は、そこで布陣したまま、ユーリイ [D17] のもとに使者を遣って、和を求めて言った。「父よ、あなたに拝礼します。あなたは、以前はわたしに対して善き関係であり、わたしも、あなたに対して善き関係でした。今、わたしは拝礼します。あなたは、わたしの〔父方の〕叔父で、父のような方です」。

ユーリイ [D17] は〔これに対して〕言った。「息子よ、その通りである。わしは、イジャスラフ [D112:I] とはともに居ることはできなかったが、そなたは、わしの兄弟であり息子である」。〔ユーリイは〕、かれ〔ロスチスラフ [D116:J]〕の兄〔イジャスラフ [D112:I]〕〔がなした〕悪を根に持つことなく、かれ〔ロスチスラフ [D116:J]〕への怒りを解いた。そして、二人は、何事についても親愛にあることを、互いに十字架接吻して〔誓った〕²⁷¹⁾。

ユーリイ [D17] はキエフへ向けて出発し²⁷²⁾、ロスチスラフ [D116:J] は自分の〔領地である〕スモレンスクへと〔出発した〕。

6663 [1155] 年

ユーリイ [D17] の姻戚〔娘の舅〕であるスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] が、ラドシチ²⁷³⁾ (Радош) とシニン・モスト²⁷⁴⁾ (Синин мост) で、かれ〔ユーリイ〕を出迎え、二人は協議した。

270) この段落の記述は不思議である。敗走してスモレンスクに逃げ戻って来たばかりのロスチスラフ [D116:J] が、ユーリイ [D17] の遠征軍と戦うための「非常に多数の兵を」すぐに動員できたのだろうか。ロスチスラフ [D116:J] ひいきの記者の誇張があるのかもしれない。『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「ロスチスラフ [D116:J] は戦いからスモレンスクへと逃げて来て」すぐさま叔父のユーリイに和議の使者を派遣したことになる。この不整合は、『イパーチイ年代記』の編集過程で生じたものだろう ([Вилкул 2005: С. 43] 参照)。

なお、ソロヴィヨフは、この「非常に多数の兵」はロスチスラフがユーリイとの和議を有利にするための策ではないかと考えている。[Соловьев 1988: С. 475]

271) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、「ユーリイは (…) かれ〔ロスチスラフ〕に和平を与えた」とそっけなく書かれており、ここにも、ロスチスラフひいきの記者の手による加筆・改変の跡をうかがうことができる。

272) 以下の記述からは、ユーリイ [D17] はヴォルガ川からドニエプル川を經由してスモレンスク近郊に到達し、さらにデスナ川の水系に入って、スタロドゥーブからチェルニゴフを經由して、同盟諸公を糾合しながらキエフへ向かったことがわかる。

273) 「ラドシチ」(Радош) は、デスナ川右岸支流スドスチ川 (Судость) の中流域右岸にあった城市で、現在のポガル (Погар) 市に相当する。スタロドゥーブからだと東へ約 34km ほどの所になる。

274) 「シニン・モスト」(Синин мост) は上のラドシチから北西へ 14km ほど行ったところにあり、現在のシニン (Синин) 村にあたる。ラドシチとスタロドゥーブのほぼ中間に位置している。

その時また、〔スヴァトスラフ・〕フセヴォロドヴィチ [C411:G] も、スタロドゥーブ²⁷⁵⁾ でかれ〔ユーリイ〕を出迎え、かれ〔ユーリイ〕に向かって叩頭して²⁷⁶⁾、「わたしは正気を失っていました」と言った。

スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は、自分の姻戚のユーリイ [D17] に懇願して、自分の甥の〔スヴァトスラフ・〕フセヴォロドヴィチ [C411:G] を、親愛をもって受け入れるように言った。ユーリイ [D17] は、この者〔スヴァトスラフ [C411:G]〕に和平を与えた。〔この者は〕叔父であるユーリイ [D17] に対して、すべてかれの意志に従うことを、十字架接吻〔によって誓った〕。そして、ユーリイ [D17] は、かれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕に対して、自分とともに²⁷⁷⁾ キエフへと進軍するよう命じた。

二人〔ユーリイ [D17] とスヴァトスラフ [C411:G]〕は、スタロドゥーブに向かい²⁷⁸⁾、そこから、チェルニゴフ²⁷⁹⁾ へと向かった。

その時、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は、キエフにいる自分の兄弟イジャスラフ [C35] に〔478〕使者を派遣して、かれにこう言った。「兄弟よ、キエフから出て来られよ。ユーリイ [D17] が進軍している。われら二人が〔ユーリイを〕呼んだのだから²⁸⁰⁾」。イジャスラフ [C35] はこれを望まず、自分の兄弟スヴァトスラフ [C43] の言うことを聞こうとしなかった。

こうして、スヴァトスラフ [C43] は、チェルニゴフに到着すると、そこで陣を張った。そして、兄弟のイジャスラフ [C35] を呼び寄せる使者を再び派遣して、こう言った。「キエフから〔チェルニゴフへ〕来られよ。そして、ユーリイ [D17] をキエフへ行かせるのだ。わしはチェルニゴフをそなたに譲り渡そう。キリスト教徒たちの魂のために。どうか〔戦争になってキリスト教徒たちが〕身を滅ぼすことがないように」。

275) 「スタロドゥーブ」(Стародуб) はチェルニゴフ領内の北方の城市で。チェルニゴフ公だったイジャスラフ [C35] が、ポロヴェツ人の捕虜となったスヴァトスラフ [C411:G] を身受けした後に、かれにチェルニゴフ領の北にある城市スタロドゥーブを与え、そこに住まわせていたのだろう。

276) 「かれに向かって叩頭」(ударил его челомъ) する儀礼は、通常の服従の拝礼 (поклон) よりも度合いが強い服従を表現している。このことは、次の「わたしは正気を失っていた」(избезумился есмь) という言葉 (ヴァチェスラフ [D16] = ムスチスラフ [D116:J] 側についたことについての弁解) からも推察することができる。

277) 「自分とともに」(съ собою) は、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「自分のあとから」(по себѣ) になっている。

278) すぐ上に「スヴァトスラフ [C411:G] がスタロドゥーブでユーリイ [D17] を出迎え」たとあるが、これと同じ事を繰り返しているのだろう。『イパーチイ年代記』編集上のダブリと考えられる。

279) このときチェルニゴフには、イジャスラフ [C35] との取り決めによって、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] が公として支配していた。スヴァトスラフ [C43] は、ユーリイ [D17] とイジャスラフ [C35] との仲介を引き受け、イジャスラフ [C35] をチェルニゴフに呼び出して、交渉と和議の場を設けようとしたのである。

280) 「われら二人が呼んだ」ことについては、上注 230 を参照。

なぜなら、スヴァトスラフ [C43] は、イジャスラフ [C35] がキエフ〔の公座〕に座したことを知っていたから〔使者を派遣したの〕である。

イジャスラフ [C35] は、キエフから出ることを望まなかった。なぜなら、かれはキエフがすでに気に入っていたからだった。

スヴァトスラフ [C43] はチェルニゴフに陣取り、ユーリイ [D17] はモロヴィイスク²⁸¹⁾ (Моровииск) に陣を張った。そして、ユーリイ [D17] は、イジャスラフ [C35] に使者を遣って言った。「キエフはわが父の地である。そなたの〔父の地〕ではない」。

イジャスラフ [C35] は、ユーリイ [D17] に使者を派遣して、請願し拝礼して²⁸²⁾ 言った。「いたい、わたしは自分からキエフに来たわけではありません。わたしは、キエフ〔の公座〕に〔キエフ人によって〕据えられたのです²⁸³⁾。どうか、わたしに対して悪行²⁸⁴⁾をなさないで下さい。見よ、キエフはあなたのものです」。

ユーリイ [D17] は、慈愛を示して、かれ〔イジャスラフ [C35]〕への怒りを解いた。こうして、イジャスラフ [C35] はキエフを出た²⁸⁵⁾。

ユーリイ [D17] のキエフにおける公支配の始まり

このようにして、ユーリイ [D17] は、神に感謝して、キエフに入城した²⁸⁶⁾。かれ〔ユーリイ〕

281) 「モロヴィイスク」 (Моровииск) は、デスナ川右岸にある城砦で、現在のモリフシク村 (Морівськ) に当たる。チェルニゴフからは約 53km、キエフからは約 74km の距離にあり、二つの都市を結んだほぼ中間地点に位置している。

282) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事には「請願し拝礼して」 (моляся и кланяяся) の語句はない。この語句は、イジャスラフ [C35] の立場が弱く、キエフ退去は自主的な行為であることを印象づけるために『イパーチイ年代記』の記者が加筆したものだろう。

283) 先のロスチスラフ [D116:J] 敗走の後で、キエフ市民が主教デミアンを使者として、チェルニゴフのイジャスラフ [C35] のもとに派遣し、ポロヴェツから城市を守るために、かれをキエフ公に招いたことを指している。この記事の動機も上注と同様だろう。

284) 「悪行」 (пакости) とは、キエフに攻め込んで城市を掠奪し、市民を捕虜にとるなどのことを指している。

285) 『ノヴゴロド第一年代記』の 6663(1155) 年の記事によれば、イジャスラフ [C35] はキエフを出て、「チェルニゴフへ逃げた」としている。上述のスヴァトスラフ [C43] の申し入れを結果的に受け容れたことになった。

286) ユーリイ [D17] のキエフ入城について、『ノヴゴロド第一年代記』の 6663(1155) 年の項では、「柳の日曜日にユーリイがキエフに入り、公座に就いた」とある。柳の日曜日 (вербница) とは復活祭一週間前の日曜日 (主日) で、1155 年 3 月 20 日に相当する。なお、この祝日はキリストのエルサレム入城を記念するもので、いかにもキエフ入城の日として適した祝日が選ばれている。

を出迎えようと多くの民が城から出てきた。〔ユーリイは〕自分の父と祖父の公座に座した。こうして、ルーシの地全土は、喜んでかれ〔ユーリイ〕を受け入れた。

このようにして、ユーリイ [D17] は〔キエフの公座に〕座すと、子供たちに領地を分け与えた²⁸⁷⁾。アンドレイ [D173] はヴィシエゴロド〔の公座に〕着けた。ボリス [D170] は【479】トゥーロフ〔の公座に〕に着けた。グレーブ [D178] はペレヤスラヴリ〔の公座に〕着けた。ヴァシリコ [D174] はロシ川河岸地域²⁸⁸⁾〔の公座に〕に着けた。

この年の秋²⁸⁹⁾、ポロヴェツ人が襲来して、ロシ川流域を掠奪した。ヴァシリコ [D174] はベレンディ人とともに、かれらに追い付いて撃ち殺し、あるいは捕虜に獲り、栄光と名誉をもって、父のもとに帰還した。

その時、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] のもとに²⁹⁰⁾、かれの甥のスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] がやって来た。そして、十字架接吻をして〔誓った〕。そして、〔スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]〕は〔スヴァトスラフ [C411:G] に〕3つの城市を

287) ユーリイ [D17] は、1149年にキエフに座したときも同様に、遠征に伴ってきた息子たちを、キエフ周辺のルーシ諸城市の公座に据えている（〔イパーチイ年代記(4)〕：322頁、注10参照）。

なおこれについて、『ノヴゴロド第一年代記』の並行記事（6663(1155)年の項）では、「ユーリイ [D17] は息子たち（シノド本では「甥たち」）を慈愛をもって受け容れ、然るべき領地をかれらに分けた得た。そしてルーシの地は平静になった」としている。

288) 1149年のユーリイのキエフ支配のときには、ヴァシリコ [D174] はスーズダリに残されたが、今回は遠征に同行して、公座を与えられている。かれが得た「ロシ川河岸地域」（Поросье）は、ベレンディ人など黒頭巾族の居住地であり、かれらはムスチスラフ [D11] = イジャスラフ [D112:I] の一族に仕えていた。次の記事に見るように、ユーリイは、かれらを監視し味方につけると同時に、南からのポロヴェツ人のキエフ領への侵入に対処するために、息子のヴァシリコを、この地域（城市としてはユーリエフ、トルチェスク、カーネフなど）の公としたのだろう。ただし、通常はキエフの父のもとに居館を持って滞在していた可能性がある。

289) 1155年の秋のこと。

290) スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [D43] は、チェルニゴフをイジャスラフ [C35] に譲り渡したあと、旧領のノヴゴロド・セヴェルスキイへ移ったと考えられる。

与えた²⁹¹⁾。スノフスク²⁹²⁾ (Сновеск) は取り上げた。コラチェフ²⁹³⁾ (Корачев), ヴォロティネスク²⁹⁴⁾ (Ворогинеск) も [取り上げた] は自分で取った。なぜなら, かれ [スヴァトスラフ [C411:G]] は, かれ [スヴァトスラフ [C43]] から背いたからである。そして, スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は, スノフスクへ向けて出発した。

その時, イジャスラフ [C35] は, [スヴァトスラフ [C43]] をそそのかして, ユーリイ [D17] 討伐の戦争を始めようとした。しかし, スヴァトスラフ [D43] は, かれ [イジャスラフ] にそうさせなかった。

この年, ユーリイ [D17] は, ユーリイ・ヤロスラヴィチ²⁹⁵⁾ [B321] を²⁹⁶⁾, ジロスラフ

291) この3つの城市がどこであるかは不明。

292) 「スノフスク」(Сновьск) は, デスナ川右岸の支流スノフ(Снов; Сновь)川の河岸に建設された城砦。チェルニゴフから北東約20kmに位置し現在のセドニウ(Седнів)村に相当する。チェルニゴフの付属城市だった。この記述から, イジャスラフ [C35] がキエフ公になったとき, スノフスクもまたスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] に与えられていたことがわかる。

293) 「コラチェフ」(Корачев) は, ブリャンスク近郊の都市で, 現在の「カラチェフ」(Карачев) に当たる。ノヴゴロド・セヴェルスキイから北東へ約170km離れ, チェルニゴフ公領とヴァティチの地の境に位置している。1146年に, 兄イーゴリ [C42] の捕縛をめぐって, スヴァトスラフ [C43] とイジャスラフ [D112:I] と対立が先鋭化した時に, スヴァトスラフ [C43] は姻戚であるポロヴェツツのハーンたちに勧められてここに逃亡しており, かれにとっては親しい場所だったのであろう。

294) 「ヴォロティネスク」(Ворогинеск) についてはこの個所が年代記で唯一の言及であり, 通説ではオカ川支流のウグラ川近くにある現在のヴォロティンスク(Ворогынск)に同定されている。ここはヴァティチの地の奥で, 先述のコラチェフからでも約165km離れた遠地になる。

295) この個所は, フレーブニコフ写本では「ロスチスラヴィチ」(Ростиславич)となっているが, ここではイパーチ写本及び『ラヴレンチイ年代記』並行記事の「ヤロスラヴィチ」(Ярославич)の読みを採用した。

296) ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] は, 1144年に当時のキエフ大公フセヴォロド [C41] の主導でグロドノ公フセヴォロドコ [F11] の娘と結婚しており, フセヴォロド一族と近い関係にあった。この頃もスヴァトスラフ [C411:G] と行動をともにしていたと考えられる。そのため, スヴァトスラフがユーリイ [D17] に臣従したときに, 同時にユーリイ [D17] の指揮下に入ったのだらう。

ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] の父のヤロスラフ [B32] は, 1123年にヴラジミル包囲戦で殺され, それ以降, ヴラジミルの城市はムスチスラフ [D11] 一族の手に渡ったという経緯がある。かれはまた, 1149年のユーリイ [D17] とイジャスラフ [D112:I] との抗争のときにも, イジャスラフ [D112:I] に対する強い敵対心を示している ([イパーチ年代記] (4): 330頁参照)。このような, 自らの一族がかつて所有していた領地(ヴラジミル, ルツクなどヴラジミル地方)をめぐる, ムスチスラフ [D11] = イジャスラフ [D112:I] (ムスチスラフ [I1] の父) 一族への「怨念」が, 今回のユーリイ [D17] の指示によるムスチスラフ [I1] 討伐遠征への参加の動機になっていたのではないか。

(Жирослав)とヴァチェスラフの孫たち²⁹⁷⁾と共に、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] を討伐するために派遣した。そして、かれ〔ムスチスラフ〕をペレソプニツァからルチェスクへ²⁹⁸⁾と追いやった。それから、ユーリイ [D17] は自分の娘婿²⁹⁹⁾であるガーリチのヤロスラフ [A1211] に対して、ルチェスクへ進軍して、かれ〔ムスチスラフ〕を討伐するよう命じた。ムスチスラフ [I1] は、自分の弟のヤロスラフ [I2] をルチェフクに残すと、(自分はポーランド人のもとに³⁰⁰⁾ 向かった。

ガーリチのヤロスラフ・ウラジミルコヴィチ [A1211] は)³⁰¹⁾、継母の子ウラジーミル・ムスチ

297) この「ジロスラフとヴァチェスラフの孫たち」がムスチスラフ [I1] 討伐遠征に参加したことについては、1146年の記事が参考になる〔イパーチイ年代記(2):346頁(注373)〕。この時、イジャスラフ [D112:I] は、叔父ヴァチェスラフ [D16] からトゥーロフを取り上げ、そこにいたヴァチェスラフの「代官ジロスラフ・ヤヴァンコヴィチを追放」している。このジロスラフがその後もヴァチェスラフ [D16] に仕えていたとすれば、この頃キエフにいた可能性は高く、キエフ公となったユーリイ [D17] の指揮下に入ったことは十分に考えられる。また、上注のユーリイ [B321] の場合と同様に、イジャスラフ [D112:I] 一族への恨みという動機も想定できる。

その関係からまた「ヴァチェスラフの孫たち」も理解できる。ヴァチェスラフ [D16] には、1130年におそらくトゥーロフで死去した息子ミハイル [D161] がいた〔イパーチイ年代記(2):303頁参照〕。また、『イパーチイ年代記』1165年の項には、「ヴァチェスラフの孫」(Вячеславль внуць)のロマン(Романъ)に対して、ヴァシリエフ(Васильев)とクラスン(Красн)の城市が、当時のキエフ公ロスチスラフ [D116:J] から与えられたとの記事がある。このことから、当時のキエフに「ヴァチェスラフの孫」がおり、やはりキエフ公になったユーリイ [D17] の指揮下に入ったことは、十分に想定することができる。

298) 「ペレソプニツァ」(Пересопница)は、ストゥープラ川右岸に位置する城市で、ルチェスク(現在のルツク)より東へ70kmほど行ったところにある。ペレヤスラヴリから家族とともにルチェスクへ退去していたムスチスラフ [I1] は、ユーリイ [D17] がキエフの公座に就いたことを聞いて、討伐遠征を企て、軍を東へと進めていた途中だったのだろう。

299) 1150年に、ユーリイ [D17] は、共通の敵であるイジャスラフ [D112:I] に対抗するため「自分の別の娘」をガーリチのヤロスラフ [A1211] に嫁がせている。〔イパーチイ年代記(4):333頁(注62)〕

300) ムスチスラフ [I1] は、妻のアニエスカ(ボレスワフ三世の娘)(上注260参照)とのつながりを頼って、援助を要請するためにポーランドへ(в ляхи)行ったのだろう。当時のポーランドは、妻の兄弟である大公ボレスワフ四世(巻毛公)の治世だった。

301) この丸括弧部分はイパーチイ写本では欠落しており、フレーブニコフ写本の読みを採用した。

スラヴィチ³⁰²⁾ [D115]とともに、ルチェスクを包囲した。しかし、なんの成果もなく引き返した。

ユーリイ [D17] は、自分の甥ロスチスラフ [D116:J] を召喚するための使者をスモレンスクへ派遣して、かれ〔ロスチスラフ〕に言った。「息子よ、わしがルーシの地をともに保持していくべきは、そなたとである。ここへ来たれ³⁰³⁾」。

その時、ユーリイ [D17] は、**[480]** ポロヴェツ人との会合を行うためにカーネフ³⁰⁴⁾ へと向かっていた。ポロヴェツ人は、かれ〔ユーリイ〕のところにやってくると、ベレンディ人が捕虜に獲った³⁰⁵⁾ 自分たちの兄弟たちを〔解放する〕よう頼み始めた。しかし、ベレンディ人は解放せずに、こう言った。「われわれは、ルーシの地のために、あなたの息子〔ヴァシリコ [D174]〕とともに³⁰⁶⁾ 死にます。あなたの名誉のために戦場に斃れます」。ユーリイ [D17] は、かれら〔ベレンディ人〕に強いて〔捕虜を解放させる〕ことはしなかった。そして、〔ユーリイは〕ポロヴェツ人に贈物を与えて、かれらを故郷へと引き返させ³⁰⁷⁾、自分はキエフへと向かった。

302) ウラジーミル [D115] は、1152年に、兄のジャスラフ [D112:I] の指揮下で、ムスチスラフ [I1] とともに、ガーリチ公ウラジミルコ [A121] に対抗し、1154年2月頃のテレボヴリ郊外の戦いでは、イジャスラフ [D112:I] の連合軍の一員として、ガーリチ公ヤロスラフ [A1211] を撃ち破っている。その後、年代記にはウラジーミル [D115] についての言及はないが、あとの記述から推測して、この時点(1155年夏頃)ではウラジミルで公支配をしていたと思われる。

ウラジーミル [D115] は、おそらく、ユーリイ [D17] のキエフ公就位と兄ロスチスラフ [D116:J] の屈服という情勢の変化を受けて、ガーリチのヤロスラフ [A1211] と和を結び、ルチェスクへのムスチスラフ [I1] 討伐に参加したのだろう。

なお、ウラジーミル [D115] に対する「継母の子」(мачешич)の呼び名(かれは、父ムスチスラフ [D11] と後妻のノヴゴロド市長官ドミートリイの娘との間にできた息子である。注249も参照)は、かれの父ムスチスラフ [D11] の先妻の子供たちの立場からのものである。おそらく、後代(1180年代)に年代記の編集拠点となるロスチスラフ [D116:J] 一族の視点が反映されているのだろう。

303) ルーシの地における権力基盤が弱いユーリイ [D17] は、息子たちをルーシの諸都市に配置し、反抗する公には討伐軍を派遣すると同時に、主要な諸公をキエフに召喚して、自分への忠誠(服従)を誓わせる(十字架接吻)ことに着手したのである。

304) ロシ川がドニエプル川に注ぐ河口付近にあるカーネフは、ロシ川流域に居住していたベレンディ人たちを支配する拠点となる城市であり、この頃には主教座もあった(注265参照)。下注306のヴァシリコ [D174] もおそらくこの場所に公として座していたのだろう。

305) 上注289にある、1155年秋のポロヴェツ人のロシ川流域来襲のときに、ベレンディ人によって捕獲されたポロヴェツ人捕虜を指している。

306) 「あなたの息子とともに」(с твоимъ сыномъ)は『イパーチイ年代記』の記者・編者による加筆部分で、「ロシ川河岸地域」を所領として父ユーリイ [D17] から受けた(上注288参照)ヴァシリコ [D174] を指しているだろう。

307) 『ラヴレンチイ年代記』6663(1155)年の項の並行記事はニュアンスが異なり、「ポロヴェツ人はユーリイから贈物を受け取ると、和を結ばずに帰っていった。かれらは、ベレヤスラヴリの近辺で多くの悪行をなした」と、ポロヴェツ人にとってユーリイ [D17] の対応は不満だったことが書かれている。

その頃、ユーレイ [D17] の妃が、自分の子供たち³⁰⁸⁾とともに、スーズダリからスモレンスクのロスチスラフ [D116:J] のもとへとやって来た。ロスチスラフ [D116:J] は、自分の叔父〔ユーレイ [D17]〕の妻を自分のもとに引き取ると、自分のすべての部隊を引き連れて、自分の叔父のところへと出発した。そして、キエフの自分の叔父ユーレイ [D17] のところに到着した。こうして、二人は、大いなる親和と大いなる名誉をもって抱擁し合い、祝宴を張った。

ロスチスラフ [D116:J] は、こうしてキエフにやって来ると、兄弟の息子〔甥〕たちについて〔善処すること〕を懇願し始めた³⁰⁹⁾。ユーレイ [D17] は、これを聞き入れた。そこで、ロスチスラフ [D116:J] は、自分の兄弟のウラジーミル [D115] を呼び寄せるために、ヴラジミルへ使者を派遣した。また、ムスチスラフ [I1] とヤロスラフ [I2] を呼び寄せるためにルチェスクへ使者を派遣した。

そして、〔ロスチスラフ [D116:J] は〕二人〔ウラジーミル [D115] とヤロスラフ [I2]〕をかれらの部隊とともに、自分の父方の叔父〔ユーレイ〕のところに連れて行った³¹⁰⁾。

しかし、ムスチスラフ [I1] はヴラジミルに残った。ムスチスラフ [I1] は、「ユーレイ [D17] は自分を捕らえるだろう」と言って〔キエフへ〕行こうとはしなかった。

ユーレイ [D17] は、親愛をもって二人〔ウラジーミル [D115] とヤロスラフ [I2]〕を受け入れた。かれ〔ユーレイ [D17]〕は、ムスチスラフ [I1] へは、使者に〔十字架〕接吻の〔誓いの〕ための十字架を持たせて³¹¹⁾ 派遣した。**【481】** そして、かれ〔ムスチスラフ〕を親愛をもって受け入れた。

この年、ユーレイ [D17] のもとに、かれの娘婿ヤロスラフ [A1211] から、ガーリチの援軍が到着した。なぜなら、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] が、ユーレイを討とうと戦争を画策し始めたからだった。

308) これは当時まだ幼少のユーレイの息子で、ミハイル (ミハルコ) [D175] とフセヴォロド [D177:K] の二人だろう。フセヴォロドは当時まだ一歳ほどだった。

309) 「兄弟の息子たちについて〔善処すること〕を懇願」(поча ся молити о братанѣх)とは、ヴラジミル地方でユーレイ [D17] への対抗を続けているムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] とヤロスラフ・イジャスラヴィチ [I2] の二人を討伐せずに、和を結んでかれらを赦すことを意味している。

310) ウラジーミル [D115] とヤロスラフ [I2] の二人は、配下の従士たちを引き連れてキエフに参上し、ロスチスラフ [D116:J] の導きによって、キエフ公となったユーレイ [D17] に忠誠の宣誓 (十字架接吻) を行ったのである。

311) 上注 114 参照。ここでは、キエフに召喚したムスチスラフ [I1] がやって来ないために、次善の策として、十字架を持たせた使者を派遣して、忠誠の宣誓をさせたのだろう。

この年、ポロヴェツ人が再び、和を結ぶために³¹²⁾ やってきた、そして、スポイ川³¹³⁾ のやや上流のドゥブニツァ³¹⁴⁾ (Дубниця) に陣営を置いた。ユーリイ [D17] は、自分の甥たち、すなわち、ロスチスラフ [D116:J] とウラジーミル [D115]、さらにヤロスラフ・イジャスラヴィチ [I2] と合流し、また、ガーリチの援軍を受け入れて、カーネフへ〔ポロヴェツとの〕会合のために向かった。そして、ポロヴェツ人のもとに使者を遣って「われらのもとに和議に来たれ」と言った³¹⁵⁾。ポロヴェツ人は、かれ〔ユーリイ〕のもとに、あたかも偵察するかのよう少人数でやって来た。かれらは様子を見ると、こう言った。「明日、全員がそなたのもとに行くだろう」。しかし、その夜のうちに、全員が急いでもとの場所に戻って行った。

ユーリイ [D17] はキエフに帰還した。そして、自分の甥たち〔ロスチスラフ [D116:J] とウラジーミル [D115]〕と評議して、〔チェルニゴフの〕イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] のもとに使者を派遣した。そして、こう言った。「そなたは、和を結ぶためにわれらのもとに来るのか、それとも、見よ、われらがそなたの所に〔行くの〕か³¹⁶⁾」。イジャスラフ [C35] は、ユーリイ [D17] がその甥たちと集合しているのを見て、かれらに対して、十字架接吻して〔誓った〕³¹⁷⁾。そこで、ユーリイ [D17] は、甥たちを解散させた。ロスチスラフ [D116:J] は、自分の叔父ユーリイ [D17] に拝礼して、自分のスモレンスクへと出発した。かれの兄弟のウラジーミル [D115] はヴラジミルへ、ヤロスラフ [I2] はルチェスクへと出発した。

その時、ユーリイ [D17] は行って、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] およびスヴャトスラフ・オリゴヴィチ [C43] と会合した。会合した場所は、**[482]** ルタヴァ³¹⁸⁾ (Лугава) だった。

312) 軍事力を背景に、再度、ベレンディ人に囚われているポロヴェツ人捕虜の解放を求めて来たのである。以下に見るように、ユーリイ [D17] も諸公の部隊を多数集めて交渉に臨んだため、数に劣るポロヴェツ人の目論見は失敗し、撤退することになった。

313) スポイ川 (Супой) は、ベレヤスラヴリ公領を流れドニエプル左岸に注ぐ川。その河口はベレヤスラヴリから 20km ほどしか離れていない。

314) 「ドゥブニツァ」(Дубниця; Дубенец) は、カーネフのほぼ対岸にある地名で、現在の「ブブニフスカ・スロビドカ」(Бубнівська Слобідка) の近辺に当たる。ベレヤスラヴリ (ベレヤスラウ＝フメリニツクイ) から南東に 40km ほど離れた地点にある。

315) 相手がドニエプル川を渡河して、カーネフで和議を行うよう提案したのである。

316) 相手と戦争をすること意味している。

317) 以下に記されるルタヴァでの会合で (次注 318)、イジャスラフ [C35] は、ユーリイ [D17] に忠誠を誓う十字架接吻の儀式を行ったのだろう。そのことを指している。

318) 「ルタヴァ」(Лугава) は、デスナ川右岸で、オステル川河口のユーリイの拠点城市だったゴロデツのほぼ対岸にあった城市。現在も同名の都市がある。チェルニゴフから約 70km、キエフから約 57km 離れており、ほぼ中間地点に位置していた。

その時、ユーリイ [D17] は、イジャスラフ [C35] にはコルチェスク³¹⁹⁾ (Корчеськ) を、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] にはモズィリ³²⁰⁾ (Мозырь) を与えた。こうして、〔ユーリイは〕かれら二人と合意すると、自分のキエフへと向かった。

この年、アンドレイ [D173] は、自分の父を離れ、ヴィシェゴロドを出てスーズダリへと向かった。これは、父の意志ではなかった³²¹⁾。かれ〔アンドレイ〕は、ヴィシェゴロドから、聖なる聖母のイコンを持ち去った³²²⁾。このイコンは、ピロゴシチャ〔のイコン〕とともに、一つの船で帝都からもたらされたもので³²³⁾、30 グリヴナ³²⁴⁾ を超える黄金で飾られていた。さらに、銀、宝石、大粒の真珠でも飾られていた。〔アンドレイは〕 こうして、このイコンを装飾すると、

319) 「コルチェスク」(Корчеськ) は、ヴォルニ公領の東端の、ヴラジミルから約 200km 東へ行ったところの城市。チェルニゴフやキエフから離れており、イジャスラフ [C35] にとってさほど利得がある領地ではなかっただろう。

320) 「モズィリ」(Мозырь) は、プリピャチ川中流域の右岸に位置する城市で、現在のモズィル(Мозир) に相当する。プリピャチ川河口まで 125km ほど離れており、そこからキエフまでさらに 85km ほどある。ここも、所領としての利得に乏しい遠方の城市である。

321) これについて、16 世紀の「トヴェーリ年代記」(Тверская летопись) の 6663(1155) 年の項では「アンドレイ・ユーリエヴィチ公はキエフでいとも淨い聖母のイコンを取った。それは、ルカの手になるもので、帝都からかれの父のもとに運ばれたものだった。かれ〔アンドレイ〕はそれを持ってスーズダリへ行った。そのことについて、かれの父はかれに対して非常に憤慨した(негодоваша на него велми о томъ)」としてアンドレイの公位が父ユーリイの意に反していることが強調されている [ПСРЛ Т.15, 1863: Стб. 223]。

322) これは、現在トレチャコフ美術館に所蔵されている「ウラジーミルの聖母」のイコンを指している。1163～1164 年の成立と推定される『ウラジーミルの聖母の奇蹟物語』によれば、ヴィシェゴロドの「聖母女子修道院」(женский монастырь Пресвятой Владычицы нашей Богородицы) に安置されていたものを持ち去ったとしている [БЛДР Т. 4: С. 218]。

323) 1136 年に完成したキエフのピロゴシチャ聖母聖堂に奉納されたビザンティン渡来の聖母像。「ウラジーミルの聖母」と一緒にコンスタンティノポリスからもたらされた。[イパーチイ年代記 (2): 306 頁, 注 118] を参照。

324) 当時の重量単位としてのグリヴナ (約 200 グラムに相当) については、[イパーチイ年代記 (2): 332 頁] を参照。30 グリヴナなら、黄金 6kg ほどに相当する。

これを自ら [が建てた] ヴラジミル [クリャジマ河畔の]³²⁵⁾ の聖なる教会に安置した³²⁶⁾。

この年の冬³²⁷⁾, ユーリイ [D17] は, 自分の息子のムスチスラフ³²⁸⁾ [D17] に, ノヴゴロドでピョートル・ミハルコヴィチ³²⁹⁾ の娘と結婚するよう命じた。そして, [ムスチスラフは] 結婚した。

この年の冬, ユーリイ [D17] は, 自分の息子グレーブ³³⁰⁾ [D178] と結婚させるために, チェルニゴフのイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] のもとからその娘を引き取って, キエフに連れてきた。

その頃, スモレンスクの公ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ [D116:J] は, 自分の兄弟であるリャザンの諸公³³¹⁾ と, 親愛の十字架接吻 [の誓い] を行った。かれら [リャザン諸公] はみな, ロスチスラフ [D116:J] を見て, かれを自分の父と見なした。

325) この個所は、『イパーチイ年代記』において、北東のクリャジマ川河畔に建てられた城市「ヴラジミル」(Владимирь)についての初出の個所である。以下本翻訳では、ヴォルィニ地方の「ヴラジミル」と区別するために、この城市については「クリャジマ河畔の」の注記を付す。

326) 6666(1158)年の記事(『ラヴレンチイ年代記』にも並行記事あり)に「アンドレイ公は自ら、ヴラジミル [クリャジマ河畔の] に石造りの聖母公開を定礎した。4月8日だった」とあり、これは現在のヴラジミル市の聖母就寝(ウスペンスキイ)教会のことを指している。アンドレイ公は1155年にヴィシエゴロドからスーズダリへ「ウラジーミルの聖母」イコンを持ち出したのちに、1158年になって、ヴラジミル [クリャジマ河畔の] に、これを奉納するための教会を定礎したことになる。それゆえ本記事の、「このイコンは……」以下の説明部分は、後代の編集の過程で挿入されたことは明らかである。

327) 1155/1156年の冬に相当する。

328) ムスチスラフ [D17] は、1155年1月30日(『ノヴゴロド第一年代記』の年紀による)にノヴゴロド公に据えられたばかりであり、1年ほどしか経っていないことがわかる。

329) 「ピョートル・ミハルコヴィチ」については、白樺文書(19点が確認されている)の資料によれば、ノヴゴロドのリューゲン街区に居をおいていたギュリャーティン一族出身の上級貴族(ボヤーリン)で、支配公の立場から合同裁判の裁判官を務めていた重要人物である。研究者によれば、この結婚を機に、現存する「ノヴゴロドのしるしの聖母」イコンと「コスタの聖杯」(кратир Косты)が、新婦の父親であるピョートルによって、ソフィア聖堂に奉納されたという。[Словарь Великий Новгород С. 380-381][Древняя Русь 2015: С. 606]

330) グレーブ [D178] は、前年に妃を亡くしている(上注218参照)。当時ベレヤスラヴリ公だったグレーブにとって、この再婚が、当面の脅威であるイジャスラフ [C35] との融和を図るための政略結婚であることは言うまでもない。

331) この頃(1155年春~夏)のリャザン公は、ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [C511] とと思われる。かれは1146年にイジャスラフ [D112:I] と敵対するノヴゴロド・セヴェルスキイ公スヴァトスラフ [C43] を援助し、翌年1147年の歴史上著名なモスクワで開かれた宴席にもウラジーミル [C511] はスヴァトスラフ [C43] とともに出席している。「リャザン諸公」と複数形で記されているのでそのほかのリャザン公領内の比較的大きな城市(プロンスクなど)にも公がいたことが推察されるが、誰であったかは特定できない。

他方、かれ〔ロスチスラフ [D116:J]〕の弟のウラジーミル [D115] は、ヴラジミルに座しており、かれの甥であるムスチスラフ [I1] 及びヤロスラフ [I2] は〔ルチェスクに座していた³³²⁾〕。

その時、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] は、ムスチスラフ [D11] の妻である自分の母³³³⁾を、その婿である【483】ハンガリーの王³³⁴⁾のところへ出発させた³³⁵⁾。王は、自分の妻の母に多くの財産を与えた。

6664 [1156] 年

至福なるノヴゴロドの主教ニフォントが〔キエフに〕やって来て、府主教コンスタンチン³³⁶⁾ (Костянтин) が帝都から到着するのを待っていた³³⁷⁾。かれのもとに、すでに府主教が出発したという報告がもたらされたからである。しかし、病がかれ〔ニフォント〕を襲った。かれ

332) カギ括弧の個所は原文にはなく、訳者の解釈による補筆である。通常の年代記の構文法の省略パターンによれば、ここは「ヴラジミルに座していた」となるところだが、後の叙述から見て、ムスチスラフ [I1] とヤロスラフ [I2] はルチェスクにいたことは明らかである。リャザン版テキスト [Русские летописи Т.11: С. 332] やウクライナ語訳も、そのような解釈によって「ルチェスクに座していた」と補っている。

333) 上注 302 を参照。

334) 「その婿であるハンガリー王」：ウラジーミル [D115] の実の姉妹エフロシニアは、1146 年にハンガリー王ゲーザ二世（在位 1141 ～ 1162 年）のもとに嫁いでいる（〔イパーチイ年代記 (4) : 347 頁, 注 135] 参照）。そのため、ウラジーミル [D115] の母親は、王にとって義母（妻の母）にあたり、母親にとって王は「婿」（娘の夫）(зять) に相当する。

335) ユーリイ [D17] のキエフ支配にともない、ムスチスラフ [D11] の未亡人である公妃（ウラジーミル [D115] の実の母親）は、それまで住んでいたキエフの丘ウラジーミル街区の「ムスチスラフの館」（дворъ Мстиславль）（上注 249 を参照）を明け渡さざるを得なくなり、実の娘の嫁ぎ先に身を寄せることを決めたのだろう。後の記述に見るように、かの女はウラジーミル [D115] に伴われてかれの所領ヴラジミルまで行くが、そこで一時ムスチスラフ [I1] の手で捕虜になり、最終的にウラジーミル [D115] とともにハンガリーへ逃げるようにして到着したと思われる。

336) 府主教コンスタンチンは、1156 年にユーリイ [D17] の招聘によってキエフ赴任し、1157 年のユーリイの死によって庇護者を失うと、キエフを追われてチェルニゴフに逃れ、1159 年頃に没している。

337) ユーリイ [D17] は 1156 年 3 月 20 日にキエフの公座に就くと、イジャスラフ [D112:I] が半ば強引にキエフ府主教に任命した（〔イパーチイ年代記 (3) : 340-341 頁〕（1147 年の記事）参照）クリメントを即座に廃位し、コンスタンティノポリス総主教に、新しいキエフ府主教の叙任と派遣を求めた。総主教庁は速やかにコンスタンチン〔ギリシア人コンスタンティノス〕を府主教に選出し、3 月末～4 月初めにはすでにかれは出発したことになる。ユーリイ [D17] はこれとほとんど並行して、クリメントと対立していたノヴゴロド主教ニフォントに、キエフに来て新しい総主教を出迎えるよう命じ、ニフォントもこれを受けてキエフへ急行し、4 月初めには到着したことになる。これらの一連の経緯は、驚くべきほど迅速になされたことがわかる。

は13日間病に伏して、4月15日³³⁸⁾に安らかに永眠した。光明週間の土曜日だった。遺体は、洞窟修道院のフェオドーシイの洞窟³³⁹⁾に安置された。なぜなら、〔ニフォントは〕聖なる聖母と師父フェオドーシイを大いに敬愛していたからである。

〔ニフォントは〕驚くべき幻視について語った。病気になる3日前に〔次のような〕夢を見たのだった。「早課から戻って、眠っていたときです。見よ、自分は洞窟修道院の教会³⁴⁰⁾のスヴァトローシャ³⁴¹⁾の席(Святошно мѣсто)にいるではないですか。そして、わたしは、多くの涙を流しながら、師父フェオドーシイの姿を見ることができるようにと、至聖なる聖母に祈っていました。そして、多くの修道士たちが聖堂の中に集まってきて、その一人が進み出て、わたしに、『師父フェオドーシイを見たいですか』と言いました。わたしは『もし可能ならば、お示ください』と答えました。すると、かれはわたしの手を取って、至聖所の中へ導き、そこでわたしに、師父フェオドーシイを示したのです。〔わたしは〕進み出て、かれ〔フェオドーシイ〕に拝礼しました。〔フェオドーシイは〕立ち上がり、わたしを祝福しはじめました。そして、御自身の両腕でわたしを抱きしめ、わたしに接吻をしはじめ、こう言ったのです。『兄弟にして、息子のニフォントよ、よく来た。これより、われらは別れることはないであろう』。〔フェオドーシイは〕片手に巻物を持っていたので、わたしはそれを求めました。かれはわたしにそれを与えたので、わたしは開き、読みました。**【484】**その〔巻物の〕冒頭に〈ここに、わたしと、神がわたしにお与えになったわたしの子らがいる³⁴²⁾〉と書いてありました。そのとき、わたしは目を覚ましたのです³⁴³⁾」。

〔このような幻視を見たのは〕この主教ニフォントが、すべてのルーシの地の守護者だった

338) 『ノヴゴロド第一年代記』の6664(1156)年の項では、ニフォントの死の日付を「4月21日」としている。次の一節にあるように、逝去したのが「光明週間(復活祭の週)の土曜日」に当たるのなら、1156年の復活祭は4月15日であることから、その週の土曜日は4月21日となり、『ノヴゴロド第一年代記』の記述が正しい。『イパーチ年代記』の「4月15日」は、復活祭の日付と混同したものであろう。

339) 「フェオドーシイ」(Феодосий)はキエフ洞窟修道院の実質的な創建者で、聖人として崇敬されていた。かれは1074年に死去しており、その模様は『原初年代記』の同年の項に詳しい。そのフェオドーシイが修行した洞窟の中に、ニフォント主教の遺体が安置されたのである。

340) 『原初年代記』1051年の項に洞窟修道院創建の物語があり、修道院長ヴァルラムと修道士が創始者アントニイに祈願して、「聖母就寝の名において小さな教会を洞窟の上に建てた」とある。また1089年に「洞窟修道院の聖母教会が献堂された」とある。この修道院の主聖堂である「聖母就寝(ウスペンスキイ)教会」を指している。

341) 「スヴァトローシャ」(Святоша)は、チェルニゴフのダヴィド[C3]の息子スヴァトスラフ[C31]のことで、1106年に剃髪して、キエフの洞窟修道院の修道士になり、1143年に没している。かれがいつも立って祈っていた場所をことを指すのだろう。

342) 新約聖書『ヘブライ人への手紙』(2:13)からのほとんど忠実な引用句。

343) この幻視は全体としては、ニフォントが見た「フェオドーシイ」を「キリスト」の立場において、神がニフォントを召して、息子であり兄弟として天の会衆に加えた、と解釈することができる。

からである。神のことに献身していたからである。

〔ニフォントは〕クリム³⁴⁴⁾が、自分と一緒に奉事するよう指示したとき³⁴⁵⁾、かれにこう言った。「そなたは、聖ソフィア³⁴⁶⁾からも、聖なる大いなる公会からも、総主教からも祝福を受けていない³⁴⁷⁾。それゆえ、そなたと一緒に奉事することも、奉神礼でそなたのことを祈ることもできない、わしが祈るのは総主教のことだけである」。この者〔クリメント〕は、かれ〔ニフォント〕と争って、かれのことをイジャスラフ [D112:I] と自分の仲間たちに訴えたが、如何ともすることはできなかった。

総主教³⁴⁸⁾はかれに文書を遣って、かれを誉め讃え、聖人に匹敵するとした。かれ〔ニフォント〕は、さらに力を得て、総主教の文書に従うようになった。

かれ〔ニフォント〕は、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] の寵愛を受けていた。スヴァトスラフ [C43] はかれ〔ニフォント〕がいないときにノヴゴロドに座したからである³⁴⁹⁾。

344) 前府主教「スモレンスク人クリメント」(Климент Смолятич)のこと。「クリム」はその卑称。1147年、イジャスラフ [D112:I] は自身の一存で、ザループの修道士だったクリメントを府主教に任じた。ニフォントは、この決定に反対する主教のうちの一人だった。〔イパーチイ年代記〕(3)、注70。

345) この段落では、1147年の、イジャスラフ [D112:I] とルーシの主教たちによるクリメントの府主教擁立直後のことを回想している。

346) コンスタンティノポリスのハギア・ソフィア聖堂で叙任式を受けることを指している。〔イパーチイ年代記(3): 341頁〕(1147年の記事) 参照)

347) ふつうキエフの府主教に任じられるとき、当該の修道僧はコンスタンティノポリスの聖ソフィア大聖堂で総主教の按手礼によって叙任されることになっていた。府主教クリムがそれを行わずに府主教の座にあったことを指している

348) 1147年12月にコンスタンティノポリス総主教の座に着いたニコラオス四世(在位1149-1155年)を指すと考えられる。

349) この記述は不思議である。年代記の資料で見ると、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] とニフォントの関係は、決して友好的なものではなかった。スヴァトスラフは、1136年7月～1138年4月、1139年12月～1141年2月と二度ノヴゴロド公になっているが、最初の期間には、ニフォントは、追放された前の公セヴォロド [D111] を支持するノヴゴロドの勢力の後ろ盾となって、就任以来スヴァトスラフに圧力をかけ続けていた。1137年にスヴァトスラフが、おそらくノヴゴロド人の女性と結婚したとき、教会法上の理由をつけてこれを妨害している(『ノヴゴロド第一年代記』6644(1136)年の項)。また、1139年の二度目の就位の際にも、ニフォントが率いる使節団が当時のキエフ公セヴォロド [C41] に対して、「われらにそなたの息子〔スヴァトスラフ [C411:G]〕を与えよ。そなたの兄弟のスヴァトスラフ [C43] は望まない」(『イパーチイ年代記(2)』: 322頁)と語っており、ニフォントは反スヴァトスラフ派のままであったことは確かである。リュバコフは、この部分は、洞窟修道院の年代記記者が、両者の関係を「理想化」した結果しているが[Рыбаков 1972: С. 46]、本文の「スヴァトスラフ [C43] はかれ〔ニフォント〕がいないときにノヴゴロドに座したから」という「寵愛」(любовь)の理由付けがよく分からない。

なお、マフノヴェツはウクライナ語訳の注釈で、「ノヴゴロド」を「ノヴゴロド・セヴェルスキイ」と解釈し、1147年の城市攻防戦のときのことを言っているとしているが、この個所はノヴゴロド主教への讃辞なのだから、この解釈には無理がある。

この年、イジャスラフ [C35] の甥である〔スヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ³⁵⁰⁾ [C341] が、ベレゾイ³⁵¹⁾ (Березой) から逃げ出して、ヴシチジ³⁵²⁾ (Вщижь) へと行った。そして、かれ〔スヴァトスラフ [C341]〕はかれ〔イジャスラフ [C35]〕から、デスナ川流域のすべての城市³⁵³⁾、そしてフセヴォロジ³⁵⁴⁾ (Всеволожь) を奪い取った。かれは、自分の叔父に対して行った十字架接吻〔の忠誠の誓いを〕解消する通知もせずに³⁵⁵⁾、スモレンスクの公ロスチスラフ [D116:J] の側について、自分の叔父〔イジャスラフ [C35]〕から離反した。かれ〔スヴァトスラフ [C341]〕

350) スヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] についてはこの個所が初出。この個所では、「イジャスラフの甥ウラジーミロヴィチ」(Володимиричь, сыновець Изяславль) としか記されていないが、1151 年 5 月にルート川の戦いで戦死したウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] の息子スヴァトスラフ [C341] を、伯叔父のイジャスラフ [C35] が引き取って庇護していたのだろう。

なお、ウラジーミル [C34] は、1144 年にグロドノ公フセヴォロドコ [F11] の娘と結婚しており ([イパーチイ年代記 (2): 333 頁, 注 278] 参照)、このスヴァトスラフ [C341] をこの結婚によって生まれた子と考え、この当時は 10 歳前後ということになり、若すぎるようである。ウラジーミル [C34] がフセヴォロドコの娘と結婚したのは再婚で、その前に別の女性と結婚していたのだろうか。

351) 「ベレゾイ」(Березой) は、デスナ川右岸にあった城砦で、1152 年の記事で、ユーリイ [D17] が進軍の際に立ち寄った場所として記されている (上注 140 参照)。チェルニゴフから 34km ほどと近く、その付属都市として、チェルニゴフ公イジャスラフ [C35] が、甥のスヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] に与えていたのだろう。

352) 「ヴシチジ」(Вщижь) はデスナ川上流域にあった城砦で、チェルニゴフからだと、デスナ川を北に向かって 370km ほど上った遠方で、現在のブリャンスク (Брянск) から 40km ほど上流に位置している。ほぼスモレンスク公領とチェルニゴフ公領の境界あたりにあり、位置からしても、スモレンスク公ロスチスラフ [D116:J] の庇護を求めたことは理解できる。この城砦は、1142 年の記事で ([イパーチイ年代記 (2): 327 頁] を参照)、キエフ公フセヴォロドコが、ダヴィドの二人の息子 (ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]) に与えた城市の一つとして触れられている。おそらく、それ以来ここはウラジーミル [C34] とその一族の所領になっていたのだろう。伯叔父イジャスラフ [C35] と反目したスヴァトスラフ [C341] は、遠方にあった一族の領地へと逃げ込んだことになる。

353) ベレゾヴォイからヴシチジへ向かうには、デスナ川を長い距離遡ることになるので、その途上を守りの手薄なデスナ川流域の城市 (チェルニゴフ公イジャスラフ [C35] あるいはノヴゴロド・セヴェルスキイ公スヴァトスラフ [C43] の支配下にあった) を次々と掠奪していったのだろう。

354) 「フセヴォロジ」(Всеволожь) は、デスナ川からはやや離れるが、チェルニゴフから南東約 65km に位置し、1147 年の記事のイジャスラフ [D112:I]、ムスチスラフ [D116:J] 対ダヴィドの息子たちとの抗争の描写の中で、チェルニゴフ公領の城市として言及されている ([イパーチイ年代記 (3): 359 頁, 注 158] 参照)。当時は、イジャスラフ [C35] が支配する有力な付属城市だったのだろう。

355) スヴァトスラフ [C341] がベレゾイから逃げ出し、その際に叔父のイジャスラフ [C35] に忠誠の誓いの解消通知もしなかったのは、あとの記事に見るように、イジャスラフ [C35] がキエフ公ユーリイ [D17] の命令で、ポロヴェツとの和議に同行していたからである。スヴァトスラフ [C341] は叔父の不在中に反旗を翻したことになる。

のもとには、スタロドゥーブから³⁵⁶⁾、ムスチスラヴィチ³⁵⁷⁾がやって来て〔城市の〕守りについた³⁵⁸⁾。

その頃、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] は、自分の叔父のウラジーミル [D115] を討つべく、ヴラジミルへに急襲を仕掛けた³⁵⁹⁾。そして、かれ〔ウラジーミル [D115]〕の妻³⁶⁰⁾と母親を捕らえ、二人を馬車に乗せると、ルチェスク³⁶¹⁾へと連れて行った。かれ〔ムスチスラフ [I1]〕の叔父のウラジーミル [D115] は、ペレムィシエリへと逃れた。かれ〔ウラジーミル〕の従士たちは身ぐるみ剥がされ、(ウラジーミル [D115] の妻³⁶²⁾) がハンガリーから持参した財産はすべて倉庫から掠奪された。ウラジーミル [D115] は、そこからハンガリーへ、姉妹の夫の〔ハンガリー〕王³⁶³⁾のもとへと逃げた。

その後、ユーリイ [D17] が、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] とスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] を引き連れて、ザループ³⁶⁴⁾ へ向かい、そこでポロヴェツ人と会合した。そして、

356) スタロドゥーブからヴシチジまでは、北東へ 135km ほど行軍すれば到達する。

357) 原文は「ムスチスラヴィチ」(Мьстиславичь) だけだが、これについては二つの可能性があり得る。第一は、文脈から考えて、これを「ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ」[D116:J] とするものだが、そうすると、チェルニゴフ公領内の「スタロドゥーブから」スモレンスク公であるロスチスラフ本人が駆けつけるのは奇妙である。第二の解釈は、「ムスチスラヴィチ」は「フセヴォロドヴィチ」の誤記とするものである。実際、当時スタロドゥーブには、ユーリイ [D17] と和解したスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] がいた可能性が高く、また、あとの記事から、叔父に逆らったスヴァトスラフ [C341] はスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] と一緒に行動していることから、状況的に辻褄が合う。どちらかと言えば、第二の解釈の可能性が高いのではないか。

358) 「やって来て、守りについた」城市は、おそらくヴシチジだろう。

359) 上の記事(上注 335)にあるように、ユーリイ [D17] のキエフ公就位にともなって、キエフ城内の館を明け渡したムスチスラフ [D11] の未亡人は、息子のウラジーミル [D115] に伴われて老後の住処としてハンガリーへと向かった。その旅行の途上でウラジーミル [D115] の拠点都市であるヴォルィニのヴラジミルに立ち寄ったときに起こった事件である。

360) ウラジーミル [D115] は 1150 年にハンガリーの地方長官(бан)の娘と結婚し、新婦はヴラジミルへと輿入れしている。[イパーチイ年代記(4): 347 頁(注 134)] 参照。

361) ユーリイ [D17] の息子グレーブ [D178] に、妻とともにベレヤスラヴリを追われたムスチスラフ [I1] は、この城市を拠点としていた。(上注 63 参照)

362) 丸括弧内は原文では「ムスチスラフの妻」(Мьстиславля) となっているが、これは明らかに「ウラジーミルの妻」の誤記である。かの女は 1150 年にヴラジミルに輿入れして以来、この城市で暮らしており、その宮廷には、ハンガリーからの多くの嫁入り道具、持参品があったはずである。

363) ウラジーミル [D115] の姉妹エフロシーニャは、ハンガリー王ゲーザ二世に嫁いでいる。

364) 「ザループ」(Заруб) はドニエプル川をはさんでベレヤスラヴリの対岸(右岸)にある渡河地点。前回ポロヴェツ人との和議に臨んだカーネフからは近く、25km ほどしか離れていない。

かれら〔ポロヴェツ人〕と和を結んだ。かれらはおびたしい数だった³⁶⁵⁾。

イジャスラフ [C35] は、かれら〔ポロヴェツ人〕を引き連れて、自分の甥 [スヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341]] と、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] を討つべく、かれらとともにベレゾイ (Березой) へと進軍した³⁶⁶⁾。

【485】 他方、ユーリイ [D17] は、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] を連れて³⁶⁷⁾、キエフへ向けて出発した。

その時、府主教コンスタンチンが帝都からやって来た³⁶⁸⁾。ユーリイ [D17] 公は、かれを大いなる名誉をもって迎え入れた。ポロツクの主教³⁶⁹⁾も、クリメントの前からは逃げていたスモレンスクの主教マヌイル³⁷⁰⁾も〔迎え入れた〕。このようにして、クリメントが定めた奉事〔の規則〕と〔クリメントの手による〕叙任は廃止された。奉神礼が執り行われ、〔新しい府主教の〕祝福が、ユーリイ・ウラジーミロヴィチ [D17] に与えられた。それから、クリメントが叙任した輔祭たちが解任された。なぜなら、府主教³⁷¹⁾はかつて、かれ〔クリメント〕に対して、クリメントに反対する手書きの文書を書いたからである。

365) 前回のカーネフでの交渉では「少人数」だったので、今回は「おびたしい数」のポロヴェツ人を引き連れて、その威力を背景に和議を行い、おそらくポロヴェツ側に満足できる条件で和を結んだのだろう。

366) この段落は、チェルニゴフ公イジャスラフ [C35] と甥スヴァトスラフ [C341] の反目の記事（上注 351 参照）とつながっている。甥スヴァトスラフ [C341] の離反とデスナ川の城市の掠奪、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] の甥への加勢についての報告を聞いたイジャスラフ [C35] は、急速ポロヴェツ人に援軍を依頼し、かれらを率いてベロゾイへ駆けつけたと考えられる。記述はないが、その後、ポロヴェツ人とともに、ヴシチジ方面へ向けて討伐遠征を行ったと考えられる。

367) ユーリイ [D17] は、すぐ後に行われる、ヴラジミルへのムスチスラフ [I1] 討伐遠征に、スヴァトスラフ [C43] を伴う予定だったのだろう。

368) 上の主教ニフォントの死の物語の記述から推定して、1156年3月末～4月初めにはすでにコンスタンティン府主教がコンスタンティノポリスを出発していたとすれば、キエフには夏には到着していたと考えられる。

369) 当時のポロツク主教は、コジマ (Козьма) であり、1143年に叙任されている。[イパーチイ年代記 (2) : 330 頁] 参照。

370) マヌイルは、年代記中で言明はされないものの、[イパーチイ年代記 (3) : 341 ページ, 注 70] で指摘したとおり、ギリシア出身の僧で、クリメントの府主教位への着座にはニフォントとともに反対していた。

371) クリメントの前任者の府主教ミハイルのことだろう。ギリシア人のかれは、1131年にコンスタンティノポリスからキエフへと赴任し、キエフ大公イジャスラフ [D112:I] の介入を受けて1146年にはキエフを去って帰国している。次の「手書き文書」(рукописание) は、1147年のクリメント府主教叙任の騒動の際に、帝都からクリメント反対派に対して送られ、叙任の手続きの違反を指摘した私信と考えられる。

この年³⁷²⁾、スヴァトスラフ³⁷³⁾ [C43] は、自分の兄弟のイジャスラフ [C35] のところに行き、そして、ムスチスラヴィリ³⁷⁴⁾ (Мьстиславль) で陣営を張っ〔て包囲し〕た。そして、〔二人は〕自分の〔二人の〕甥たち³⁷⁵⁾ と和を結んだ。そして、〔二人は〕帰国した。

6665 [1157] 年

ユーリイ [D17] は、自分の娘婿のガーリチのヤロスラフ [A1211], **[486]** 自分の息子たち、ウラジーミル・アンドレエヴィチ³⁷⁶⁾ [D181], ベレンディ人たちを引き連れて、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] を討つべく、ヴラジミルへと進軍した³⁷⁷⁾。

イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] とスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] の二人は、ユーリイ [D17] とともに遠征することを望んでいた。しかし、ユーリイ [D17] は二人を連れていか

372) この段落の記事は、イジャスラフ [C35] と甥のスヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] (上注 350 を参照) との抗争に関する上の記事の続きと考えるべきである。つまり、離反したスヴァトスラフ [C341] に対するイジャスラフ [C35] たちの討伐遠征の記事である。

373) ユーリイ [D17] に伴われてキエフまで同行したスヴァトスラフ [C43] は、あとの記事にあるようにユーリイ [D17] のウラジミルへの遠征には参加せず、その代わりに、イジャスラフ [C35] を支援するために、その甥スヴァトスラフ [C341] を討伐する遠征に援軍として参加したと考えられる。記述はなされているが、このイジャスラフ [C35], ポロヴェツ人, スヴァトスラフ [C43] からなる遠征軍は、スヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] とスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] を追って、遙かムスチスラヴリ (次注 374) まで到達したのだろう。

374) 「ムスチスラヴリ」(Мьстиславль) は、ソジ川(Сож) 上流の支流ヴィフラ川(Вихра)の右岸に位置する城砦で、現代のベラルーシの都市ムスチスラウ(Мсціслаў)に相当する。1135年にロスチスラフ公 [D116:J] が、父ムスチスラフ公 [D11] にちなんで名付けたとされている [C9-1: C. 771-772]。スモレンスク公領に属しており、スモレンスクからだど、南南西に約 88km 離れている。

前注にあるように、叔父イジャスラフ [C35] から離反してヴシチジに拠点を置いたスヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] は、二人の叔父の討伐遠征軍に追われてヴシチジから逃げ出し、同盟したロスチスラフ [D116:J] の支配地であるムスチスラヴリに立て籠もったのだろう。しかし、叔父たちやポロヴェツ人の大軍の威力の前に降伏して、叔父イジャスラフ [C35] に対する忠誠を再び誓った(「和を結んだ」と考えられる(下注 405 参照))。

375) 「〔二人の〕甥たちと」(съ сыновцема своим)のうち一人はヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] で、もう一人はおそらくスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] だろう(上注 357 を参照)。

376) 1153年の記事では(上注 196 参照)、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] はベレスチエ(Берестье)の公をしており、この遠征のときにも、この城市の支配公だっただろう。ここからだど、120km ほど南下するとヴラジミルへ到達する。

377) 『ラヴレンチイ年代記』の6664(1156)年の並行記事では、「その年の冬」とある。『イパーチイ年代記』では6665(1157)年記事の冒頭にあることから、1157年の初めの2月～3月頃に遠征が行われたのだろう。

なかった。それは、ガーリチ〔公〕の自分の婿〔ヤロスラフ [A1211]〕の「かれら二人はヴラジミルを獲得しようとしている」との進言を聞いて、これを信じたからである。それゆえに、かれら二人を連れて行くことはなかった。

ユーライ [D17] は、ヴラジミルを自分の〔所領〕として要求してはいなかったが、自分の兄弟のアンドレイ [D18] が生きていたときに、かれに対して、自分が生きている間にはかれの息子に、これ〔ヴラジミル〕を領地として保持させるという十字架接吻〔の誓い〕をしていた³⁷⁸⁾。その後、ウラジーミル・アンドレイヴィチ [D181] に対しても、かれのためにヴラジミルを要求することを十字架接吻〔で誓って〕いた³⁷⁹⁾。それゆえに、ウラジーミル [D181] のために、ヴラジミルへ向かって進軍を始めたのである。

ユーライ [D17] は、ガーリチのヤロスラフ [A1211] と、スヴィヌーヒ³⁸⁰⁾(Свинухи)村で合流し、そこから、二人はヴラジミルへと軍を進めた。そして、フヴァリミチ³⁸¹⁾(Хвалимичий)で陣を張った。その場所の二人のもとへ、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] がハンガリーからやっ

378) 1118/1119年にモノマフ公は息子アンドレイ [D18] をヴォルィニのヴラジミルに派遣し、その公支配を委ねた。その後長く統治していたが、1135年に当時のキエフ公ヤロポルク [D15] の指示によって、アンドレイ [D18] がベレヤスラヴリへと移され、その代わりにヴラジミルは、甥にあたるイジャスラフ [D112:I] に与えられた〔イパーチイ年代記(2):310頁〕。ここでユーライ [D17] は、その時のことを持ち出しているのである。

その後、この時点(1157年)まで、ヴラジミルの公座はモノマフ一族の諸公にたらい回しされていたが(1141～1146年に一時的にスヴァトスラフ [C411:G] が支配している)、アンドレイの息子ウラジーミル [D181] の手に渡らず、かれはより国境に近い小城市ベレスチエの公に甘んじざるを得なかった。ウラジーミルにとっては不本意な状態だったと思われる。

ここでやっているユーライ [D17] の誓約(十字架接吻)については、年代記の記録にはないが、1135年当時ベレヤスラヴリの公座をめぐるアンドレイ [D18] と争っていたユーライ [D17] が、ベレヤスラヴリの公座を得る条件として、ヴラジミルをアンドレイ [D18] 一族の所領と認める約束をしたであろうことは、十分に考えられる。

379) これについて具体的な記録はないが、1140年代半ばから1157年にかけてのユーライ [D17] とイジャスラフ [D112:I] の間のキエフ公位を巡る長い抗争の中で、同盟者を得るためにユーライがこのような誓約(十字架接吻)を行ったことは考えられる。

380) 「スヴィヌーヒ」(Свинухи)は、ヴォルィニ地方、スヴィノリイスカ川(西ブーク川の支流であるルーク川の支流)の上流左岸にあった村で、現在のプリヴィトネ村(Привітне)に相当する。ヴラジミルからだ南東へ約36kmと近い位置にある。また、ガーリチからだこの村まで北へ168kmほど遠征しなければならない。

381) 「フヴァリミチ」(Хвалимичи)は、ヴラジミルの城市から南東へ6kmほどのごく近くにあるルガ川沿いの村の名で、現在のファレミチ(Фалемичі)村周辺に相当する。

て来た³⁸²⁾。そこからかれらは城市に向かって突撃を始めた。土曜日だった。矢を射撃し合いながら兵站の天幕までたどり着いた。翌日の日曜日、輜重車³⁸³⁾とともに城下に向けて出発した。城下に着くと城市を包囲して布陣した。ユーレイ [D17] は、グリドシニイ (Гридшиния) 門³⁸⁴⁾のところに陣を張り、ヤロスラフ [A1211] は河川敷のキエフ門³⁸⁵⁾のところに陣を張った。

ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D118] は、自分も掠奪に行きたいと〔ユーレイに〕頼み始め、ユーレイは【487】かれを〔チェルヴェンに〕行かせた。かれ〔ウラジーミル [D118]〕はチェルヴェン³⁸⁶⁾ (Червен) へと進軍した。チェルヴェン人は城市の中に立て籠もった。ウラジーミル [D118] は、城下に近づいて、次のように〔チェルヴェン人に向かって〕言い始めた。「わたしは、そなたたちと戦争をするために来たのではない。なぜなら、そなたたちは、わが父〔アンドレイ [D18]〕が慈しんだ者たちなのだから。わたしは、そなたにとって公の息子なのだ。さあ、門を開くがよい」。

一人の男が城内から矢を射て、かれ〔ウラジーミル [D181]〕の喉元に当たった。しかし、神はかれ〔ウラジーミル〕を死から免れさせた。(〔矢の〕力が弱く、鎧を貫通しなかったのである)³⁸⁷⁾。かれ〔ウラジーミル [D181]〕は怒りを発し、〔城市を〕攻略して、大がかりな掠奪を命じた。

さて、ユーレイ [D17] は、ヴラジミルの城下で、10日間包囲の陣を構えていた。両軍の間で多くの血が流され、ある者は負傷して死にかけていた³⁸⁸⁾。ユーレイ [D17] は〔ヴラジミル人が〕自分に屈しないことを見て取ると、人が死んでいくのを哀れみ、自分の子供たちと自分の貴族たちに向かって、こう言った。「われらはここで布陣していることはできない。なぜなら、かの者〔ムスチスラフ [I1]〕は、わしより年下であるのに、わしに屈服しようとしなからだ。わたしは、かの者が戦いで死ぬことも、追放することも喜ばない。わたしはこう言った。『かれ〔ム

382) ウラジーミル [D115] は所領のヴラジミルをムスチスラフ [I1] に占領、掠奪されて、ベレムイシェリ経由でハンガリーへと逃げていた (上注 362 参照)。

383) 城市包囲戦に必要な物資を持ってという意味。

384) 従士たちの「居館」(гридница) が近くにあったことから名付けられた門と考えられる。

385) キエフに通じる西方向にあり、ルーグ (Луг) 川の川岸近くの門のこと。

386) 「チェルヴェン」(Червен) は、ヴラジミルから南西へ約 49km 離れたポーランド国境周辺の城市。現在のポーランドのザモイスキ県チェルムノ村 (Czermno) に相当する。

387) 丸括弧内は『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の並行記事による補足。

388) この戦闘については『ラヴレンチイ年代記』の並行記事 (6664(1156) 年の項) にムスチスラフ [I1] から見た記述がある。それによると「ムスチスラフ [I1] は大勢の軍隊を目にすると、かれらに抵抗する力がなかったため、城内に立て籠もり、〔折を見ては〕城を出て戦った」とある。

スチスラフ]に、かれの兄弟たちと同様に³⁸⁹⁾、十字架接吻〔の誓い〕をさせよう』。ところが、かれ〔ムスチスラフ〕はそれさえも望まず、流血を喜んでいるのだ』。

ユーリイ [D17] は自分の子供たち、自分の家臣たちと評議をして、キエフに帰還することにした。かれの娘婿〔ヤロスラフ [A1211]〕も、自分の領地であるガーリチへと戻った。こうして、一同は、和を結ぶこともなく、それぞれの領国へと帰っていったのである。

ムスチスラフ [I1] は、かれ〔ユーリイ [D17]〕の後を追ってドロゴブージ³⁹⁰⁾ (Дорогобуж) へと軍を進め、村々を掠奪し、焼き、多くの悪行をなした。

ユーリイ [D17] はドロゴブージまでやって来ると、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] に向かってこう言った。「息子よ **[488]**、わしは、そなたの父で自分の弟にあたるアンドレイ [D18] とともに十字架に接吻して、二人のうち生き残った者は、二人の子供たちの〔共通の〕父親となり、〔子供たちの〕所領を守ることを〔誓った〕。その後、わしはそなたに十字架接吻して、そなたを自分の子とすること、そなたのためにヴラジミル〔の城市の領有を〕要求すること〔を誓った〕。息子よ、今、わしはヴラジミルを獲得することができなかった。そこで、見よ、これを領地とするがよい」。こうして、〔ユーリイ [D17] はウラジーミル [D181] に〕ドロゴブージ、ペレソプニツァとゴルイナ川流域の諸城市を与えた。また、自分の息子のボリス [D170] にはトゥーロフ³⁹¹⁾ を与えた。

その頃、〔ユーリイは〕ベルラドニク (Берладник) と呼ばれていたイワン・ロスチスラヴィチ³⁹²⁾ [A1221] を、鎖を付けたまま、スーズダリから送り出して、自分の娘婿のヤロスラフ [A1211]

389) ユーリイ [D17] が 1155 年にキエフの公位に就いたときに、諸公と和を結び、十字架接吻によって自分への忠誠を誓わせたことを指している。

390) 「ドロゴブージ」(Дорогобуж) は、ゴルイナ川中流左岸に位置するヴラジミル公領の中の主要城市の一つ。ウラジーミルからだトルチェスクを経由して東方向に 160km ほど離れている。当時は、キエフ公 (ユーリイ [D17]) の支配下に入っていたのだろう。

391) ユーリイ [D17] は 1155 年 3 月キエフ公になった直後に、息子のボリス [D170] にトゥーロフを与えており、年代記記事にも記されている (上注 287 参照)。この記述は編集の際に生じた内容のダブリということだろう。

392) イワン・ベルラドニク [A1221] は、1144/1145 年の冬に、叔父ウラジミルコ・ヴォロダレヴィチ [A121] の所領ズヴェニゴロドの占領に失敗して逃亡した。その後、フセヴォロド [C41]、スヴャトスラフ・オリゴヴィチ [C43]、ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ [D116:J] 等の庇護を受けながら転々と居所を変え、1148 年にはスーズダリのユーリイ [D17] のもとに身を寄せて、かれのために働いている (『ノヴゴロド第一年代記』の 1149 年の項には、ユーリイ [D17] が配下のイワン・ベルラドニク公 [A1221] をノヴゴロドに派遣したとある [Новгородская первая летопись: С. 28]。この時点でも、おそらくイワンはユーリイ [D17] の下にいたのだろう。

に身柄を預けることにした³⁹³⁾。すでに、ヤロスラフ [A1211] は、スヴャトポルク公³⁹⁴⁾ とコンスタンチン・セロスラヴィチ³⁹⁵⁾ (Сърославич) に従士団を率いさせて、ベルラドニクを引き取るために派遣していた。

ところが、府主教〔コンスタンチン〕と〔キエフの修道院の〕典院たちが、ユーリイ [D17] に向かって次のように言い始めた。「これは罪ですぞ。あなたは、かれ〔イワン・ベルラドニク〕に対して十字架接吻をして、このような災難からは守るという〔誓いをした〕にもかかわらず、かれを引き渡して殺させようとしている」。かれ〔ユーリイ〕はかれらの言葉を聞き入れて、かれ〔イワン・ベルラドニク〕を、鎖を付けたまま、再度スーズダリへと連れ戻そうとした。

イジャスラフ [C35] は、ユーリイ [D17] がかれ〔イワン・ベルラドニク〕を再びスーズダリへと連れ戻そうとしていることを知ると、これを妨害するために家臣たちを派遣し、かれ〔イワン・ベルラドニク〕を途中で捕まえて、自分のチェルニゴフへと連れて来させた。

こうして、神はイワン [A1221] を大きな災難から免れさせ給うたのだった。

6666 [1158] 年

イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] は、ユーリイ [D17] を討つための戦争を画策し始めた。かれ〔イジャスラフ〕は、ロスチスラフ・ムスチスラフ [D116:J] と **【489】** 和を結んで味方につけ、また、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] とスヴャトスラフ・オリゴヴィチ [C43] と密かに話し合っ、ユーリイ [D17] を討伐しようとした。

しかし、スヴャトスラフ [C43] は言った。「われらは、かれ〔ユーリイ〕に十字架接吻〔で誓っ

393) ユーリイ [D17] は、ガーリチ公のヤロスラフ・ウラジミルコヴィチ [A1211] と姻戚関係 (1150 年) を含めた緊密な同盟を結び、また今回のヴラジミル遠征でヤロスラフ [A1211] の協力を得たことから、ヤロスラフ [A1211] の要求に応じて、ヤロスラフの敵であるイワン [A1221] の身柄を拘束し、かれに引き渡すことに同意したのだろう。

394) マフノヴェツのウクライナ語訳注釈によれば、この「スヴャトポルク公」(Святополк князь) は、ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] の息子であるスヴャトポルク・ユーリエヴィチ [D3213] のこととしている。ユーリイ [B321] がフセヴォロドコ [F11] の娘と結婚したのは 1144 年であることから、年長の子であったとしても当時はまだ 13 歳程度となり少し若すぎるが、他に「スヴャトポルク」の名を持つ公はなく、この頃父子ともにヤロスラフ [A1211] のもとに身を寄せていたと考えることも可能である。

395) 「コンスタンチン・セロスラヴィチ」(Кстянин Сърославич) は、重大な任務を任せられていることからガーリチの上級貴族であろう。1172 年の記事にも、ムスチスラフ [I1] を支援するガーリチの援軍部隊の指揮者として、1173 年には公妃とともにポーランドに逃亡した人物として言及されている。[C3-1: C. 623]

て] いるではないか。何の理由もなく、かれ〔ユーリイ〕を討つために兵を挙げることは、わしにはできない」。

こうして、かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕は加わらず、イジャスラフ [C35] は、ロスチスラフ [D116:J] とムスチスラフ [I1] とともに、ユーリイ [D17] 討伐の遠征を開始した。ロスチスラフ [D116:J] は、自分の息子ロマン [J1] を自分の部隊とともに派遣した。ムスチスラフ [I1] はヴラジミルから出発した。

イジャスラフ [C35] は、キエフへと向かおうとした。その日、イジャスラフ [C35] のもとにキエフ人たちが〔使者として〕やって来て、こう言った。「公よ、キエフへ来たれ。ユーリイ [D17] は死にました」。

かれ〔イジャスラフ [C35]〕は涙を浮かべ、両手を神に向かって挙げるとこう言った。「主よ、汝は祝福されてあれ。汝はわたしとかれ〔ユーリイ〕との裁きを、流血によってではなく、〔ユーリイの〕死によって決着させてくれました」。

ユーリイ [D17] は、(5月10日に)³⁹⁶⁾、徴税官³⁹⁷⁾ ペトリロ (Петрило) のもつて酒を飲んだあとで、その日の夜に病みついた。5日間病に伏せた後に、キエフの公ユーリイ・ウラジーミロヴィチ [D17] はキエフで逝去した。5月15日水曜日³⁹⁸⁾ の夜だった。翌日の木曜日にかれの遺体は聖救世主修道院³⁹⁹⁾ に安置された。

この日、多くの悪行がなされた。かれ〔ユーリイ〕のクラスヌイ館⁴⁰⁰⁾ と、ドニエプル対岸にあり、かれ自身が〈天国〉(Рай) と呼んでいた館が掠奪を受けた。かれ〔ユーリイ〕の息子ヴァ

396) 丸括弧内は『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の並行記事による補足。

397) 「徴税官」(осменик; осмни к)とは、都市内の警察業務や裁判、取引税の徴収などを行う都市の高官のこと [Андреев 2013: С. 118]

398) これは、1157年の5月15日を指し、確かに水曜日に相当する。

399) キエフの聖救世主修道院 (монастырь святого Спаса) は郊外のベレストヴォ村にあり (『ラヴレンチイ年代記』の並行記事ではその旨が記されている)、フセヴォロド [D] もしくはウラジーミル・モノマフ [D1] の手で教会 (修道院) が創建されたと考えられ、モノマフ公の娘たちが埋葬されていた。ユーリイ [D17] が公としてキエフに滞在した期間は短く、一族のための「菩提寺」を建てる余裕はなかったことから、父親モノマフ公にゆかりのある教会に遺体が安置されたのだろう。

400) 「クラスヌイ館」は、キエフの丘の南の森の中、ミハイル・ヴィドピツキイ修道院の隣にあったと想定される公の居館で、ユーリイ [D17] がキエフで拠点としていた。[イパーチイ年代記(4): 356頁, 注173] も参照。

シリコ [D174] の館⁴⁰¹⁾も〔掠奪された〕。城内でも掠奪が起こり、スーズダリ人たち⁴⁰²⁾が城内や村で撃ち殺され、かれらが備蓄していた物資が奪い取られた。

【490】 イジャスラフ [C35] のキエフにおける公支配の始まり。

イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] は、五旬節の日曜日にあたる5月19日⁴⁰³⁾にキエフに入城した⁴⁰⁴⁾。自分の甥のスヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] を、すべての自分の部隊とともにチェルニゴフに残した⁴⁰⁵⁾。

スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] とともにチェルニゴフにやって来た⁴⁰⁶⁾。すると、〔スヴァトスラフ・〕ウラジーミロヴィチ [C341] は、かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕を城内に入れようとせず、かれと戦おうとし始めた。スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は、自分の甥の〔スヴァトスラフ・〕フセヴォロドヴィチ [C411:G] とともにこのことを見て取ると、〔チェルニゴフの〕城市をしばらく離れて、スヴィナ⁴⁰⁷⁾ (Свина) 川の対岸に陣を構えた。

401) ヴァシリコ [D174] は、1155年に父ユーレイ [D17] がキエフ公になったときに、「ロシ川河岸地域」に領地を与えられたが、実際にはキエフの父のもとに住んでいたのだろう。はっきりとした所在は分からないが、これがキエフにおけるヴァシリコ [D174] の居館を指すと考えられる。

402) ユーレイ [D17] がキエフの公座に就いたときに、かれとその息子たちがスーズダリから引き連れて、キエフに住まわせていた従士や従者たちを指す。キエフ人にとっては外来者であり、反感を持たれていたのだろう。

403) イパーチイ写本では「5月15日」になっているが、これは明らかな誤記である。1157年の五旬節の日曜日(主日)(неделя пятидесятая)は5月19日であり、フレーブニコフ写本や『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の並行記事では「5月19日」になっている。いずれにせよ、イジャスラフ [C35] は、ユーレイ [D17] の死後四日目という、驚くべき迅速さでキエフに入城したことになる。

404) 『ノヴゴロド第一年代記』の6665(1157)年の記事には、「その春、キエフで公ユーレイ [D17] が逝去した。キエフ人はイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] を公座に据えた」として、キエフ人の意志でイジャスラフ [C35] がキエフの公座に就いたことが記されている(ただし、シノド写本のみ)。なお、『ラヴレンチイ年代記』にはイジャスラフ [C35] のキエフ公就位についての記事はない。

405) スヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] は、1156年の年末に、叔父イジャスラフ [C35] から離反してデスナ川周辺を占領しようとしたが(上注350, 353を参照)、イジャスラフ [C35] が討伐遠征を行っていた。この記述を見ると、その結果、スヴァトスラフ [C341] は十字架接吻をして再び叔父のもとに戻ったということだろう(上注374参照)。

406) イジャスラフ [C35] (とその代官となったスヴァトスラフ [C341]) に対して、チェルニゴフの引き渡しを迫ったのである。

407) 「スヴィナ川」(Свина) は、注141, 151の「スヴィニ川」(Свинь)と同じ。チェルニゴフとスノフ(Снов)川の間を流れ、デスナ川に注ぐ河口はチェルニゴフから12kmほどしか離れていない。

イジャスラフ [C35] が自分の部隊を率いてキエフから〔スヴィナ川の方へ〕やって来た。ムスチスラフ・イジャスラヴィチ⁴⁰⁸⁾ [I1] も、スヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] もかれ〔イジャスラフ [C35]〕とともにいた。かれらは〔スヴィナ〕川の〔敵の〕反対側に陣を構えた。そして、互いに軍使を派遣し始めた。

このようにして、和が結ばれ、互いに十字架接吻をして〔誓った〕。その結果、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] には、チェルニゴフが与えられた。〔スヴァトスラフ・〕フセヴォロドヴィチ [C411:G] には、ノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕が与えられた。こうして、イジャスラフ [C35] は、妃と子供たちと全ての従士たちを伴って、自分のキエフへと向かった。こうして、〔諸公は〕解散した。

この年、イジャスラフ [C35] は、ポロヴェツ人との会合のために、カーネフ (Канев) へ行った。そしてそこで、かれらと和を結んだ⁴⁰⁹⁾。そして、キエフへ戻って来た。

この年、ロストフ人、スーズダリ人、ヴラジミル人〔クリャジマ河畔の〕は評議して、ユーリイ [D17] の年長の息子アンドレイ [D173] を受け入れ、かれを父の、ロストフ、スーズダリ、ヴラジミル〔クリャジマ河畔の〕の公座に据えた。なぜなら、かれ〔アンドレイ〕は、**[491]** そのいとも高き徳ゆえに皆から敬愛されていたからである。かれは、なによりも神に対して、また自らの下にいる全ての者たちに対して徳を示していた。

それゆえに、〔アンドレイは〕自分の父の死後、〔父親を〕記念すべき大いなる事業をなした。すなわち、教会を〔壁画で〕飾り、修道院を建立し、かれの父親が定礎した石造りの聖救世主

408) ここでは、ムスチスラフ [I1] の名が、キエフ公となったイジャスラフ [C35] の同盟者として突然現れるが、このイジャスラフ [C35] のキエフ公就位から1年ほどして、『ラヴレンチイ年代記』6666(1158)年の記事に、1158年/1159年の冬に「ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] がイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] を追放した」とある。「**追放した**」(выгна)と言うからには、それまでの間は、ムスチスラフはイジャスラフとキエフで行動をともにしていたことが推定される。

おそらく、ムスチスラフ [I1] は、ユーリイ [D17] の死の報を聞いて、たちまち軍を率いてキエフへ駆けつけ、当面はイジャスラフ [C35] に臣従することにしたのではないか。

409) 通常、キエフ公が交代した時にはポロヴェツ人、ベレンディ人などの周辺に暮らす遊牧民と相互不可侵の約定(和議)を結んでいる。今回もその一環であろう。

教会⁴¹⁰⁾の建築を完成させた。

アンドレイ公は自身でも、ヴラジミル〔クリャジマ河畔の〕で、聖なる聖母の石造りの教会を定礎した⁴¹¹⁾。4月8日、聖使徒ロディオンの祝祭日⁴¹²⁾の火曜日のことだった。かれは〔教会に〕多くの財産、買い取った自営村⁴¹³⁾を〔与え〕、最良の村々をそこからの貢税ともども〔与え〕、自分の家畜の十分の一や商取引の〔手数料の〕十分の一も与えた⁴¹⁴⁾。教会を5つの円蓋でおおい、円蓋はみな黄金で飾り、そこに主教座を置いた⁴¹⁵⁾。ヴラジミル〔クリャジマ河畔の〕の大きな城市の定礎を行った。

410) この石造りの「救世主教会」(Спас каменный), 通称「主の変容教会」(церковь Спасо-Преображения)については、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「新しいペレヤスラヴリの」(в Переяславли новѣм)という後代の補足的書き込みがなされている。これは、現在の「ペレスラヴリ」(Переяславль Залесский)のことで、ロストフから60kmほど南西に下ったところに位置している。この救世主教会は『15世紀末モスクワ年代記集成』6660(1152)年の記事によれば、ユーライイ[D17]がこの年に定礎したことになっており、5年ほどかけてアンドレイ[D173]の時代に完成したことになる。この聖堂はペレスラヴリの首座教会として現存している。

411) ヴラジミル〔クリャジマ河畔の〕における聖母就寝教会の建築については、先の、1154年の注326も参照。

412) これは1158年の4月8日の火曜日のこと。七十人聖使徒のひとりロディオン(もしくはイロディオン(Иродион))の祝祭日が4月8日だったことは、11～12世紀に通用していた奉事暦(Служебный миней)の記載からも確認することができる。[Полный месяцеслов: С. 484]

413) 「買い取った自営村」(свободи купленья)とは、古くから所有している所領ではなく、公が新たに取引によって所有した村ということ。「自営村」(свобода)は何らかの職能がある住民が居住しており、貢税などが免除されている比較的豊かな村を指している。

414) この「十分の一」(десятина; десятый)というのが、『原初年代記』996年の記事で、ウラジーミル聖公[06]が自分の財産と城市の貢税から十分の一を主聖堂に与えると定めた、領主の教会に対するいわゆる「十分の一税」に相当する。聖公が定めたとして伝来している「ウラジーミルの教会規定」にも規定されている。本記事の「商取引の十分の一」(торгъ десятый)「家畜から十分の一」(десятины в стадах)の表現は、「ウラジーミルの教会規定」にもそのまま書かれており、定型的な表現だったと思われる。[宮野 2012]

415) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事には、「教会を5つの円蓋でおおい、円蓋はみな黄金で飾り、そこに主教座を置いた」の文言だけが欠けている。この頃は主教座はロストフにあり、ヴラジミル〔クリャジマ河畔の〕へ移されたのはあとのことあることから考えて、この部分は後代の補筆である可能性が高い。なお、教会の円蓋(верхи, куполы)について『ニコン年代記』などでは一つとしているが、最新の研究では、本年代記の記述通り5つだったとされている[Тимофеева 2005]。

この年、レオン (Леон) が主教として、ロストフにやって来た⁴¹⁶⁾。

この年、ノヴゴロド人が、ムスチスラフ・ユーリエヴィチ [D17j] を追放し、スヴャトスラフ・ロスチスラヴィチ [J4] を、ノヴゴロドに〔公として〕据えた⁴¹⁷⁾。

この年、ロスチスラフ・グレーボヴィチ⁴¹⁸⁾ [L52] の〔妃〕、ソフィア・ヤロスラヴナ⁴¹⁹⁾ が逝去した。

この年、イジャスラフ [C35] が、ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] を討つべく、トゥーロフ⁴²⁰⁾ へと進軍した。かれ〔イジャスラフ〕とともに、ヤロスラフ [I2] とヤロポルク・アンド

416) 『ラヴレンチイ年代記』 6664(1156) 年の記事よれば、1156/1157 年の冬に「主教ネステル (Нестерь) がルーシに行った。かれから主教座が剥奪された」とあり、『ニコン年代記』の同年の項には「ロストフからロストフ主教ネステルが、キエフのキエフ及び全ルーシ府主教コンスタンチンのもとに、拝礼し祝福を受けるためにやって来た。かれは、自分の従者たちから府主教に対して誣いられて、その地位を奪われた」とより詳しく記されている [ПСРЛ Т.9, 2000: С. 207]。このレオンは、解任されたネストル (ネステル) の後任として府主教コンスタンチンの手で叙任され、1158 年に赴任した主教ということになる。

417) ノヴゴロドの人は、ユーリイ [D17] の死によって、もはやその息子ムスチスラフ [D17j] に公支配を任せておく意義を失ったのだろう。『ノヴゴロド第一年代記』 6665(1157) 年の記事には、詳しい経緯が述べられている。ノヴゴロドの人々の間に紛争が起り、ムスチスラフ [D17j] に対して蜂起が起こった。流血の惨事が起きていたところに、ロスチスラフ [D116:J] の子ダヴィド [J3] とスヴャトスラフ [J4] がノヴゴロドに入って来た。その夜、分が悪いと察したムスチスラフ [D17j] は逃亡した。3 日後には、ロスチスラフ [D116:J] 自身がノヴゴロドにやって来た、というものである。おそらくこのときの協議 (和議) によってスヴャトスラフ [J4] を公として据えることが合意されたのだろう。

418) ロスチスラフ [L52] については、1151 年の項にポロツク人の手で招聘された記事があることから、当時はポロツクの公だったのだろう。

419) ロスチスラフ [L52] の妃ソフィアは、1123 年にヴラジミル城下で戦死したヤロスラフ・スヴャトボルコヴィチ [B32] の娘である。また、この直後の記事でも触れられているユーリイ・ヤロスラヴィ [B321] の姉妹にも相当する。このユーリイ [B321] は、1155 年にキエフ公になったユーリイ手長公 [D17] に仕えていたことが知られている。

420) トゥーロフは、ユーリイ手長公 [D17] がキエフ公になった直後 (1155 年)、息子のボリス [D170] に与えられていた。他方、ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] は、キエフ公になったユーリイ [D17] の命令で 1155 年にヴォルニニ地方へムスチスラフ [I1] 討伐の遠征に行っているが、報償として十分な領土をユーリイから与えられたという記録はない。おそらく、ユーリイの死をきっかけに、ボリス [D170] はトゥーロフから退去し、空白となったこの城市の公座を、ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] は新しいキエフ公の承認を得ずに乗っ取ったのだろう。それが、このトゥーロフ遠征のきっかけになったと考えられる。

レエヴィチ⁴²¹⁾ [D182] がルチェスクから、ガーリチからの援軍も、またリユーリク・ロスチスラヴィチ⁴²²⁾ [J2] がスモレンスク人とともに、またウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] が駆けつけた。かれ〔ウラジーミル [D115]〕はトゥーロフを要求していたからである⁴²³⁾。また、ポロツク人もまた、トゥーロフにやって来て、周囲の村々を焼いた。ベレンディ人たちはピンスク⁴²⁴⁾ (Пинескъ) の周辺やプリピャチ川 **[492]** の対岸で掠奪を行った。

激しい戦いが行われ、〔トゥーロフの〕城内からも出撃して、多くの者が負傷した。ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] は、城内からイジャスラフ [C35] のもとに軍使を派遣して、何度も懇願を行い、「兄弟よ、わたしの和解の申し出を受け入れて下さい」と言った。イジャスラフ [C35] はこれを望まず、何としてもトゥーロフとピンスクを支配下に置きたかった⁴²⁵⁾。そこで、10 週間のあいだ〔トゥーロフの〕城市を包囲した。

しかし、〔包囲軍に〕馬の疫病が広まり、〔イジャスラフ [C35] は〕何ものも得ることができないまま、和を結ぶこともなく、もとの場所〔キエフ〕に戻った。多くの者は〔馬を失い〕歩兵となってこの戦争から帰還した。

この年、グレーブ・フセスラヴィチ⁴²⁶⁾ [L5] の至福なる公妃が逝去した。かの女は、ヤロポルク・

421) ユーリイ [D17] は、ムスチスラフ [I1] 討伐の遠征 (1156 ~ 1157 年) のときに、ウラジーミル・アンドレヴィチ [D181] にドロゴブージ、ベレソプニツァとゴルィナ川流域の諸城市を与えており、その兄弟であるヤロポルク・アンドレヴィチ [D182] にも、そこから近いルチェスクを与えたと思われる。

422) 後にキエフの公座に就き、本年代記の成立に深く関与することになるリユーリク [J2] については、この個所が初出。当時は、父ロスチスラフ [D116:J] のもとスモレンスクにいて、父の命令によってキエフ公イジャスラフ [C35] の遠征に参加したのだろう。

423) この時点で、ウラジーミル [D115] は、甥のムスチスラフ [I1] に旧領のヴラジミルを占拠されたままであり、もはやヴラジミルは回復不可能と見たのだろう。そのため、ウラジーミル [D115] は、ユーリイ [D17] の死後、新しいキエフ公イジャスラフ [C35] に、トゥーロフを支配地として要求したと思われる。

424) 「ピンスク」(Пинескъ; Пинск) は、プリピャチ川の支流ピナ(Пина)川河口に位置する城市で、トゥーロフからはプリピャチ川を 110km ほど遡ったところにある。現在も同名のベラルーシの都市。

425) 11 世紀末頃から、トゥーロフとその周辺地はキエフ公の直轄的な性格を持っていたことから、このイジャスラフ [C35] のトゥーロフ遠征も、主に、キエフ公としての支配権を諸公に知らしめ、固めるためのものだったのではないか。ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] は、この遠征軍をはね返したことによって、トゥーロフの支配権を確立することができ、その後も 13 世紀前半に至るまで、トゥーロフはかれの一族の相続地のような性格を持つようになった。

426) グレーブ [L5] は 1119 年にミンスクを攻略したモノマフ [D1] によって捕らえられ、キエフに連行されて、まもなくそこで死んでいるが、その妃はその後も長く (40 年近く) ミンスクに居住し、実質的な支配を執っていたと考えられる。ラッフェンスベルガーは、このことを、女性が政治に関わった中世ロシアにおける希有な実例と指摘している。[Rusian genealogy: Gleb Vseslavich][Raffensperger 2016: pp. 79-80]。

イジャスラヴィチ⁴²⁷⁾[B2]の娘であり、寡婦となってから40年間生き、享年は84歳だった。〔かの女は〕洞窟修道院の聖フェオドーシイの遺骸の横、夫の公の傍ら⁴²⁸⁾に埋葬された。その逝去は1月3日⁴²⁹⁾の夜の第2時であり、4日に棺に納められた。

この至福なる公妃は、夫の公ともども、聖なる聖母と師父フェオドーシイに大いなる親愛を抱き、自分の父ヤロボルク[B2]を敬愛していた。なぜなら、このヤロボルク[B2]は自分の全ての財産を、すなわち、ネブリ⁴³⁰⁾(Небль)、デレフスカヤ⁴³¹⁾(Дервьская)、ルチェスク⁴³²⁾(Лучьск)の領地やキエフ郊外の土地を〔洞窟修道院に〕寄進した⁴³³⁾からである。

また、グレーブ[L5]は、その人生のなかで、公妃とともに、銀600グリヴナと金50グリヴナ⁴³⁴⁾を〔洞窟修道院に〕寄進した。また、公の死後に公妃は、銀100グリヴナ【493】と金50グリヴナ⁴³⁵⁾を寄進し、自分の死後には、5つの村を奴隷ともども、また一枚の布に至るまで自分の財産をすべて寄進した。

427) ヤロボルク[B2]は、キエフ大公の父(イジャスラフ[B])の下でヴィシエゴロドの公座に就いていた。1071/1072年頃にオルラミュンデ伯オットーの娘クニクンデと結婚しており、1074年頃に、将来グレーブ[L5]に嫁ぐことになる娘(公妃)が生まれたことになる。[Древняя Русь 2014: С. 917]。

428) 『イパーチイ年代記』6627(1119)年の記事によると、キエフに連行されたグレーブ[L5]は9月13日に死んでいる。その遺骸が洞窟修道院に埋葬されるに至ったのは、公妃の父ヤロボルク[B2]と修道院との深い関係(下注433)によるものだろう。ちなみに、『原初年代記』6559(1051)年の記事にあるように、洞窟修道院はヤロボルク[B2]の父イジャスラフ[B]が、アントニイ師に所領の丘と洞窟を与えたことによって創建されたものであり、それ以来、イジャスラフ[B]一族にとっては「菩提寺」のような役割も果たしていた。

429) この記事が6666(1158)年の最後に配されていることから、1159年1月3日と考えられる。

430) 「ネブリ」(Небль)は、プリピャチ川上流にある城市で、ピンスクからさらに35kmほど遡ったところにある。現在のウクライナのノベリ(Нобель)村に相当する。

431) 「デレフスカヤの領地」(Дервьская волость)は、文字どおりは「ドレヴリャネ(древляне)族が支配していた土地」を意味しており、北はプリピャチ川を境界に、スルチ川とテレレフ川の間の大広帯を示していた。当時、この地はキエフ公領に属していた。ここでは、先の「ネブリの領地」東側に隣接する一帯を指しているのだろう。

432) 「ルチェスクの領地」(Лучьская волость)は、ストイリ川河畔の城市ルチェスクを中心とする一帯を指し、先の「ネブリの領地」の南隣の一帯になる。

433) ヤロボルク・イジャスラヴィチ[B2]は1086年に臣下の裏切りによって暗殺されたが、『原初年代記』6594(1086)年のかれの死についての記事では、「かれ〔ヤロボルク[B2]〕は自分の全収入の10分の1を毎年〔洞窟修道院の?〕聖母教会に献げ」とあり、洞窟修道院と緊密な関係があったことが示唆されている。

434) 銀〔塊〕約120kgと金〔塊〕10kgに相当する。上注324を参照

435) 銀〔塊〕約20kgと金〔塊〕10kgに相当する。

参考文献

- Андреев 2013 — Андреев А. Р. Российская государственность в терминах: IX – начало XX века. М., 2013.
- Барсов 1865 — Барсов Н. П. Материалы для историко-географического словаря России. 1865.
- Бережков 1963 — Бережков Н.Г. Хронология русского летописания. М., 1963.
- БЛДР Т. 4 — Библиотека литературы Древней Руси. Т. 4: XII век. СПб., 1997.
- БЛДР Т. 5 — Библиотека литературы Древней Руси. Т. 5: XIII век. СПб., 1997.
- Войтович 2006 — Войтович Леонтій, Княжа доба: Портрели еліти. Біла Церква, 2006.
- Вортман 2004 — Вортман В. Битва на Перепетовом поле (5 мая 1151 г.) // Воин №15, 2004. С. 15-17.
(<http://www.xlegio.ru/ancient-armies/medieval-warfare/battle-of-perepetovo-field/>)
- Даль 1984 — Даль В. И. Пословицы русского народа: Сборник. В 2-х т. Т.2. М., 1984.
- История культуры 1951 — История культуры Древней Руси. Материальная культура. М.; Л., 1951.
- Древняя Русь 2015 — Древняя Русь в средневековом мире. М., 2015
- Зайцев 2009 — Зайцев А. К. Черниговское княжество X - XIII в.: избранные труды. М., 2009.
- Карамзин 1998 — Карамзин Н.М. Полное собрание сочинений в 18 томах. Том 2. История государства Российского. М., 1998.
- Каргер 1958 — Каргер М. К. Древний Киев : Очерки по истории материальной культуры древнерусского города. Т. 1. М.:Л. 1958 .
- Котляр 2003 — Котляр Н. Ф. Дипломатия Южной Руси. СПб., 2003.
- Куза 1996 — Куза А.В. Древнерусские городища X-XIII вв: Свод археологических памятников. М., 1996.
- Литвина, Успенский 2006 — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Выбор имени у русских князей в X-XVI вв. М., 2006.
- Літопис руський, 1989 — Літопис руський / Пер. з давньорус. Л. Є. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К.: Дніпро, 1989. (<http://litopys.org.ua/litop/lit.htm>)
- Насонов 1969 — Насонов А. Н. История русского летописания XI - начала XVIII века: очерки и исследования. М., 1969.
- Насонов 2002 — Поселения, урочища и реки Черниговской земли (Приложение к очерку) // Насонов А. Н. "Русская земля" и образование территорий русского государства. СПб., 2002.
- Нерознак 1983 — Нерознак В. П. Название древнерусских городов. М., 1983.
- Новгородская первая летопись — Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. М.;Л., 1950.
- Покажчик — Літопис руський / Пер. з давньорус. Л. Є. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К.: Дніпро, 1989. (покажчик географічно-археологічно-етнографічний) <http://litopys.org.ua/litop/lit31.htm>
- Полный месяцеслов — архиепископ Сергей (Спасский) Полный месяцеслов Востока Том I. Восточная агиология. М., 1997. (репринт по изд. 1901).
- Православная энциклопедия — Православная энциклопедия: Электронная версия <http://www.pravenc.ru/>
- ПСРЛ Т.2, 1908 — Полное собрание русских летописей: Т. II, Ипатьевская летопись Издание 2-е. СПб., 1908.
- ПСРЛ Т.9, 2000 — Летописный сборник, именуемый Патриаршей или Никоновской летописью

- (Полное собрание русских летописей. Т. 9). М., 2000.
- ПСРЛ Т.15, 1863 — Полное собрание русских летописей: Т. 15, Летописный сборник, именуемый Тверскою летописью. СПб., 1863.
- РУИНА.RU — Городища Древней Руси (<http://ruina.ru/>)
- Рыбаков 1963 — Рыбаков Б.А. Древняя Русь. Сказания. Былины. Летописи. М., 1963.
- Рыбаков 1972 — Рыбаков Б.А. Русские летописцы и автор «Слова о полку Игореве». М., 1972.
- Рыбаков 1991 — Рыбаков Б. А. Петр Бориславич. Поиск автора «Слова о полку Игореве». М., 1991.
- СККДР Вып.1 — Словарь книжников и книжности Древней Руси Вып.1 (XI - первая половина XIV в.). Л., 1987.
- Словарь Великий Новгород — Великий Новгород: История, культура IX-XVII веков. Энциклопедический словарь. СПб., 2009.
- Словарь-СПИ 3 — Словарь-справочник "Слова о полку Игореве". Вып. 3, Л., 1969.
- Словарь-СПИ 4 — Словарь-справочник "Слова о полку Игореве". Вып. 4, Л., 1973.
- Соловьев 1988 — Соловьев С. М. Сочинения Кн. 1: История России с древнейших времен Т. 1-2. М., 1988.
- СЭ-1 — Славянская энциклопедия: Киевская Русь — Московия. Том. 1. М., 2001.
- Тимофеева 2005 — Тимофеева Т.П. К вопросу о пятиглавии Успенского собора Андрея Боголюбского во Владимире // Материалы краеведческой конференции 2004 г. Владимир. 2005. С. 27-34. (<http://www.rusarch.ru/timofeeva4.htm>)
- Толочко А. 2010 — Толочко А. П. Поговорка Изяслава Мстиславича // Ruthenica № 9, Киев, 2010. С. 158-160.
- Толочко 2009 — Петр Толочко Историческая топография раннего Киева: реальная и вымышленная // Ruthenica. Том VIII. Киев, 2009. С. 151-183
- Толочко 2014 — Толочко П. П. Династические браки на Руси XII - XIII вв. СПб., 2014.
- Щапов 1989 — Щапов Я.Н. Государство и Церковь в Древней Руси, X-XIII. М., 1989.
- Янин 1962 — Янин В. Л. Новгородские посадники. М., 1962.
- Balzer 1895 — Balzer O. Genealogia Piastów. Kraków, 1895.
- Goranin 1995 — Goranin E. Latopis kijowski 1118-1158. przełożył i komentarzami opatrzył Edward Goranin (Slavica Wratislaviensia 86). 1995, Uniwersytetu Wrocławskiego in Wrocław.
- Rusian genealogy — Rusian genealogy: Maintained by: Christian Raffensperger and David J. Birnbaum (<http://genealogy.obdurodon.org/about.php>)
- Raffensperger 2016 — Christian Raffensperger. Ties of kinship: genealogy and dynastic marriage in Kyivan Rus'. Harvard University Press, 2016.
- イパーチイ年代記(1) — 中沢敦夫「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(1) — 『原初年代記』への追加記事(1110～1117年)」『富山大学人文学部紀要』(61号, 2014年8月) 233～268頁
- イパーチイ年代記(2) — 中沢敦夫, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(2) — 『キエフ年代記集成』(1118～1146年)」『富山大学人文学部紀要』(62号, 2015年2月) 287～353頁
- イパーチイ年代記(3) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(3) — 『キエフ年代記集成』(1146～1149年)」『富山大学人文学部紀要』(63号, 2015年8月) 329頁～389頁
- イパーチイ年代記(4) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(4) — 『キエフ年代記集成』(1149～1151年)」『富山大学人文学部紀要』(64号, 2016年2月) 321頁～372頁。

スズダリ年代記訳注 [III] — 「スズダリ年代記訳注 [III]」『古代ロシア研究』22号, 2010年。13～37頁。
ノヴゴロド第一年代記 [II] — 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳 [II]」『古代ロシア研究』13号,
1980年。

ロシア原初年代記 — 國本哲男, 山口巖, 中条直樹訳『ロシア原初年代記』, 名古屋大学出版会, 1987年
宮野 2012 — 宮野 裕「中世ロシアのウラジーミル聖公の教会規定 — 写本系統樹の検討及び試訳」『岐阜聖
徳学園大学紀要・教育学部編』(51号, 2012年) 83～103頁

〔後記〕本稿は共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の成果であり, 共同執筆者, 藤
田英実香は京都大学文学研究科西洋史学専修修士課程に在籍している。